

---

**1 + 1 2**

日野五十鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1 + 1 2

### 【Nコード】

N8603G

### 【作者名】

日野五十鈴

### 【あらすじ】

自動車・バイク部品の製造工場の検査員、松本かさねは、ある日新人検査員である濱田成留の教育を任される。しかし彼女とは以前男の子として逢っていたはずじゃ……??二重人格の後輩をはじめ、個性的な仲間が織り成す物語が今、始まった。

## 夜道とバイクとおにぎりと(1)

俺が初めてナルと出逢ったのは、春とは名ばかりの、まだまだ夜風の冷たい3月深夜のことだった。

その日は残業を終え、夕食…いや、深夜という時点で、もはや夜食かもしれないけど…とにかく食料を仕入れるため、行きつけのコンビニにバイクを走らせていた。

ちなみに、俺が残業することは滅多にある事ではない。深夜のコンビニに立ち寄るのは久々だった。

だから今さらになって後悔するとしたら、あと30分でも早く仕事を切り上げていれば、こんな面倒な事態に巻き込まれはしなかったとつくづく思う。

(さーて、今日はなに食うかなあ)

昨日は揚げ弁だったから、今日はヘルシーに野菜弁当にしようかな、なんて呑気なことを考えながら、バイクを停めてヘルメットを外した、ときだった。

「キミい、こんな時間に何やってるんだね!？」

振り返ればそこには、制服姿のお巡りさんが数人立っていた。

無論、呼び止められたのは俺じゃない。現在満二十歳、近くにある製造工場に勤務するれっきとした社会人。そんな俺が深夜のコンビニに、バイクで立ち寄ったところでなんの不都合もないだろう、たぶん。

自動ドアの手前で呼び止められたのは。

「君、まだ高校生だろ」

「1人か？ 家はどこなんだ」

「学校は？」

遠目でよく見えないが、まだまだ少年と言えそうな男の子だった。

(ん…高校生…か、最悪でも育ちのいい中学生だよなー、ありゃ。いや…年齢のわりに背丈はある方か？ ちと細かい気がしないでもないけど…。しかし目付きの悪い野郎だなあ)

片手にはしっかりとコンビニのレジ袋。少年を見れば弁解も釈明も言い訳もする素振りすらない。それでいて警官の質問攻めにウンザリしてる様子だった。

この少年こそナルだったわけだが、心中で呟いた言葉が事実とだいぶ違っていたことに、俺が気付くのはもつとずつと先のことだ。

(まあでも、俺には何の関係もないわけで。このままスーツとコンビニ入って弁当選んで支払い済ませて出ていったところで、何も問題なんかありゃしないよな。あの男の子とは知り合いで何でもないわけだし、俺が出ていったところでどーにも…あ…)

自分への言い訳はそこで強制終了となった。

絶対零度の冷たい眼差しが、一瞬だけ、自分の目に注がれる。

（あー…やっぱりダメだわ。目があっちゃった…）

「…。あの一、すみません。彼がどうかしたんスか？」

こうして俺は『その子の親とは知り合いで』などと嘘八百を並べ、間違いなく送り届けますからと、お巡りさん達からナルを引き取ったのだった。

## 夜道とバイクとおにぎりと(2)

お巡りさんの姿が完全に見えなくなるまで、俺たちは街灯の下を黙々と並んで歩いた。まさか警察官を目の前にして、ノーヘルでバイクにニケツというわけにもいかないのです。

ナルは逃げるでもなく抗うでもなく、大人しく横をついてきてはいらぬ。いることはいるんだが、俺の方をチラリとも見ようとしない。真っ直ぐに前を見る横顔はどこまでも上の空。奴がそんな態度を徹すものだから、俺もずっと黙りっぱで夜道をテクテク歩いてる。

それでもコンビニの明かりが遠目にぼうつと見えるところまで来たとき、俺は初めて、というよりやっと、という感じでナルに話しかけた。

「…じゃあ、俺は次の信号のところで曲がるから。もう11時近いし、気をつけて帰っ…あっ!?!」

あることを思い出し足を止める俺。

しかしこれは効果的だった。

最後のすつとんきょうな声が引つ掛かったのか、俺のことなど眼中にないかのように振る舞っていたナルが、初めてこっちに興味を示したのだ。

「…どうした」

ぶっきらぼうにそう訊く声は、男の声にしちゃ少し高めかな？ という気がしないでもない。だがそんな冷静な判断など、この時の俺には出来やしなかった。なぜなら。

「…弁当買うの忘れてた!！」

「……………」

すっかり呆れ果てたんだろ。なんだそりゃ、と言わんばかりの顔でナルに溜め息をつかれた。しかしそんなこと気にしていられない。

…そう。俺はナルをお巡りさんから引き取ったまま、結局何も買わずにここまで来てしまったのだ。思い出してみれば結構腹が減っている。

「あゝ、どーすっかなー」

わざわざ買いに戻るのには面倒だし、かといって深夜営業の飲食店はこの近くにはない。アパートまでの道程にあるコンビニはさっきの所で最後だ。

どうしようかと本気で悩んでいると、不意にレジ袋が横からズイと突き出されてきた。

「…え？」

レジ袋のある方向を見ると、相変わらずの無表情でナルがレジ袋を握っていた。反対の手にはなぜか鶏五目おにぎりとホット緑茶。

「握り飯。…礼だ、やる」

「へっ？」

俺はちよつと笑った。ぶつきらぼうで切り捨てるかのような口調だが、これが彼なりの感謝の仕方なんだろうと思ったから。せつかくの感謝の意をムゲにはすまい。ありがたく袋に手を伸ばす。

「うっそ！ まじかよー」

ありがとねー。そう極力人好きのする笑顔を心がけつつ、小さめのレジ袋からさっそく中身を取り出した。

…それにしてもコイツ…。

こうやって隣に並んでみると、身長わりに本当に細い。華奢だ。光りモノは一切なし。耳にピアスひとつしてないが、他のイデタチはいかにも最近の若者といった雰囲気醸し出している。

髪はニット帽にすっぽりでよく分からないが、襟足にかかる後ろ毛はブリーチしたように明るいブラウン。それでいてちよつとクセがあるみたいだった。

そしてこの、繊細でキレイな顔かたち。

男に向かって『かわいいー』とか言う女の気持ちが出来て分かった。それだけ線が細いのだ。

ただ、…切れ長の目だけが鋭くつり上がっていて、ナルの容姿を単



に『可愛い』という形容詞だけで終わらせてはいなかった。

(まあ、どうでもいいことなんだけどさ)

おそらくもう、二度と会うことは無いだろうし。

そして俺は手にしたおにぎりを見て、…ガクンと、頭を垂れた。

「……。あのさー、なんつで自分は鶏五目お茶セットなのに、俺には消費期限ギリの鮭おむすび1個だけ？」

「ッ、うっさい黙って食べ松本！」

冗談の通じない少年だ。ハイハイ分かりました頂きます黙って食います…って。

「まつも…？ え？ なっ、なんで、俺の、名前知って…」

本気で動揺する俺を一瞥してから、ナルは俺の胸元を指差した。

「…作業着…名札、ついてるぜ」

「！ あっ」

言われて胸元に視線を落とすと、確かに『松本』と刻印された名札が付いている。着替えるのは面倒だし夜も遅いから構わないだろうと、つつい名札付きのまま作業着姿でバイクに乗ってたのか。

実に決まりが悪い。

「『HLC東京』…？聞いたことない会社だな。何やってるト」  
「？」

社名に興味を持ったのだろうか、ナルは首を傾げて話しかけてきた。

「あ？ ああ、車とかバイクの部品、作ってるところだよ」

「ふーん。下請け？」

「まあそんなとこ…俺にだけ名乗らせるのか？」

「……………」

彼は長い沈黙の後、溜め息混じりに『ハマダ、ナル』とだけ吐き捨てた。

「…おれの名前じゃないけどな…」

「？ ……高校生？」

「今んとこはな。先週卒業したばかりだから、今月まで籍は高校側にあるわけだし」

「ああそ」

返事が不自然なところで切れてしまっても無理はない。俺の皺無し脳味噌は、今までにない作業効率をもって計算問題を解いていた。

先週卒業したばかりのハマダナル。そして今年で21歳になる俺が高校を卒業したのは、今からピツタリ2年前だ。

つまり、ナルは俺より2つ年下というわけで。

「そっかー俺の2個下かあ…って、えーっ！？ キミ、じゅ、18歳だったの！？」

ナルは軽く嘆息した後、両の口角をほっくりとあげた。

俺はドキツとした。

「なんだかなあ〜、最初決まっておれのこと、みんな年下に見えちまうんだろうな。…ま、いいけどさ」

そう軽口をたたいて笑う顔は存外、可愛らしい。鋭く切れ上がった目が少しだけ柔らかくなるからだ。すぐ隣で女の子だと言われれば、あっさり納得してしまうだろうほどに。

元々の顔がかわいーからしょうがねえけど。

「…じゃ、おれこの先、直進だから。…あんた次で曲がるんだろ」  
言われてハツと気付いたが、いつの間にか例の交差点にまで着いてしまっていた。ここを右折して真っ直ぐ行けば、俺が一人暮らしするアパートに到着する。

「じゃあな」

「あ？ ああうん。気をつけて帰れな〜」

ナルはちょっとだけ振り向くと、規則的な足取りで青信号の向こう

に消えていった。

ナルの着ている黒いジャケットの、ファー付きフードが左右に揺れるのをちよつとだけ見送ってから、俺は再びメットをかぶってバイクのエンジンをかけた。

…俺はこのとき、まだ彼を『ハマダナル』だと信じたままだった。

## 新人検査員（1）

俺の名前は松本かさね。

けど女でもニューハーフでもない。

名付け親は俺の親父。理由・『南総里見八犬伝』とかいう江戸時代……だったかな……とにかく昔の有名な小説に書いてあったらしい一文。

『男子に女の名前をつけると、その子は立派な青年に育つ』

これを物は試しと出生届に書いてみた、という逸話が残されている。かさねという名は『奥の細道』で松尾芭蕉に同行した弟子、河合曾良の『かさねとは八重撫子の名なるべし』という句から取ったのだと聞いた。昔の親父は文学青年だったのか？

そのおかげなのかどうなのか。現在の俺は身長176cm、体重65kg、結構ハードな肉体労働を日々こなすバリバリのガテン系労働者に成長した。

ちなみに、かさねという字は漢字で『累』と表記する。他人ならば例外なく見た瞬間に『ルイ』だと思っから、正式な書類以外では名前をいつも平仮名で書いていた。

下の名前のインパクトが強すぎるのか、名字が松本なんだから『まっちゃん』とか呼ばれてもいいだろうに、生まれてから21年と少

し、俺はずつと下の『かさね』という名前で呼ばれ続けていた。

もちろん、それは上司だって例外じゃない。

「…じゃあ、かさね。今日からお前、ここの担当だから」

そう言つて山崎やまざきさんは俺の肩、ではなく、なぜかケツを勢いよく叩いた。棟が違うのに入社当時から色々と面倒見てくれた彼は、今度の異動先では直属の上司となる。

異動といつても実際には同じ工場内で所属ラインが変わつただけだから、仕事の内容は前のラインとそれほど差はないわけなんだけど。

そう。8月の連休明け早々、お盆前に予告されていたとおり、俺は本日をもって配属が変わつた。

最初に言つとくべきだったが、俺の勤め先『HLC東京』は…東京とは名ばかりで、本当は千葉県にあるんだけど…自動車部品の製造工場。俺はそこで完成品のチェック係…検査員をやっている。

「…あの…山崎さん？　なんで俺がその…、新人教育なんてやることになつたんスか。しかも検査員…メチャクチャ責任重大っスよ」

山崎さんは苦笑いしながら、ロゴ入り作業帽子からはみ出している癖っ毛を掻いた。

「んー、だつて検査員ン中でお前が一番トシ近いし。それに、かさねがいた13ラインと製品タイプ同じだからさ」

検査員は流れ作業の末端区域で、ライン内で作られた製品はここで

最終チェックを受け出荷される。つまり万一ここで不良品を見逃したりしたら、クレームあんどリコールという、致命的な痛手を負うことになりかねないのだ。

のし掛かるプレッシャーにビビりまくってる俺を面白がって、山崎さんは目元を意味ありげに和ませる。

「そんな堅苦しく考えなくても。新人といっても新卒者採用で、今年4月からずっと検査やってんだから。教育も最初っからしっかり仕込んである。ただプレス機とか挿入機とかラインの設備が一新して、今の彼女じゃ見破れない不良とか出やすい状況だからさ」

(ん？ 彼女？)

「検査員が2人もついてれば、それだけ不良流出の可能性も低くなる……あ」

山崎さんはコンベアの向こう側に手招きの動作を投げた。どうやら例の新人クンを呼ぶらしい。だが…か、彼女？？

(え？ え？ てことは教育する相手、もしかなくても女！？ しかも新卒ってことは、18歳か19歳ってことだよな！)

新卒者採用での新入社員は、4月最初の朝礼で紹介されるのだが、その日、俺は持病の診察の予約が入っていて、午前中は少し遅れて入社したのだ。今度の配属先4ラインとは同じ敷地内とはいえ棟が違うから、俺は彼女の名前も顔も知らない。

(えー！ てことはつまり、つい半年くらい前まで高校生だった女の子とお近づきになれちゃうわけ！？ うっそ、まじかよー)

途端にテンションがハイになる俺。しかし興奮が頂点に達して気がついた。好みじゃないタイプの女の子だったらどうしよう。

と、その時プレス機の死角から例の新人クンがひょっこり現れた。帽子を目深にかぶって顔は判然としないが、スラリと背の高い女の子だ。

「かさね。彼女がお前の教育する相手の、ハマダナルさん。しっかり鍛えてやってくれな」

「…え…？」

ハマダナルと紹介された彼女は軽く会釈した。

(ハマダ、ナル？ …どっかで聞いたような…)

「しばらくは彼女が検査したものを、かさねが再検査するって感じでやってくから。…かさね、もし何か不良品よこしてきたら、殴ってもいいからな」

「えー！ それやったら俺、先輩としても男性としても人間としても最低じゃないスカー！」

山崎さんはガタガタの歯並びを見せてニヤニヤ笑う。

でもそれだけだった。俺をハマダさんに紹介するのかと思いきや、もう一発俺のケツを叩くとどこかへ行ってしまった。

(あれ？ 俺のことはハマダさんに紹介しなくてもいいのかな。そ



れともすでに説明済みか？)

不安にかられてハマダさんをチラ見すると、同じくこっちを見ていた彼女と目があってしまった。よくよく見ると人の良さそうな、下がり気味の優しい目付きをしている。

彼女はすぐ俺から視線を逸らしたが、俺は構わず笑いかけた。誰かと目が合うと放っておけないのが俺の性格だ。よく知らない相手でも目が合ったら無視しないこと。ガキの頃からそう耳タコなくらい聞かされて育ってきたから。

「よろしく」

何が気にかかったんだろう。ハマダさんは弾かれたように俺の方を向いた。誰かがここまでビックリする顔を初めて見た。

けど、それも一瞬のこと。すぐに表情だけで笑うと、ハマダさんはようやく声を聞かせてくれる。

「松本かさねさん、っていうんですか？ 名前が」

電話越しに聞いたら絶対『奥様ですか？』と訊かれるだろう、落ちて着いた声。

「うん、そう。累計の『累』って書いて『かさね』…あれ？ なんとハマダさん、俺の名字知ってるの？」

ちょっと驚いた。山崎さんは1号棟に入ってからずっと『かさね』の方で呼んでたし。やっぱり事前に俺のこと、ハマダさんに紹介していたのだろうか？

しかしハマダさんは静かに笑って、俺の胸元を指差した。

「いえ、だって、名札に…」

「！ あ」

作業着に付けた白いプレートの名札には、ハツキリ『松本』と力強い字体で刻印されている。そのせいだったんだ。

納得して、俺はふと思い出した。

もうだいぶ前、誰かに名札を指摘されたことが無かったか？

(…そうだ。 たしか、あの時も)

まだ3月の頭。残業帰りの深夜に、未成年の夜遊びと勘違いされた男の子を引き取った、あのとときだ。そこで、お礼代わりに鮭おにぎりを貰い…これはあんま関係ないか…それから『松本』と刻印された名札を指摘されたんだった。

俺は記憶を深いところまで掘り下げる。あの、ちょっと可愛い顔した、けれど目付きと言葉遣いだけは可愛くない男の子。彼の名前は  
何て言ったっけ？

吐き捨てるように呟いた声が、雷みたいに脳裏に閃いた。

「…ハマダ、ナル…」

自分が呼ばれたと思ったのか、ハマダさんが検査台から顔をあげる。

俺は1秒にも満たない短い間に、彼女の顔と記憶の中のナルの顔とを照らし合わせて、…なんでもない、と首を横に振った。

(んなわけないよな…)

少なくともナルは男の子でハマダさんは女子。それに目付きなんか全くの別人だ。偶然にも名前と年齢が一緒というだけで、人相も声色も雰囲気も違う、赤の他人だ。

そう自分に言い聞かせても、なんだかしっくりこなかった。

だから、俺は大火傷を覚悟してハマダさんに再び呼びかけた。

「あの…ハマダさん」

「はい？」

目のやり場に困った挙げ句、俺は彼女の名札に視線を固定する。『HLC東京・濱田』あ、ハマってそっち書くんだ。

「俺、…前に君と、どこかで逢ってるかな…？」

「え…」

この玉碎覚悟の質問には濱田さんではなく、横入りしてきた同ライの柏木先輩かしわぎに。

「な〜にイキナリ口説いちゃってるんだよお！」

そう冷やかされた。

## 新人検査員（2）

「あー…疲れた…」

定時…から更に3時間ほど残業し、どうにか納期ギリギリで製品を作り上げ、ついでにオプション残業（ 그리스 交換とか）を片付けた俺は、休憩所の机に突っ伏した。残業時間、計4時間なり。

「残業大嫌いの松本くんが残業ですかー？ めっずらしいねえ」

棟内にある喫煙スペースで死にかけている俺の頭を、柏木さんが向かいの席からペンの尻でつついてきた。明日4ラインで作る製品を、納期に合わせて決めているということだ。ライン責任者もなかなか大変らしい。

「柏木さん…今日俺がやってた作業、本ツ当に今まで濱田さんが全部1人でやってたんスか？」

製品タイプが同じといえど同じ検査員といえど、前にいた13ラインでは設備的な環境の違いのせいか、一番速くても30秒に1つのペースで製品を作っていた。けれど今回の4ライン設備では、最速で1つに18秒。

つまり18秒という短い間に検査・修正・梱包すべて1人でやらなくてはいけないのだ。

30秒に1つというペースも充分すぎるほど速いと思っていたが、13ラインにあった12秒間のゆとりが、今は懐かしい。

「最初の1ヶ月くらいは、山崎さんが指導でついてたけどね」

「すげえ、と俺は感心した。てことは濱田さん、入社2ヶ月にして全部任されたのか。」

「へえ？ 新人なのに結構期待されてるんだ」

「この棟じゃ誰もが知ってるよ。採用試験でトップだったのを、他の工場や部署と争って奪い取った逸材だってさ。学校の成績も新卒者の中じゃダントツらしい」

なぜかそこで柏木さんがニヤニヤしだした。

「なんだ。お前、あの子に興味あんのか？ 惚れたな」

「ちっ、違いますよー！」

「どおだか？」

柏木さんの攻撃はそこで終わった。タイミングよくオプシヨン残業（日報処理とか）を終えた濱田さんが通りかかったからだ。これも検査員のれっきとした仕事だ。

「お疲れ様でしたー」

「「あ、お疲れー」」

ぺこりと頭を下げ、工場を出ていく姿を見て、妙な不安がチクリと胸を刺した。

（お疲れ様って…いま何時だっけ？）

ケータイで時間をチェックすると、もう9時半近い。

「濱田も帰ったことだし、かさね、そろそろあがったら？」

くわえ煙草で柏木さんがそう促す。

「どうせ今日もカップ麺かコンビニ弁当だろ。そろそろ飯作ってくれる女、見つけるよ」

4歳上の先輩らしい余裕綽々の表情。

が、よりもよって『付き合っている彼女とは目下熱々の仲』と噂されている柏木さんに言われて、なんだか無性にムカついてきた。

「…柏木さん」

「ん？」

だから、こっちも立ち上がって言い返してやった。

「…彼女と同棲してる人はいっすよねー！ 明るい部屋と温かい飯がいつでも待っていてくれるんでしょねー！ んじゃお疲れ様でしたッー！」

ひきつった笑顔でそう叫んだ俺の背中に、なーにヤケになってんだ

よ、とやっぱり笑い含みの声が投げ掛けられた。

### 新人検査員(3)

仕事帰りにバイクでコンビニ。それが俺の日課。

連休中は買い置きしておいたカップ麺ばっかだったから、今日は飯モノを買うつもり。今回はお巡りさんにも不良少年にも会うことなく、いつもどおりに夕飯を購入できた。

陳列棚に鮭おにぎりと鶏五目おにぎりが並んでるのを発見して、ちよつと笑った。同時に嫌な予感がした。

(…雰囲気とか目付きとか声色なんかは別人だけど…髪とか顔とか、ちよーそっくりなんだよな)

いや、まさかそんなことはあるまい。そう自分に言い聞かせつつ、俺は夜道にバイクを走らせていた。

だが、予感というのは決まって嫌なときしか当たらないものなのだ。アパートまでバイクで直進約5分というところまで差し掛かったとき、予想だにしない場面に遭遇してしまった。時間的には夜で、場所的には人気のない廃屋。

(あれ？ あそこにいるのって…)

濱田さん？ にしては様子がおかしい。しかも風体の悪い兄ちゃん



たちと一緒にいる。仲睦まじくというよりは、カツアゲされている被害者みたいだ。と思っただら廃マンションのコンクリの壁に追い詰められて『お小遣いあげるから』とか言われてるじゃないか。

(…え？ もしかしてあの人たち、ひよっとしなくてもヤバい人？  
それでもって濱田さんは、不良に絡まれてるってことで…つまり)

援交せまられてるー！？

未だかつて落雷の被害に遭ったことはないが、雷が直撃したような衝撃とはまさにこのことだ。考えてみなくても若い女性が夜道の人歩きなんて、危険すぎるに決まってる。

くっそ、なんでこんな時に限ってケーサツいねーんだよ。というか、濱田さんが帰るときに『送ってくよ』とか言えば良かったのかもしれないけど。

どうしようどうしよう。いや落ち着け俺。同僚のピンチを目撃したからには、とるべき行動は決まっているはずだ。

(そ、そうだ！ こういうときは、まず…)

俺はバイクから降り、なけなしの勇気を振り絞って腕を挙げた。大きく声を張り上げて。

「よお！ 待たせたなナル」

題して待ち合わせ大作戦。大というわりには情けなすぎる作戦だ。でも乙女のピンチに、手段なんか選んでられるかっ！

案の定、不良4人組のアテンションは俺にプリーズされた。生きた心地がしなくなる。

(うう…こ、この隙に濱田さんが逃げて、誰か助けを呼んでくれれば…っ)

だが、濱田さんは俺の筋書きどおりには動いてくれなかった。

「…へっ？」

ガンッ！

という鈍くて痛々しい音がしたかと思うと、顔中ピアスだらけの不良4の体が視界から素早く沈んでいった。

「なん…？」

不良1・2・3が振り返った先では、濱田さんが鉄パイプを握ってその場に立っていた。代わりに消えた不良4が、濱田さんの足元で意識を落としている。

(っっていうか、あの鉄パイプどっから)

「ンだテメエ…なめたマネしやがって」

「小娘だと思って手加減してたが、もう容赦しねえ…」

短気な不良たちはバキバキと両手の関節を鳴らすと、再び濱田さんに向き直った。その目は紛れもなく本気だった。

…やられる。

俺は自分でも分からないうちに叫んでいた。

「っ、早く逃げる濱田さ」

バキッ！

不良3の鼻に上段回し蹴りがクリティカルヒット！ 鼻血を撒き散らしてその場にまた1人ぶっ倒れた。

これで形成的には1vs2となつたわけだが…って！

(ええーっ！？)

不良2はどこからか角材を持ち出して、不良1は濱田さんが回し蹴りをかました隙に鉄パイプを取り上げていた。しかし濱田さんは巧みに不良1と2の攻撃をすり抜け、空手が合気道か少林寺か分からないけど、信じられないことに男2人とタメで張り合っている。

さながら学園ドラマの乱闘シーンみたいだ。よくできてる。

「って、マジかよ…」

呆気にとられながら、じゃあ俺は何のために助けに出ていったの？

と少しだけ哀しい気分になった。いや、最近の女性はみんな強いけど。

濱田さんは角材を振り上げた不良2の腕をとり、動きに合わせて裏拳をかまして伸した。これで形成は1vs1になった。そもそも俺

は頭数には入ってないみたいだし。

(へー…まさか、濱田さんにこんな特技が…じゃない！ それよりケーサツケーサツ)

「うらっ！ 死ねやー！」

ポケットからケータイを探っている間に、無意味に怖い関西弁の脅し文句が聞こえた。顔を上げると目の前に鉄パイプが。

死ねやー！ って言われてるのは…俺か？

「！ やば…っ」

逃げるヒマはおろか、両腕で顔を庇う時間もなかった。ただ鉄パイプが俺の頭上に振り下ろされるのを、真っ白な頭でぼんやりと見ていた。

(…アレでアタマ殴られても…まあ、最悪でも死なない、よな？)

己の末期を垣間見た気がして目を閉じようとしたとき…本当に突然、目の前でずつと描かれていた銀の弧が消失した。

誰かが鉄パイプを横に突き飛ばしたのだ。

それが誰の仕業なのか確認する必要もなかった。

「！ ぐ、あ…っ」

鉄パイプを蹴り飛ばされた不良1は、手の中に残った喪失感に戸惑

つまま、濱田さんの背負い投げが一本勝ちに決まって完全に戦闘不能となった。

つまり、不良どもは全員のされたということだ…。

「…あの」

「やっべ…やりすぎだった。どーしよ、コレ…」

その声に俺は違和感を覚えた。言葉ではなく、声だ。

本人はここまでするつもりは無かったらしい。やっちゃったー、と言わんばかりの顔で辺りの光景を見渡している。…だが。

「…おい？」

俺の呼び声にパツと振り返った彼女は、確かに濱田さん、だった。

…だが。

「…濱田…さん…？」

本当は、訊く意味なんてなかった。

鋭く切れ上がった、可愛くない目付き。ぶっきらぼうで、吐き捨てるような口調と声。…間違いなかった。

「…松本…！」

「…ナル…なの、か？」

「……………」

鋭い目を見開いて、3月の夜そのままのハマダナル、は小さく、頷いた。

## ナル（1）

ナル side

おれの名前はハマダナル。

でもそれは、おれの名じゃない。

おれが『おれ』として『生まれた』とき、すでに意識の底に存在していた役目があった。

『ひとつの身体に、ふたつの精神。

先に生まれし姉の精神は、成留<sup>なる</sup>。

後に生まれし弟の精神も、ナル。

弟・ナルに与えられし役目は姉・成留の影となり、成留を“実体”としてこの世に成し、留めおくこと』

おれは『生まれた』時から濱田成留であり、ハマダナルだった。

『ナルは成留の影。彼女から片時も離れず、守り、愛しなさい』

おれは自分が成留の何者なのかを知っていた。だから『生まれてから10年以上、意識の底にあったその役目に逆らうことなく、ずっと成留の身体に『同居』してきた。』

『弟・ナルに与えられし役目は姉・成留の影となり、成留を“実体”としてこの世に成し、留めおくこと』

それこそが、本来ここにいるはずのない『おれ』が『生まれてきた理由だったから。』

おれに言わせると、人間という生き物は本当にどうしようもない。

人間はこの世に起こる全ての事象、周りにある全てのモノを、自分を基準にして計っている。

自分の物差しを絶対と信じて疑わず、都合の良いすぎる規格から少しでもズレているモノは、容赦なく切り捨てる。

だから人間が世界に何十憶といっても、奴等が『大切な人』と呼んでいる規格内は片手で数えられるほどしかない。

( しょうがねえなあ… )

最初は怒るよりも先に呆れてしまったものだ。奴等がその事に無自覚なのにも、このときただ嘲笑するしかなかった。



けれどこの人間の性質は、成留にとって実体を成し留めておくのに不都合なものらしい。

どういうわけか昔から、成留は誰かの『大切な人』になれないでいる。

誰かのせいでは、もちろんない。ただ『濱田成留』というモノが誰の物差しで計っても規格外になってしまふ。ただそれだけのこと。

天性の規格外。

そしてそれは、成留という“実体”を徐々に消滅へと導いた。成留は幼いながらも自分が不必要な存在なのではないかと肌で感じ取り、自分で自分の存在を許せなくなったのだ。

『私がいるから、何かがうまくいかないんだ』

… 濱田成留という、異分子がいるから。

その想いが成留の精神を少しずつ削っていき、影であるおれにも、成留の精神が欠けていくのがハッキリ分かった。そのぶん、影であるおれの精神が日に日に肥大してゆく。成留が物心ついたときにはもう、その気になればハマダナルとして『分離』することも、もはや難しいことではなくなった。

成留の精神は、もう自分で成し留めておくには限界だった。だから、

… おれは、成留から『分離』した。

… おれが『生まれて』きたのは、成留をこの世に成し留めておくためだったから。

そして『分離』したハマダナルとして最初にしたのは、欠けゆく成留の精神を、これ以上壊れないように抱きしめること。

『…成留』

その名を呼ぶのには、少しの抵抗も違和感もなかった。

『おれが、一緒にいるから…おれがお前を一生守ってやる…』

…その日からおれはハマダナルとして、気が向いた時と、成留が危ない状況に置かれた時だけ『外』に出てくるようになった。必要があれば人と接するとき、『成留』を演じて辻褄が合うようにし、成留が混乱しないよう適当に記憶も書き替えていた。

だから成留は、おれの存在を知らない。それでも成留の精神がまた欠けていく時だけは、あの時と同じように成留の精神を抱きしめることにしている。

『ナルは成留の影。彼女から片時も離れず、守り、愛しなさい』

…おれだってちゃんと『いる』のに、好きな女にさえ存在を知られていないなんて、悔しすぎるから。

だからあの3月の夜、うっかり『ナル』として松本と知り合ったのは迂闊だった。

あいつが成留の就職先の社員だと知ってたら、余計なこととも言わずさっさと逃げていた。おかげでおれは『生まれて』初めて、成留としてだけでなくナルとしても、誰かと付き合うハメになってしまった。

この面倒な事態を受け入れた結果が、後になって己の首を絞めることになるかも知らずに。

## ナル（2）

「…だからおれは元々『濱田成留』っつー女で、今あんたの目の前にいる『ハマダナル』とは中身だけ別人なんだよ」

「…すみません。もう一度説明お願いします…」

あの、物凄く可愛くない目でギン！と睨まれた。まさに絶対零度の視線、大型冷凍庫の中で瞬間凍結された気分。

不良4人のいる廃屋から逃げ出した俺たちは、ちよつと離れた神社でヤンキーよろしく座り込んでいた。

くくりつけたロードバイクの横にある石段に座った濱田さん…改めナルは、ライトブラウンで癖毛な前髪を苛立たしげにガシガシかき混ぜる。男らしい。

「あーのーさー！これで説明すんの3回目なんだぞ！？いい加減この辺で理解しろよ！ていうかなんであんたにいちいちこんなこと、説明しなきゃなんねーんだよっ！」

もつともな理由。けど俺にだって言い分はある。

「んなこと言われたってさあどうすりゃいいんだよ！自分は二重人格ですってカミングアウトされて！！そりゃあ訊いた俺のが悪いかもしないけど、俺にとっちゃドラマかマンガでしか知らない

世界なんだぞ！？ しかも」

言いかけて、でも結局全部口にしてしまう。

「相手が自分の職場の同僚だなんてさ…はあ、明日からどういう顔して会えつての」

「今日と同じでいいだろう。後が面倒だから、ここであなたと会った記憶は適当に書き替えといてやる。成留は自分が二重人格だったこと、知らないからな。あとはあんたが黙ってりゃ済む話だ」

「…冷たいこと言うねえ…え、なんでキミが会社でのこと知ってるの？」

少なくとも今日1日、濱田さんがナルになることは無かったのに？

「おれの方には成留の記憶もあるからな。あんたの下の名前が“累かさね”ってのも、山崎のお気に入りでケツ叩かれまくってたのも、成留に『どつかで逢ってる？』なんてへ々なナンパみたいなこと訊いたたのも、ちゃんと知ってるし、憶えてるぜ？」

「わー言うなそれをゆーなっ！ てかキミがそれを言うか？ そもそもそのあの日あの時あの場所でキミと逢わなかったら、そんなん訊かず<sub>に</sub>いたんだからなッ」

恥を発掘されて焦りまくる俺。その記憶こそ濱田さんの頭の中からリセットしてくれ！

「てことはなにか？ 濱田さんはキミになったときのことは憶えてないけど、キミは濱田さんの記憶を持つてるうえに完全支配してる

ってわけ？ そんなバカな！ だって俺の知ってるドラマやマンガなんかじゃ、どっちもお互いの記憶しか持ってたぞ！？」

「…んーまあ、人それぞれってやつ？ ドラマとかマンガの情報が間違ってるのか、そもそもおれのが特殊なのか、分かんねえけどさ。他と比べたことねーし。…松本」

ぶちぶちと力無く咳く声は、改めて聞くと濱田さんのそれと音域は変わらない。ナルとして聞いたときには甲高い方だと思っていたが、女性として聞くとこんなにも低く思えるものなのか。

「このこと絶対、誰にも言うんじゃないぞ」

「…言いませんよ…」

約束を口にしながら頭の中では、中の上くらいの女性の顔って男に張り付けたら可愛くなるんだー、とか不謹慎なことを考えてた。

ライトブラウンの癖っ毛も、170cm弱ある身長も、思えば濱田さんそのままだ。

（口数が少ないのも、やっぱり濱田さんそのままなのかな…？）

今日1日、必要最低限でしか話さなかった濱田さんを思い出し、なんとなくそう思った。

ただ、始終ふうわりと微笑んでるような濱田さんの無口とは違い、ナルの場合はとことんまでぶっきらぼうだけど。

ナルは俺がおこってやった清涼飲料水（後れ馳せながら鮭おにぎり

のお礼)を一気に飲み干してから、すつくと立ち上がった。

「じゃな、松本。飲み物ごちそうさん」

「じゃな、つてキミ」

石段から身軽に飛び降りたナルを呼び止める。

意外にも素直に立ち止まったナルはまた、あの可愛くない目付きでギロツと睨んできた。そういうところだけ妙に反抗的だ。

「…なんだよ」

「…このまま帰る気？」

「だけど？」

さっきの、不良4人に絡まれていたシーンが脳内で再生される。

「待てよそんな！ 危ないよ。さっきのこともあるし、キミン家まで送ってくよ。いや、むしろ送らせてくれ！」

ナルが信じられないような表情を見せた。

濱田さんに初めて話しかけたときと同じ、鋭い目を丸くして心底びつくりしたという顔になったのだ。

誰かがこんなに驚くのを見るのは2回目だけど、同じ人だからなんだかそんな感じがしない。

そして濱田さんの時と同じように、ナルも表情だけで笑った。ただし濱田さんみたいなの『微笑み』とは言い難い、簡単なスイッチひとつでどんな冷笑にも変化できる笑顔だ。

「…なに、心配してくれてるわけ。なんで？」

「なんで、って同僚だもん。フツー心配くらいするだろ」

ごく当たり前の社交辞令を言ったつもりなのに、なぜかナルは妙に考え込んでしまった。きつと俺に送ってもらうべきか、思案してるに違いない。

俺はロードバイクに載つけたままだった濱田さんのバッグを手にとつて、放り投げながらあえて訊いた。

「嫌か？」

そのまま帰るかと思いきや、片手で受け取ると軽く肩を竦めただけだった。



### ナル(3)

ナルの家は会社から程近い場所にあった。本人によれば工場まで徒歩20分。車なら5分かからないだろうに、あいにく車庫には1台だけがピツタリ駐車されている。

「いつも歩いて来てんの？」

「ん。運転はできるけど、買うカネないし、駐車場もないし。チャリとかバイクとか、二輪はあんま好きじゃないし」

ふうん、と頷く俺の横をナルが通りすぎていく。

「送ってくれてありがとな。こんどこそサイナラ」

「あ、ちょっと待って！」

今度こそナルは苛立たしげに立ち止まる。

「あー、ったくなんだよさつきから！」

「あ、いや。最後にも1個だけ訊いところかなーって」

「もう1個？」

「そ。ナルって、どういう字い書くのか」

なんだそら、という顔をされた。男の子として見ればキレイな顔つきだから、その顔で人をバカにしたような顔をされると心にグサツとくる。

「ナルつてのがどーゆー漢字で書くのか知ると、何だつてえの？」

「別に…でも、本当の名前知らないままつても、変な気分だしさ」

親切にもそう言ってやれば、今度こそ本当に鼻で笑われた。何がそんなに可笑しいんだ。当たり前前にそんな会話しかしてこなかった俺には、何がナルをそうさせているのかサッパリ分からない。

「…成し、留める」

「え？」

何の予告もなしに告げられたから、危うく聞き逃すところだった。確認のためもう1回訊けば、またあのムカつく顔で笑いやがる。

「1度しか言わねーよ。信じられないなら、本人に直接訊け。あいつはおれと違ってお人好しだから、答えてくれると思うぜ」

お人好し？ モトは同じ人じゃん。

そんなツッコミを入れるヒマもなく、ナルはそう言ってさっさと背を向けた。どこまで俺を除け者にする気だ。ちくしょー。

(まあ…べつにいいんだけどさー)

呼び止めても無駄だと思ったから、俺はバイクのエンジンをかけながら『サヨナラ』を返してやった。

3月の夜には見えなかった、後頭部でくくられたライトブラウンの髪に向かつて。

「明日、絶対に休むんじゃないぞっ！」

そう言ってやればまたあの、人をバカにしたような笑顔だけ残してドアを閉めやがった。

くそ。

## ナル(4)

翌朝、俺の言葉どおりちゃんと出勤してきたナル。濱田さんは、昨晚のことなど全く覚えていないようだった。嘘みたいな話だが、本当にナルが濱田さんの中の記憶を書き換えたらしい。

(あーでもなんかすっげー変な気分だよー)

これほど秘密を持つのが苦痛だった事はない。人に言い触らしたいとかじゃなく、相手が露ほどにも知らないから自分ひとりで抱え込むというタイプの苦痛だ。それが俺のじゃなく第3者のものでもなく、相手である濱田さんのだから尚更だ。

(まー確かに言い触らす必要もないし、言ったら言っただでナルにまた睨まれっしな。こうやって濱田さんとして仕事してる間も、絶対俺のこと監視して…)

「なあゝにボサツとサボってんだよっ!」

考え事はその声に遮断された。誰かに後ろから首をホールドされたからだ。

「さっ、サボってませんって山崎さ…」

「山崎班長は会議中! ひっでーなあ同期の顔も忘れたのか?」

同期？

ホールドが解かれて振り返ってみると、後ろでニタニタ笑ってるのは確かに山崎さんじゃない。

「よー久しぶり。相変わらず低血圧そな顔してんのな〜」

「龍一！？」

烏丸龍一。俺の高校時代からの悪友だ。酒もタバコもパチンコも、みんなこいつに教わった。

3年前に正社員として採用されて、俺は品質管理課、龍一は設備保全課に配属された。

ただしこいつは俺のいる本社ではなく、千葉支社にとばされたはずだが。

「いつから本社に？」

「今年の4月から。朝礼の新卒者紹介ときに『今日から本社勤務となりました烏丸龍一です』って挨拶したんだけどなあ」

そいつは失敬、と俺は軽く謝った。通院のため遅れて入社したのでその挨拶のときにはいなかったのだ。異動の掲示はもちろんされるのだが、ほとんどが有期社員 正社員というものであまりマジメに見たことがない。

久々の再会に感動する前に、龍一の顔をじっくり見て…それから周りを取り囲む視線に気付いて…俺は悪友の肩をポンと叩いた。

「…で？ 千葉支社では何人くらい斬ってきたの？」

目の前にいる同期で入社した親友は、男の俺から見てもかなりのイケメンさん。おぼちゃんウケするようなハンパな二枚目じゃなく、若い女の子からもキヤーキヤー言われるタイプの男前だ。

金髪にピアスという典型的チャラ男だが、危ない感じはどこにもない。陰のあるホストというよりは、少女マンガに出てくるモテモテ美少年みたいな雰囲気があった。

背も俺よりデカイ。何しろ高1の時から170cm以上あったくらいだ（ちなみに当時の俺は169.8cm）。

そんな奴の隣にいたもんだから、俺が高校時代どれほど惨めな思いをしてきたことか。だのにこの野郎ときたら、来るものは拒まずで3年間に何十回も女を取っ替え引っ替えしていたのだ。

そんな彼に面白半分、妬み半分でつけたあだ名が『千人斬り烏龍<sup>ワイロン</sup>』。烏丸龍一を略して、烏龍ってわけ。このあだ名はウケがよかったようで、保全課ではこの名で浸透しているらしい。

その烏龍は自慢げに笑うと、律儀にも指で数えてから答えてくれた。

「んー、2ケタ？ いや、ギリ1ケタかな、まだ」

「…相変わらずだなー」

千葉支社でも斬りまくっていたようだ。

「そういつお前はどーなんだよ。新人の女の子2人も入ったのに、まだお話もしてないとか？ まっさかねー」

悪いかよ！

「成留ちゃん気を付けな！。こいつ年上好きとか言ってるけど、女と見たら狼になるから。隙見せちゃダメだよ。食べられちゃうよ」

「お前が言つな。…って龍一！ いま『成留ちゃん』つつつた!？」

なんだその馴れ馴れしい呼び方は！

「ああ。だってオレたちラブラブだもん。なー？」

「…本当に？」

濱田さんはポツと頬を赤らめて俯いた。まさか！

「違いますよお。だいたい烏丸さん、私より和泉ちゃんいずみとのが仲良いじゃないですかー」

何にもないんだと分かって、俺はホツと胸を撫で下ろした。…し、心臓に悪い…。

(あーでも、アレかな。何かあったら確実にナルにボコられてるよな。龍一の奴)

昨日の、ナルvs不良4人組の場面を思い出してしまい、そう納得する俺。

が、ここで気付かなくてもいい事実気付いてしまった。

（あれ？ ってことは俺、龍一に対してもナルのこと、秘密にしようかなきゃいけないのか）

親しげに話す龍一と濱田さんを見て、俺は不安を覚えた。

目の前にいる濱田さんは、一見すると大人しい子だ。柔らかな物腰で礼儀正しく、検査中を除けば始終ふうわりと微笑んでいる。自己主張するのも控え目で、無口な彼女の落ち着いた声はどこまでも静かだ。

少なくとも、龍一はそう思ってるフシがある。

「……………」

昨日ちゃんと理解したつもりだったのに、俺は寒気を抑えられなかった。

よりもよって、濱田さんが、あのナルと同一人物…？

（ありえないっーの！）

冗談じゃない。普通だったならそんなこと、あつてはならないはずだ。

だが3月の夜も昨日の出来事も、事実であり決して白昼夢などではない。この大人しい女の子が、何らかのスイッチをONにしただけで、あの冷たくてぶっきらぼうで可愛くない少年になってしまうのだ。



いけないことを知ってしまった。

あとの自分にできることは、他人に被害を撒き散らさないよう注意することだけ。

(…龍一、最初に謝っとくわ。今まで黙ってて本当にゴメン…)

知らぬがナントカで、こりや黙つといた方が賢明だよな…。

ナルのことは決して誰にも話すまいと、俺は改めて心に誓った。

## 梅酒ロックと巨峰サワー（1）

異動から3ヶ月が経ち、この1号棟にもすっかり慣れてしまった。

4ライン他、全体で8本のコンベア組織から構成される1号棟は、半数の4本で縦割りした2班に分かれている。数字の若い方の4本がA班、残り4班がB班で、そのA班を名目上、まとめているのが山崎班長。

またラインごとにも責任者がいて、普通はその検査員がこれを兼ねる。だが俺の配属された4ラインの検査員である濱田さんは入社1年に満たない新人のため、今は元副長の柏木さんがライン長に任命されていた。

将来有望株とかでなく、ただ単に『4ラインの中で1番経験の豊富な男性社員』という理由で、なんだけど。

そんなわけで、新天地（ちょっと大袈裟？）に来て早3ヶ月。当然のようにこんこんと話す機会の多い柏木さんと山崎さんとはすっかり仲良しになった。

最初こそ『不良品撲滅対策』くらいしか話題もなかったのが、今では公2：私8くらいにまで話せるほど親密度が上昇している。

若い女の子とお近づきになれたかという点からいえば、濱田さんは例によって無口だし、もうひとりの新人・和泉さんとはラインが違

うから、滅多なことがない限りは話さない。

それでも龍一がしょっちゅう現場に来るせいか、和泉さんとは着々と距離を縮めつつある（濱田さん曰く、龍一は和泉さんと仲がいい）。

だからその『お知らせ』を1番先に俺に持ってきてくれたのも、当たり前のように柏木さんだった。

「…昇進祝い？」

「今度、佐伯さんが班長に昇格するんだと。で、いま山崎さんに頼まれて会費カンパしてるわけ。男子は5000円」

渡されたペラ紙を拝借する。『会場・鶯宿梅。日時・来月の第2土曜日、夜6時半までに集合。会費・男子5000円、女子4000。以上、幹事・山崎幹彦』…。

「佐伯さんが？ …へえ」

後になって知ったことだが、佐伯さんは『HLC東京』開業以来、製造部で初めて昇進した女性社員なのだそうだ。

噂によれば今年入社13年目で、その間に溶断からプレス作業、はては検査まで歴任してるという。

俺が入社したての頃、検査方法のイロハを最初に叩き込んでくれたのも佐伯さんだった。だから付き合いは一応、深い部類なのだろうが。

「かさねも行くだろ？」

「俺？ うーん…」

佐伯さんのサバサバした性格を思い出し、しばし思案。

「…そうスねー。若い女の子が来るなら、行ってもいいっスよ」

「あ、そのへんは問題ない。和泉も濱田も強制的に誘つといたから、絶対に来るって」

瞬間、本気で聞き間違えたかと疑った。…和泉と、濱田、も？

「…和泉さんは龍一が誘つてたから知ってますけど…。…濱田さんって何号棟の濱田さん？」

「何号棟、って1号棟に決まってるだろ。4ラインの濱田成留」

うそで。

「え？ ええっ！ 和泉さんはまだ分かるとして、濱田さんも来るんすか。昇進祝いに。飲み会に。マジ？」

濱田さんが？ あの、おっとりしたおとなしー子が飲み会に参加？  
想像つかない。

「なー？ もちろん来るよなあ？」

すぐ横の（俺目線では向かい側にいる）濱田さんに真顔で確認する。  
本人にしてみれば冗談のつもりで顔を作ったのだろうが。

( 柏木さん、真顔でドス効かせすぎデス… )

けれども濱田さんはちゃんと心得てるもので、ちょっとだけ考え込んでから。

「そうですねー。松本さんが来る前まで、再検査でお世話になってることですしー」

「てか『鶯宿梅』って結構距離あるじゃん。車もチャリも乗らないのにどーやって」

柏木さんの真顔にも動じなかった濱田さんがここで表情を変える。

「松本さん…？ 私が2輪車苦手だって話してないのに、どうしてそのこと…」

「え？ あ」

やっべ、ナルのときに聞いたんだっ！

「いやいやいやいや、そりゃみんな知ってるから。いくら家がすぐ近所でも、歩いて出社してくる奴はそういないし。だろ？ かさね」

「は？ あーはい。そーデスねっ」

ナイスタイミングな柏木さんのフォローに、俺は心から感謝した。

「だとしてもさ、本当にどうやって来るつもり？ 確か4ライン全員休出だから、親に送ってもらおうわけにも…」

一瞬、濱田さんの表情が曇った気がした。

でもきつと気のせいだろう。俺が首を傾げるより先に、濱田さんはふうわり微笑んで答えてくれる。

「…大丈夫です。その日は佐伯さんも休出で、会社から直に送ってくれないと仰ってましたから」

これには俺だけじゃなく、柏木さんの目も点になった。

「佐伯さん、が？ …そりゃまた珍しいな。なんで」

「ええ。運転は出来ますけど車がないので出席しないかもと言ったら、送り迎えは自分がするから絶対に来い、と」

「…へー」

結構、お気に入りだった。

## 梅酒ロックと巨峰サワー(2)

飲み会当日。

「かさねさあ、こないだからミキの下で働いてるんだって？」

乾杯から早速ビール瓶1本を(ひとりで!)カラにした佐伯さんが、俺に絡んできた。わざわざ上座から、ちよっと重たそうな腰をあげての登場だ。後ろから山崎さんもグラスを両手に持つてついてくる。

「智恵子、あんまりかさねに抱きつくなよ。お前とはしすぎだぞ」

「…ふん。なにさ偉そーに。そうだ、かさね。ミキに絶つ対騙されちゃダメだよ。こいつ可愛いヨメとムスメがいるくせに、あっちのケがあるからさ」

冗談だとは承知していても、マジ顔で力説するから思わずギクリとしてしまう。対して山崎さんは笑いながら、明らかに動揺し始めた。

「ばっ…！ ちげーよお」

「何がチガウのさ。こないだの棚卸しときだって、ずーっとかさねにくっついてたじゃないか。そうじゃなくても毎日かさね、かさねって」

「や。だってあれは、かさねこっちに来たばっかで説明とかモロモ

口が必要だったからさ」

なんか、佐伯さんが女性だてらに出世した理由が分かった気がする。

「だいたい智恵子こそ！ お前だって再検査導入した頃から濱田にベツタリじゃないか。今日だってここまで乗せてきたんだろ」

「えー？ だってあの子、なんか放っておけないトコがあるじゃん。マイペースだったり、よく笑うけど怒ったり泣いたりするタイプじゃなかったり。だから面倒みてるうちに、なんとなく？」

それは否定してるつもりなのか。当の濱田さんは向こうの席で和泉さんたちと一緒に飲んでいる。

佐伯さんはちよつと淋しげな表情をつくって、俺に抱きついたまま一杯あおった。

「…でも、なんか憎めないのよねー。礼儀正しいし頑張り屋さんだし。あと、あれカナ？ 最初に成留ちゃん見たとき、なんかミキに似てるなーって思ったから」

途端、急に話題にのぼった山崎さんが激しくむせ返った。

「だ、大丈夫デスか山崎さ…」

「げほっ！ て、はああ？ 似てねえよ！ どの…んっ、どの部分が似てるってんだよっ」

「背が高いトコとか癖っ毛なトコとか歯並びの悪いトコとか。あと笑った顔なんかカンジ超そっくり！ ホント似てるよねー。かさね、



そう思わない？」

急に同意を求められて困ったが、言われてみれば確かにそうだったので素直に頷いた。

「…そうすね。言われるまでピンとこなかったっすけど」

「んだよ、かさねまで」。柏木い、お前もそう思うか？」

俺の真正面で柏木さんがニヤついた。柏木さんは俺とは逆で、名字の方が呼びやすいという理由から、下の名前『健<sup>けん</sup>』ではなく『柏木』の方で呼ばれてる。

「俺も。名前聞くまで正直な話、身内かと思ってましたから…本当は山崎さんの隠し子なんじゃないですか？」

山崎さんの表情が瞬時に豹変。

「柏木、てめえ、俺のこと何歳だと思ってんだよ！そこにいる智恵子と同期だったの！」

「ギャーもうバカそれ言わないでよミキっ！トシがバレちゃうじやん！」

「…バレちゃうも何も、とっくに知ってますよ。おふたりが同い年だったことも。隠し子ってのは冗談に決まってるじゃないですか。というか、血の繋がりは否定しないんですか」

「ミキにとっては老けて見られたことの方がショックなんだよね？」

「るせーなっ」

「山崎さん、いつそのことそのヒゲ剃ったらどうです？ 10歳は確実に若くなりますよ」

確実に職場よりもぶつちやけている。アルコールが体の中に入っただけで、人は意味もなく陽気になるもんだ。

（そーいや新人の女の子は何を飲んで…あ！ 龍一の奴また…っ）

保全課の連中を大勢引き連れて、自分はちゃっかり和泉さんと濱田さんの間に席を確保している。しかも何も入っていない濱田さんのグラスに、巨峰サワーらしきドリンクまで勝手に注いでる。

ちよつとだけ、いやかなり不安になった。

話を弾ませて親密度を上げ、酔わせたところを『送ってくよ。家どのへん？』これが龍一の常套テクだ。

「ああああの野郎俺を除け者にしやがって！」

「こらー！ かさね、なに逃げようとしてんの」

龍一たちに合流しようとしたのだが、立ち上がる寸前に襟首を捕まれて佐伯さんに引き倒された。会場が和室で本当に良かった。畳だから転んでもそんなに痛くない。

「あんたさつきから食ってばっかで全然飲んでないじゃん！ ほらグイッといきなさいよグイッと」

「ゲイツと、ってこれ、梅酒ロックじゃないスか！？ ダメダメダメ、俺、今日バイク運転するんスから！」

そつえば、濱田さんは龍一の入れたサワー、飲んだのかな…？

気になって濱田さんの方を見ると、ほんの一瞬、濱田さんがグラスに視線を落とす寸前まで視線が絡み合った。

## 梅酒ロックと巨峰サワー(3)

成留 side

「ねね、勇輝<sup>ゆうき</sup>、これふたり同時に端っこから一緒に食わない？」

ステイックサラダのキュウリ一本を口にくわえて、烏丸さんは私の隣の隣：烏丸さんから見て左隣にいる和泉ちゃんに笑いかけた。

ポッキーゲームの要領で、両端から一緒に食べあうつもりらしい。

「えー？ 一緒について、烏丸さんですか？」

「えーってなんだよ！ オレとじゃ不満かつ」

和泉ちゃんも烏丸さんもそう言うけど、どちらもまんざらではなさそうだった。

「なんか、熱々じゃん？」

「イヤー！ 熱々って何よ成留う」

和泉ちゃんとは同期で中学の頃から一緒。私のことを『濱田さん』ではなく『成留』で呼ぶ、数少ない人だった。

その『数少ない人』のひとりである烏丸さんは和泉ちゃんとは反対に、仲良しアピールなのか肩を組んで見せた。

「なーに照れてんだよ勇輝、熱々に決まってんじゃんよ。オレたち昨晚やつと熱い絆で結ばれた仲だろー？」

「！！！！」

「…そんなことありませんッ！」

すっかり出来上がってる烏丸さんの言葉よりも、肩に回された腕をほどいた和泉ちゃんの方が否定文の方が説得力がある。

…けど、何しろ相手は『千人斬り烏籠』さん。一体どっちが真実なのか、絶対に和泉ちゃんの方が正しいと言い切れる自信がない。

「話は変わるけど成留ちゃんってさー、その髪、天然なの？」

今まで和泉ちゃんにベツタリだった烏丸さんが私に話し掛けてきたのを期に、保全課の皆さま方は一斉に和泉ちゃんを質問攻めにした。

モテモテ状態の和泉ちゃんを半分面白く、半分羨ましく思っただけで眺めながら、烏丸さんの質問には逆に問い返した。

「どっちだと思いますか？」

訊けば烏丸さんは渋い顔をする。

「え〜？ だってさあ天然でそんな明るい茶髪ってあんま無くない？」

しかもその、コテで巻いたよーな髪。ダブルで作った感じするじゃん。それでも天然もんなの？」

コテ？ ああ、アイロンのことか。工業高校出だから仕方ないかな。

「父がこういう髪質だったんです。ちよつと赤くて、癖があつて」

「へ〜。…てか成留ちゃん、キミ全然飲んでないじゃん！ 車運転してきたわけじゃないんだろ？」

「だって私まだ未成年ですしー」

「そんな問題ないつて。それとも何か、先輩であるオレの酒が飲めないつてのカー？」

「そついうワケじゃないですけど…」

「じゃ、どーゆーワケなんだよつ。ちよつとー、山崎さーん！ あんた一体どーゆー教育してるんスカ！？ 新人がオレの酒なんざ飲めないなんていつてるんスよ！」

驚いて向こう側を見ると、佐伯さんに抱きつかれた松本さんと目があつた。慌てて視線をグラスに移すと、視界の隅つこに山崎さんの足が。

「ちよつと失敬。えつと、こつちのグラスだな…？ ほんじゃ、2人が出逢えた運命にカンパーイ！」

言つて山崎さんは持たせたワイングラスに、自分のグラスをカチンとぶつけた。

私ではなく、和泉ちゃんのグラスに。

「……………」

所在無くてサワーの入った自分のグラスのふちをなぞっていると、それを察してか烏丸さんが面白そうな笑みを閃かせる。

「そーそー知ってる？ 山崎さんの髪もあれ、白髪染めとかじゃなくて天然なんだってさ。色も質も生まれつきらしいよ？」

「そうなんで…んふっ!？」

不意打ちで烏丸さんが、巨峰サワーの入った私のグラスを唇に押し付けてきた。驚いて息を飲んだ拍子に一口飲んでしまったみたいだ。

それっきり、意識が。

## 梅酒ロックと巨峰サワー(4)

「えー。ではお時間ですので、一旦はここでお開きにしまーす」

幹事・山崎さんの音頭で一次会は終了となり、出入り口に近い人から順番に和室を出ていった。

最後には俺と佐伯さんと、彼女にお酌するようムリヤリ連れていかれた濱田さんだけが残った。

「じゃあ、俺も今日はこのへんで…」

「かーさーねー！」

本格的に酔った佐伯さんに今度は押し倒された。

「あんたまさか自分だけ帰るつもりい？ 上司はちゃんと送っていきなさいよね」

もうほとんどのし掛かった状態だ。あらゆる意味でアブナイ世界に連れていかれそうになりながら、俺は息も絶え絶えに言い訳を探す。

「送って、って俺、今日バイクでここまで来てるんすけどッ」

「あんたの家ここから近くでしょ？ 二次会の後にもまた来ればいいじゃない」



「で、でもデスねっ」

「だいたいね」

佐伯さんは俺から離れて立ち上がると、親指で後ろをグツと示した。

「あんたが帰っちゃったら、誰が成留ちゃん送っていけばいいの。まさかこんな夜遅くに、若い女の子ひとり歩いて帰れ、なんて言うんじゃないでしょうね？」

「あー…」

そうだった。

濱田さんは佐伯さんの車でここまで来たはずだから、帰る足は必然的に、誰かに送ってもらうしかないわけだ。

ここぞとばかりに強力な切り札を持ち出されて、俺はなす術もなく言われるままに了承するしかなかった。

ここで突き放したら確かに俺、最低だ。

「まったくもう…。だったら最初から乗らないか飲まないかすれば良かったんですよ」

「何か言った？」

地獄耳で独り言を感知した佐伯さんは放っという、俺は濱田さんにニコツと笑いかけた。

「じゃ、帰ろうか濱田さ…!?!」

千鳥足の佐伯さんを細い腕で支えながら、濱田さんは俺のところまで近寄ってくる。

…だが。

「はい。松本さん、よろしくおねがいします」

間延びした声も濱田さんと何ら変わらない。…けど。

「……………」

「どうかしたんですか？ 松本さん」

そう首をかしげて訊いてくる目は、明らかに『濱田さん』のものじゃなかった…。

## 梅酒ロックと巨峰サワー（5）

酔い潰れた佐伯さんを後部座席に寝かせつけ、濱田さんを助手席に乗せた俺は、佐伯さんの愛車を夜の国道へと走らせた。

カーステレオから聞こえてくる最新ヒット曲と、後ろから聞こえる佐伯さんの寝息以外、この車の中に聞こえてくる音はない。

俺は黙ったまま車を走らせ、濱田さんも黙って窓の外を見ていた。

だが、車が赤信号に差し掛かる頃、俺は意を決して濱田さんに話をふった。

「。。。濱田さん…じゃ、ないよな？」

『濱田さん』はチラリとこっちを見ると、しばらくの沈黙の後、なにかを諦めたかのような深い溜め息をついた。

切れ長の鋭い可愛くない目付きが、俺の眼をギンと睨み付ける。

「。。。よく分かったな」

俺はようやく肩の力を抜いた。これで難関突破できた。

「だって俺『濱田さん』送ってくの、これが初めてだもん。このまま何も訊かないで家に直行したら『何で知ってるんですか？』って

話になるだろ？ … ナルのときだったら、話は別だけど、さっ

青信号になり、乗り慣れていないMT車を慎重に発進させる。

「いつからナルだった？」

「あんたのトモダチにムリヤリ酒、飲まされたとき。あいつ、酒飲めないから。飲んだら強制的におれが出てくる仕組みになってんの。何されるか分かんねーしさ」

「あああそうだ！ 濱田さん、龍一の奴に何か…！」

「へーきへーき。成留はあーゆー、顔のいい男ってあんま好きじゃないから。なんか変なこと言われても、ニコニコして軽くかわすに決まってる」

「あ？ ああ、そうなんだ？」

嘘を言うタイプじゃないので、信じてもいいだろう。ちょっと安心。

「あんた、会社じゃモテモテだったのな。そうは見えないけど」

「そーか？ 普通なんじゃね？ 濱田さんだって佐伯さんにラブコールされてるしさ」

瞬間、ナルは露骨にイヤそな顔をした。

力無く背凭れに頭ごと預けてどこか遠く前を見ながら、いつもの落ち着いた、けれどもナルとしては甲高い声でボソツと呟く。

「…いいよな、良品は」

「え？」

「次の信号右折したら、そのコンビニで停めてくれ。こっから先は車だと入れねーし」

「ああ、うん。…？」

さっきの独り言が引つ掛からないわけでもないが、とりあえず言われたとおり右折して、コンビニの駐車場に車を停めた。

「…じゃあ、夜も遅いし、気を付けて」

もう何度言ったか分からないセリフを言いながら、助手席を降りたナルにバッグを手渡した。いつものパターンならそのまま帰るのに、どうしたことが受け取っても俺の顔をじっと見るばかりだ。

「？　どうかしたか」

「…かさね」

次の言葉を待っていると、ナルは目元を少しだけ和ませた。

「どうした？　あんたの下の名前は『かさね』でいいんだろ？」

「うん。って、あ！」

初めて名前で呼ばれたことに動揺する俺をよそに、ナルは淡々とした口調で続けた。

「かさね、送ってくれた礼にひとつだけ教えといてやる」

「へっ?」

「誰にでも優しいのは構わないけど、優しくする相手を間違えるな。優しさを倍返しにしてくるような奴に、半分しか返してこない奴と同じ優しさをもって接するな。それは倍返しにする奴、すっげー傷つけるから。それができないんだったら、関わるのはやめておけ」

俺はポカンと間抜けな顔でナルを見るしかなかった。…なんか今すっげーマジな話されたような…。

一方でナルは後悔の色も深く、額に手を当てて肩を竦めた。バカなことを言った、とでもいいかげんな表情だ。

「…まあいい、とりあえず頭の隅にでも置いておけ。忘れない方が賢明だぞ? いずれ必要になるからな」

「いずれ、って?」

「その時が来れば分かるってことだ」

だから、それが何だっただよ!

反論するより先にナルは例によって、俺に何も言わせないままドアを閉めて立ち去った。サヨナラのサの字も残さずに。

コンビニの灯りが途切れたあたりから、ナルの姿は見えなくなった。

「……………」

思えばナルとの『サヨナラ』はいつもあっちからだ。振り返らず立ち去ってゆく後ろ姿を見るたびに、俺はなんだか、ひとり取り残された虚無感を覚える。淋しいような、もどかしいような。

（きっと、宴会が終わって、酒が切れたから。ただ感傷的になっただけなんだ…）

「…づう…ん…」

ナルに対する甘い感傷は、佐伯さんの呻き声で中断された。何かに取り付かれているような、おどろおどろしい声。

「佐伯さんっ?」

「…ダメ…もう食べられない…」

「……………」

なんだよそれ、と俺は力無く思った。心配して損した。

（何なんだよ、今日は）

ガラにもなく可愛い寝言だ。意外な一面に呆れるより先に笑ってしまい、俺は佐伯さんを愛する家族の元へと送るべく、夜のコンビニを後にした。

『…忘れない方が賢明だぞ』

ナルの言葉の意味も分からないままに。



## 疑念は生八つ橋と共に(1)

突然ですが、クレーム出ちやいました。

「...ということですので、今後このような事がないよう充分気を付けるように。あと、検査員は全員その場に残ってください。以上」

今年の4月に入って、今期で初めて入ったクレームだった。情報が入れば、直ちに班長から班員に情報が伝えられるのがこの会社のルールだ。山崎班長は手帳を片手に、たった今入ってきたばかりだというクレーム情報を打ち上げた。

出したのは俺じゃない。もちろん成留でもない。

なのだが、こうしてクレームが出てしまった以上、製造部員としてはより一層の注意を要求される。もちろん品質を管理するという面でも、検査員にはとことんまで容赦ない。

内容は部品違い。得意先で製品を車体に取り付ける際、ネジが穴に入らなかつたことから発見された。手っ取り早く言うと、違う部品と気づかずこちらで組み付けてしまったのだ。

今回のケースは『検査過程で発見できる不良』とみなされ、担当作業員よりも検査員を重点的に指導することになったようだ。

とはいえ部品の大きさや径はミリ単位以下の規模で違ってくるわけ

だから、何かしらの間違いは起こり得るものなんだけど。

(…大丈夫かな…)

山崎さんの棒読みな『注意事項』をメモリながら、俺は左側にポツカリ空いたスペースばかり気にしていた。

成留がまだ入社していないのだ。

「…なあ、かさね。成留ちゃん昨日、倒れちゃったんだって?」

昼休みが終わって早々、相変わらず1号棟でフラフラしている龍一が俺に訊いてきた。

本気で心配してるというよりは、ただ興味本位で訊いてみただけみたいだった。たぶん和泉さんからでも聞いたんだろう。

そう、昨日の残業中に成留の様子がおかしくなり、再検査している俺の目の前で、突然倒れてしまったのだ。

意識はあったものの、かなり朦朧としていて、保護者も家にはおらず総務課の人が付き添って病院送りという事態となった。

「成留ちゃん、大丈夫なのかな」

「うん。一応、午後から出勤することになってるらしいけど」

「…こんにちは」

聞き覚えのある落ち着いた間延びしてる声。振り返ってみると。

「濱田さん！？ もう出てきて大丈夫なの？」

「はいー。昨日はどうも、ご迷惑をおかけしました」

そう言っただけで頭を下げる彼女は、自分の足でしっかりと立っている。

「で、医者は何だった？」

「ええと、それがよく分からないらしくて… 血圧が急に下がって、自律神経が乱れて、それに突発性のメニエルが重なったんじゃないかって仰っていました」

鉄の事しか教わってない工業高校出身者にはサッパリ理解不能。同じ結論に達したのか、龍一も『じゃあ不治の病じゃん！』とか言う。

「あ、でも薬も処方されましたし、朝から調子もいいので大丈夫だと思います」

「本当に？ 無理しちゃダメだよ、濱田さん」

はい、とニッコリ微笑んだ顔を見て、俺は去年の秋、飲み会の後に家まで送っていったときの、ナルの言葉を思い出していた。

『誰にでも優しいのは構わないけど、優しくする相手を間違えるな。優しさを倍返しにしてくるような奴に、半分しか返してこない奴と同じ優しさをもって接するな。それは倍返しにする奴、すっげー傷つけるから。それができないんだったら、関わるのはやめておけ』

…どっぴり意味なんだ？ ナル…。

「松本さん？」

逆に心配そうな声で成留に声を掛けられてしまい、自分が長い間ほーっとしていたことに気がついた。慌てて平然を装い製品を手にする。

「ああ、じゃあ今この製品つくってる最中だから。図面はコレ。一応サンプルを確認して、それから検査始めて」

はい、と素直に検査台に向かう成留を確認し、俺は目線で山崎さんを探した。だが。

（あれ？ いない…）

せっかく成留が出社してくれたというのに、知らないままでいいのだろうか。

「…。あのー、松本さん」

「あ、はい」

コンベアの向こうで成留が、何とも言えない不安な表情で俺を呼んでいた。

「いま流れてきた製品なんですが…ネジの形と大きさが、図面とち

「よつと違つんです」

「ええ!?!」

言われて製品を受け取ると、それは今さっき注意されたネジ違い!

「あ、まだ1つだけなんですけど、大丈夫でしょうか…?」

「…いや、確か1つでも違う部品がついた製品が流れてきたら、  
今まで作ったやつも選別するはずなんだけど…」

問題なのはクレーム情報を知らないまま、あっさり不良品発見しち  
やっただ成留の方だよ。

(なんかこの子、俺以上に検査の才能、あんのかも…てゆーか俺、  
今の4ラインにいらなくね?)

なんだか少し、もの哀しくなった。

## 疑念は生八つ橋と共に(2)

「成留ちゃん！ よかったねえ本当に心配したんだよー」

コーヒープレイクに入って早速、成留は佐伯女史に抱きつかれた。

元々俺のいた3号棟の製造部員だったのだが、昇進に伴ってこの度B班班長となったのだ（A班とB班は同じ1号棟にある）。

「ど、どうもご心配おかけしまして…」

熱烈すぎる歓迎に、さすがの成留も少し戸惑ってるみたいだった。年下の夫と幼い娘がいるというのに、この溺愛ぶりはどうなんだろう。

「いいかげん、そのへんで離してやれよ智恵子。濱田まだ病み上がりなんだし」

灰皿に煙草の灰を落として言ったのは山崎さん。不良品を発見したのを期に内線で呼び出し、今まで作った同製品の選別作業を佐伯さんと一緒にやっていた、そのすぐ後だ。

案の定、佐伯さんは年齢に似合わない膨れっ面で成留をきつく胸に抱きしめる。

「なによー。部下が病み上がりで出勤してきたのに、電話があった

からって顔も出さないようなダメ上司に言われたくはないねっ」

「あ、さつきまで山崎さんいなかったの、あれ外線だったんですか」  
言ったのは山崎さんと灰皿を共にしている柏木先輩。

「ああ、ちょっと…急用の電話がかかってきて」

そういえば、と佐伯さんが思い出したように成留から腕を離した。

「さつき総務から連絡があってね、お家の方とお話がしたいって」

「え？」

「あーそれ、きっと昨日の件じゃない？ 保護者が家にいなかったから」

成留の隣に座った和泉さんが口を挟む。そこに佐伯さんが後に続く言葉を差し入れた。

「さつき家に連絡したら、お父さんが電話に出てね？ 今日、会社に来てくれるって」

「ええ！？」

「お父さんかー。そういや、濱田の髪って父方の遺伝だったよな」

「ええ、はい。ですが」

「へー。そりゃいいや。ぜひ見てみたいな、成留の親父さんの天然……」

瞬間、その場の空気が硬直した。

「……あれ？ 俺、何か変なこと言っちゃった……？」

隣の柏木さんが、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で煙草の火をもみ消した。

「……かさね……お前、いま濱田を『成留』って呼び捨てたよな」

「！ あ……」

しまった、と思ったときにはもう遅かった。みんなそれを聞いてしまっていた。

なんだか変な方向に勘違いされている。その証拠に俺と成留を除く全員が、何か言いたそうな顔でニヤニヤ笑ってる。

(……な、ナルのときには名前、フツーに呼び捨ててたから……！)

しかし『ナル』の存在が周知されてない以上、そんな言い訳が通用するはずもない。

混乱するツルツルの脳味噌をフル稼働させ、慌てて他の理由を探した。だが哀しいかな、言い訳のイの字も出てこない。

「ちっ、ちが……！ そっという意味じゃなくて」



「松本さん。そちらの方が呼びやすいでしたら、別に構いませんよ。和泉ちゃんなんかいつもそう呼んでますし」

コレが引き金となって、もうあとはチーム一丸のヒューヒューコー

「もー、お前等つきあっちゃえよ！」

「てかもう結婚ケツコン。だいたい松本あんど濱田ってさー、なんかのコンビ名みたいでややこしいっつーの！」

「…だってさ。どうする？」

和泉さんまでもが冷やかしくくる。

けれど成留の方は慣れたものなのか、意外と余裕な感じで受け流していた。

学生時代はモテたのか、それとも単に神経が太いのか？

「どうするも何も、結婚できないもん。まだ19歳だから」

「親の承諾さえ得られれば、未成年でも結婚はできるんじゃない？」

「その親の承諾が得られないからねえ」

「でも、片親の承諾だけでも充分なんじゃなかつけ？ たしか」

「うん。だから、片親だけでも承諾が得られないから、まだ結婚はできないんだよ」

ぽかんと、妙な空気がその場を包んだ。その時。

「どうも、お邪魔します」

ノックの音がした後に、初老と言える年齢の男性が、のったりした声で白髪頭を下げて入ってきた。

どちら様ですか？ と誰かが訊く前に。

「伯父さん！」

「伯父さん!？」

最初に声を張り上げたのは成留で、続いて声に出したのは山崎さんだった。

「ど、どうしたの急に」

「急にも何も昨日お前が倒れたって電話があったから、こうして出張先から帰ってきたんじゃないか」

それに、と伯父さんは紙袋を持ち上げる。

「せっかくだから、上司や同僚の皆様にもご挨拶をと思ってな」

そう言って伯父さんは俺たちに頭を下げた。

「初めまして、濱田成留の伯父でございます。いつもコレがお世話になっております。このたびは本当にご迷惑をおかけして…」

そこで伯父さんは言葉を区切った。わざわざどうも、と立ち上がる。うとした山崎班長も、近くにいないと分からないくらい硬直する。

「伯父さん？」

「あ…いえ、どうもすみません。これはつまらないものですが、皆さんで召し上がってください」

「あ、生八つ橋ですね。ありがとうございます…ござい、ます…」

どちらも何かぎこちない。山崎さんはこういう場面、初めてなのか？

一通りの社交辞令が終わった後、山崎さんに連れられて伯父さんは客室へと案内された。扉が閉められると注目は自然、成留の方に向けられる。

「あの人、成留ちゃんの伯父さん？」

「はい…わざわざ京都出張から帰ってきたみたいですよ」

あ、それで土産が生八つ橋だったのか。納得する俺の斜め前で、和泉さんが思い出したようにハツとした。

「成留…！ ごめん。あたし、すっかり忘れてた」

「いいよ。気にしてないし、バレても問題があるわけじゃないし」

「え？ なに、何かあるの？」

しーっ、と人差し指を唇に当てる和泉さんの行動も虚しく、成留は訊ねられるままに答えてしまう。

「私の親は内定が決まった後に亡くなりまして…他に親戚がいないものですから、今は伯父のもとに居候してるんです。もう被扶養者じゃなくなるわけですから、わざわざ面倒な手続きをしてまで養子縁組する必要もないだろうって」

「……………」

「……………」

言うまでもなく、その場の全員が言葉を見つけられずにいた。もちろん俺も黙っていた。

(…なんだか、すんげー重い話になってきたぞ)

「あ。それで…結婚できないって言ったのか」

「親が両方いないわけだもんなー…」

「で、でもさ、べつに付き合う分には問題ねーんじゃないのっ?」

わざと明るい口調で話題を変えられる。

柏木さんが煙草をくわえたままの格好で、俺の背中を勢いよく叩いた。バンバンと。

「かさねー、頑張って濱田をモノにしちゃえよっ!」

「えーっ、だ、だから違うんですってばーっ！」

無意識のうちに成留を見れば、いつもどおり微笑んでいる。

重たい空気は払拭されたし、成留もそれほど気にしてないみたいだけど…この誤解だけはなんとかなんねーのかな。

### 疑念は生八つ橋と共に(3)

例の倒れた件があつて、成留は定時を告げるチャイムが鳴ると会議室まで呼び出された。

もちろん流れ作業の末端区域がいなくなるわけだから、4ラインは久々に定時で終わったということになる。

「あー、こんなに早く帰るの久々だなー」

그리스交換や機械のオイル注しなんかもあるけど、それは1時間で片付くだろう。

そしたら着替えてコンビニに直行！ のはずだった。

「ちよい待ちー、かさねっ」

出入口の手前で呼び止められてしまう。振り返らなくても声だけで柏木さんと察しがついた。

「なんスか？」

「なんスか？ じゃないだろ。濱田の伯父さんが持ってきてくれた生八つ橋、まだ山崎さんには渡ってないだろ？ 持ってってやれ」

「ああ」

コーヒープレイク中に出ていった後、山崎さんは一度も戻ってこなかった。

生八つ橋は山崎さんと成留の分を除いて、もうみんなに配ってしまつてある。

「会議室にいるはずだから。お前以外にいま手の空いてる奴いねーし」

「そついうことなら、いいスよ。べつに」

会議室は1号棟に隣接する、接客室やロッカールームや社員食堂を有した建物の2階にある。階段をのぼって真つ直ぐ進むと、ちょうど一番奥が会議室だ。

「…うだったのか」

通路と部屋を隔てる薄い壁越しに、接客室からの声が漏れて耳に届いてきた。

誰かお客様でも来てるのだろうか。しかし。

(あれ? この声、山崎さん? でも会議室にいるはずじゃ…)

「まさか、君がここにいるとは思わなかったよ。そうでなければ学校斡旋とはいえ、成留をこの会社に就職させたりはしなかった」

(この声はたしか…成留の伯父さん?)

「貴方が濱田成留の保護者を名乗って電話に出たと知ったとき、正直驚きました。なにせ20年も会っていなかった自分の身内が、部下の伯父だというんですからね」

「…そんなにも、成留のことが嫌いですか。幹彦くん」

幹彦くん？

立ち聞きするつもりじゃなかったが、妙な胸騒ぎに足が動かない。

上司と部下の伯父、という関係にしては、幹彦くんという呼び方はあまりに馴れ馴れしすぎないか？ それに、身内って…。

壁越しに山崎さんのせせら笑いが聞こえた。

「好きか嫌いかで言われれば、嫌いですよ。でも俺はそれ以上に、濱田の姓を憎んでいます」

「…幹彦くん…」

「…濱田成留という名前を見たとき、まさかと思いましたよ。でも旧字を名乗るハマダの姓なんて、滅多にいるもんじゃない。しかも、あの女は俺の目の前でしゃあしゃあと『この髪は父方の遺伝で生まれつきです』と言った」

どういうことだ？

「あの女は、確かに言ったんだ。私の父の名は濱田昌治（ていめいし）ですって！」

…どういうことだ。



山崎さんは怒りも露に叫んだ。

「濱田成留は…俺とお袋を捨てた親父が別の女に生ませた子供なん  
だろ!？」

「…うそ…」

呟いたのは俺じゃない。その場にはなかった高い声に俺は驚いて顔  
を上げた。

「…成留」

会議室から、タイミング悪く成留が出てきたところだったのだ。

その声が接客室にも届いたんだろう。バタバタと騒々しい音を立て  
て、接客室から山崎さんと、続いて伯父さんがドアを開けて現れた。

「成留…お前…」

「…本当、なの？ 伯父さん…」

伯父さんは答えない。代わりに山崎さんが不敵に笑って応える。

「聞かれちゃった以上、隠し徹せはしないだろう。伯父さん。…そ  
うだよ濱田。母親は違うけど、君は…正真正銘、俺の妹なんだ」

成留はどう答えればいいのか分からずに、その場に立ち尽くしてい  
る。

俺も京都土産の生八つ橋を手にしたまま、何も出来ずにただ突っ立っていた。

そんな俺たちの様子を見て、山崎さんは俯くばかりの伯父さんにそっと呼び掛けた。

「せっかくのいい機会だ。濱田に教えてやんなよ。あんたの弟が、  
…俺たちの父親が、濱田の生まれる前に何をしてきたか」

## ふたりの父親（1）

幹彦 side

何から話せばいいのか、と伯父は言った。

「今から40年以上も前、弟は…昌治は、入学した大学で山崎さんという女性と出逢い、恋仲になったんだ。そして卒業し、昌治の就職が決まって、ふたりは結婚した…」

俺には今でも嫌いな奴が3人いる。

中でも1番嫌いだったのは、俺とお袋を捨てた親父だった。

『…父さん?』

俺が持っている、1番新しい親父に関する記憶は、新しい女と住むことにしたと言って出ていった親父の姿だ。

春の8時前だから、今よりも少し暗くなった頃だろう。春物のコ

トを羽織り、俺と同じ明るい茶色の癖毛を揺らして出ていった親父。

『父さん、どこ行くだよ？ こんな時間に旅行か？』

『…幹彦』

マンションの扉の前で、親父が大袈裟な荷物を手にしていたのを発見した俺は、不安を覚えて親父に駆け寄った。

反抗期の真っ最中で滅多に家族と話などしなかった俺だったが、当時の親父にしてみれば、もう関係ないことだったようだ。

『幹彦：父さんは、別の女性と一緒に暮らすことにした』

『え？』

『お前はもう中学生だから、意味は分かるよな』

そう言っただけで親父はマンションの扉を閉め、俺の方を振り返ることもなく歩いていった。

『ちよ、ちよつと待てよ父さん！ いきなりそんなこと言われても、意味分かんねえよ！』

必死にすがり付く俺の手を、親父はいとも簡単に振りほどいた。

『なあ！ なんか言えよ父さん』

『…幹彦！』

振り返り様に、親父は今まで見せたことのない怖い顔をした。

『お前も大人になったら分かる…！ 大人になって、家族のために汗水流して働いてきた男が、今まで何を思っただけで過ごしてきたか』

親父は『サヨナラ』の代わりに、ここぞとばかりに捲し立てた。

家庭を持つということがどれほど幸せなことであり、我慢の連続であるか。

家族のために働くということが、どれほど虚しいことか。

自分が稼いだ金なのに、ほとんどが生活費と養育費に消え、自分は欲しい車も飲みたい酒も我慢している。

その金で悠々と暮らす家族を見るのが、どれほど我慢ならないことだったか…。

親父は俺とお袋への呪いの言葉だけを残して、出ていった。

階段の下で、ひとりの若い女が親父を待っていたことも鮮明に憶えている。

…部屋に入ると、お袋が離婚届を食卓の上に置いてしよげていた。

疲れきった様子で、それでも俺を見ると明るく気丈に振る舞った。

親父が家を出てったと言えは『出張なんていつものことじゃない』  
と言って、それ以上相手にしてくれなかった。

…それから俺とお袋だけのくらしが始まった。

俺はお袋の負担をなるべく減らすよう、学校に内緒でバイトを始め、  
学費のかかる私立高校には入らず地元の公立工業高校へ進学した。

お袋はレジ打ちのパートタイムと、俺に内緒で夜の仕事もしていた  
ようだ。

そして高校卒業後、いまの勤め先『HLC東京』へ入社した俺は、  
期せずして現在の嫁となる女性と出逢い、結婚した。

親父が俺たち親子を捨てるきっかけとなった、女と結婚をするつも  
りなんてサラサラなかった。

それどころか憎んでさえいたはずなのに、その時の俺にはただ、こ  
の女と一緒にいたいという想いしかなかった。

そして1年後、ひとり娘が生まれ、俺は親父と同じ『家庭持ちの身』  
となった。

親父の言ったとおり家庭を持つことは幸せなことであり、同時に我  
慢の連続でもあった。

けど、それを苦しい、耐えがたいと思っただけではない。

妻を持ち、娘が生まれ、俺の中には確かに『こいつらを守るんだ』  
という意識が芽生えていた。

稼ぎは生活費と養育費に消えていったし、好きな物のほとんどを我慢する暮らしだったが、それでも家族の笑顔を見ていれば、そんなことはどうでもよくなっていた。

だからこそ、今になっても親父だけは憎い。

然るところ、それは俺たちに対する愛情が、親父にはなかったと知ったからだ。

そっちの女の方が大事なら、なぜお袋と結婚した。なぜこの歳まで俺を育てたんだ…。

そして去年の4月、俺の目の前に彼女が現れた。

濱田成留。俺と同じ天然の茶色い巻き毛を持つ女。親父と同じ髪をした女。確かな親父の面影の中に、親父と一緒にいた女の面影を宿した女。

親父と同じ血を受け継いだ妹…そう思うと、彼女の存在が無性に気味悪く思えてきた。

気付けば彼女を避け、彼女と同期入社した和泉ばかりを可愛がるようになっていた。

俺と同期の智恵子が濱田にベツタリだったのも、途中からかさねが4ラインに再検査員として入ってきたことも、それに更なる拍車をかけた。彼女と接する必要性が薄れていくからだ。

だから俺は今でも濱田の存在を認めることはできない。彼女が悪いわけではないけど、彼女はこの世で3番目に嫌いな人だから。

「…そして、昌治は会社で別の女性と恋に落ち、その女性は昌治に家庭があることを知りながら、昌治の子を胎内に宿してしまった。その子供が、成留だ」

隣にいる女は俯いたまま、特に顔色も変えないで聞いている。

「昌治は相手側のご両親の要求する責任を負い、幹彦さんと妻を置いて出ていった。その半年後に成留が生まれたのだが…昌治は後妻と生まれたばかりの成留を残して、不慮の事故でこの世を去った。つい先日、その女性も病で亡くなってしまったが…。幹彦くん、成留。これが君たちの知らなかった事実の全てだ」



## ふたりの父親（2）

「…成留？」

思わずといった呼び掛けに、成留はニコツと微笑む。

「今から残業？ 大丈夫なの？」

「はい、昨日みたいな症状は全くと言っていいほど無いので」

「いや。そうじゃなくて」

俺が心配してんのは、山崎さんのことなんだけど。

「……………」

「……………」

話題が無くなって雰囲気気まずくなる。

「…。その…会議室の話って、何だったの？」

「昨日、残業中に倒れた件です。まだ総務には報告してなかったの  
で。伯父はいま、山崎さんと…まだ、話があるということだ」

ふと、成留は小さく横顔だけで微笑んだ。

「…心配してくれて、ありがとうございます。でも私…なんとなく分かってましたから」

「え？」

「山崎さんが、私を避けてたこと」

そう言っただけで、成留は日報処理に着手する。

いつもと変わらない横顔に、俺は安心どころか怒りさえおぼえた。

「…あのさ、成留」

…どうして、そんなにムリをする。

ムリしてないのなら倒れるわけがない。ムリしてないのなら1日で仕事に戻るわけがない。ムリしてないのなら、こんな大変なことを知って、平然と残業なんてできるわけがないじゃないか。

なのに、こいつは。

「…無理すんなって、言っただけ」

我ながら険のある声だとは思っただけ。

けれど成留は人の良さそうな、下がりがちな目をさらに和ませた。

「ですからー、無理なんてしてませんって」

「どうしてそんな我慢ばかりするんだよ」

成留に限らず、誰にも滅多に聞かせたことのない剣呑な声を出してしまい、さすがに成留も少したじろいだみたいだ。

「俺、気付いたんだよ。成留さ、新人なのにやたら頑張りすぎじゃん。よく笑ってるけど、怒ったり泣いたりすることって、絶対ねーじゃん」

本当は佐伯さんの言葉なんだけど、それはこの際おいといて。

「気付いたんだよ俺。成留ってさ、辛いとかしんどいとか疲れたとか、寂しいとか悔しいとか腹立つなーとか、今まで一言も言っていよなって」

「……………」

「そついうのって、人間として強いつてことなのかもしれないけどさっ」

なんて言ったらいいのかわからないまま、俺は行き当たりばったりに言葉を探しては口に出していった。これが正しいという確信もなく。

「今日くらい、残業なんかすっぱかして家に帰って、布団の中で思う存分泣けばいいじゃんか！ ……無理して、残業されると…こっちも、正直言つて辛いんだよ…っ」

長すぎる沈黙の後、成留は顔を俯けた。

そして、ゆつくり顔を上げた。

「…無理すんな、か」

その冴え冴えとした声に俺の背筋は凍りついた。

このぶっきらぼうな声…。

「あんたは自分が存在していることに、不自信を持ったことはないだろうからな。成留の気持ちは一生かかっても分かんねーよ」

成留ではない…ナル、だ。

「言つたら、山崎が自分を嫌っていることに気付いてたつて。気付けないはずねえんだよ。成留はずつと、そうやって生きてきたんだから」

「え…」

ナルは俺以上の剣呑な声を発して続ける。

「良かれと思つて自分からしたことは、必ず相手を落胆させてきた。だったら相手の都合にあわせて動ければいいものを、相手は指示なしでは動かない、使えない奴だとみかぎる。どっちを選んでも結局は相手の期待に応えることができない…だったら自分が存在していること自体に問題があるんだと、今まで考えたことなかったとでも思つのか？」

俺の脳裏に、いろんな場面がデジカメ画像みたいに呼び起こされた。

不良品を発見して上司に報告する成留。でも『今は手が離せない』の一言でかわされて相手にされない。それで次にはタイミングを見計らって報告に行くと、なんでもっと早く言わないんだと責め立てられる。

「成留は物心ついてからずっと、自分は無用の存在で、そこにいればただ邪魔なだけなんだという思いだけで生きてきたんだ。そんな奴が無理もしないで、無理して誰かの期待に応えようと努力もしないで、安心して生きていけると思うのか」

それもな、とナルは手近な箱から、俺が不良品だと見なしたうちの1つを掴んだ。

修正さえも不可能で、もう捨てるしかない製品。

「人間ってやつはこの不良品と一緒にでな、少しでも都合が悪いと見なされたら修正されるか捨てられるかのどっちかしかねえんだよ！まして成留みたいな先天的な規格外は、少しでも良品の域に入らなきゃ、いつか捨てられるんじゃないかって、怖くて、怖くて……」

俺の心の中で、何かガストーンと、軽い衝撃だけを残して消えていく。

ナルは俺を睨みながら小さな声で、でも強く叫んだ。

「……いつだって、無理せずにはいらねーんだよっ！……」

「……………」

……いつも、と俺は真っ白になった頭で思った。

いつも成留は、どんな気持ちで見っていたんだろう。山崎さんにケツ叩かれまくっていた俺を。和泉さんを交えて龍一とバカ話する俺を。柏木さんに冗談の捌け口にされる俺を。本当は成留以上に佐伯さんに絡まれていた俺を。

いつだって、誰かの『規格内』に入っていた俺の姿を。

ずっと何かに怯えて、それでも外には出せなくて、たったひとりで戦って。それさえも『ナル』無しでは保つこともできなくて。

『誰にでも優しいのは構わないけど、優しくする相手を間違えるな。優しさを倍返しにしてくるような奴に、半分しか返してこないような奴と同じ優しさをもって接するな。それは倍返しにする奴、すっげー傷つけるから。それができないんだったら、関わるのはやめておけ』

半年くらい前に、そうナルに忠告されていたはずだ。

それなのに、俺は…。

「…ごめん、ナル…俺…ッ」

途端、ナルの様子が急変した。顔が真っ青になり、体が傾く。

「ちょっと…ナル、どうしたんだ？」

「…悪い、かさね…なん、でも…」

この様子には記憶がある。確か、昨日。成留が残業しているときに。

そのうち、ナルの膝が崩れた。そればかりではない。検査台に掴まっていた手が脱力し、ナルの体はドサツと音をたてて横倒しになった。

「おい！ しっかりしろナル」

ナルに目を開ける気配がない。

「ナルっ！」

俺の声に気付いて、残業中だった何人かが駆け寄ってくる。

### ふたりの父親(3)

あの後すぐに駆けつけた佐伯さんの家まで運ばれた成留は、医者  
の診察を受けてもなお目を覚ます様子がない。

「…どうですか？ 先生」

「…最近、彼女の環境に変化はありませんでしたか？」

その言葉に俺と佐伯さんは顔を合わせた。

「風邪と疲労です。大したことはありません。しかし、この疲労は  
精神的な部分が大きいようだ。早くご家族にお知らせした方がいい」

「！」

…精神疲労。

「注射を打っておきましたので、あとはゆっくり休ませてください」

「ありがとうございます」

玄関先で医者に頭を下げる佐伯さんの横で、俺はナルの…成留の昏  
睡している客間に目を遣った。

(…精神から…)



『人間ってやつはこの不良品と一緒にでな、少しでも都合が悪いと見なされたら修正されるか捨てられるかのどっちかしかねんだよ!』  
さっきのナルの言葉が脳内に再生される。

『少しでも良品の域に入らなきゃ、いつか捨てられるんじゃないかって、怖くて、怖くて…いつだって、無理せずには…っ!』

真っ暗にしてある客間をそっと覗く。

ベッドに身を預ける成留は眠っているというより、高熱による昏睡といった様子だった。起きる気配は、まるでない。

(ナルの時でさえ、こんな…いや)

戸口にいてさえ聞こえてくるやや荒い息遣いに、興奮よりも心配で心が掻き乱される。

(そもそも俺は、本当の成留なんて知ろうともしなかった…!)

残業を終えてから駆けつけた柏木さんと和泉さん、それと龍一に、佐伯さんは青い顔をしてこれまでのことを伝えた。

眠っている成留を気遣って客間から離れた応接間に集まり、俺たちは額を合わせていた。

「…それで、医者は何と言っていました？」

佐伯さんは首を横に振った。

「風邪に疲労が重なったんじゃないかって。大したことはないらしいんだけど、家族の方に知らせるようになって。そう言った」

「…濱田の家族って言ったら…」

「成留の伯父さん…」

しかし家に電話しても、留守なのか誰も出てこない。だとしたらまだ山崎さんと話をしているはずだ。

「佐伯さん、山崎班長は」

「ダメ。会社にもいないし、家にも帰ってない。ケータイにかけても留守電のままなの。一体どこ行っちゃったのかな…」

成留の家族はその2人だけ。そのどちらとも連絡がつかない。

今の成留に必要なのは、あの2人しかいないのに。

「…こうなったら仕方ない。連絡がとれるまで、私の方で出来るだけのことはしてみる。勇輝ちゃんたちは遅くならないうちに帰っ…」

「佐伯さん。おっ、俺、手伝います！ 成留の伯父さんが来れるまで、一緒に看病させてください」

佐伯さんの言葉を奪つようにして、俺は自覚もないまま言っていた。

佐伯さんも龍一たちも、みんな驚いて俺を見ていた。でもいい。

たとえ伯父さんや山崎さんが朝まで来なくたって、俺たちで成留を絶対に治してみせる。

手紙(1)

ナル side

…だから、やめとけと言ったんだ。

いまの成留に、この話はあまりにも惨すぎるから。おれが出ていくのが定法というものだったはずだ。記憶は後で消しておけばいい。

だのに、できなかった。成留はおれが『外』に出てくるのを許さず、伯父貴が父親の話をしている間、ずっと心の奥に押し留めていた。

…壊れかけの精神で、この力は、一体どこから…？

『…おかあ…さん…』

記憶が、遠い遠い昔へと引き戻される。おれが昔、成留の記憶から消したもののひとつだった。

おれが『生まれた』ときから、成留の家は母子家庭だ。滅多に風邪

などひかない成留が病気になっても、母親は仕事だと言ってずっと家にいることはなかった。

おれの目の前にある光景は、今の成留がおかれている状態と同じ、ベッドの上。

何枚も掛けられた布団、汗に湿ったシート、氷が溶けてタプタプ音がする水枕…昼間で、厚いカーテン越しにうつすらと光が差し込んでいるところだけ、違うだろうか。

『おかあさん…おかあさん…』

(……………)

…母親の言い分も、分からなくはない。

だが、身内のいない未亡人が、幼い娘を育てるためには、何よりもまず安定した収入が必要なのだ。

目の前にいる、小学校に入りたてくらいの成留は、謔言のように母親を呼びつづけていた。

おそらく本人も、自覚していないだろう。でなければこつもあつさり、おれが記憶から消せるはずがない。

成留自身の記憶では、自分は眠っていることになってるはずだ。

だけど、おれは憶えている。成留がこのときどんなに苦しかったか。

『…おかあ、さん…』

記憶の中で、やがて日が落ち、あたりは今と同じ真っ暗になった。

照明の豆電球ひとつ点いてない部屋は、このときの成留の気持ちを書映してみたいだった。

(? … 母親が、戻ってきたか?)

足音が聞こえたかと思うと、冷たい手が、そっと成留の頬に触れた。

そこで成留の意識は覚醒される。

「!」

覚醒した成留が見たのは、間違いなく母親だった。

だが成留の意識はまた『奥』へと沈みだし、影であるおれが『外』に…出ていく気はこれっぽっちも無いのに…出ようとす。

その間、少しずつだが、あの時のまま若い母親の顔が、徐々に変化していった。

「…なんだ、どう、して…?」

『…ナル…』

変化する母親の口から出た声は、若い女のそれじゃない。

そして成留の精神が『奥』に引き込まれ、おれが完全体で『外』に出た頃…母親の顔は、あきらかに『あいつ』の顔になっていた。

## 手紙(2)

氷を買ってくる、と言って出ていった佐伯さんの代わりに、俺は成留の看病にまわった。

同じ若い女性ということと和泉さんがいればよかったのだが、まだ10代の彼女がいるには遅すぎる時間だったのだ。

よっぽど苦しいのか、眉と睫毛が荒い呼吸に合わせて震えている。頬っぺたは完熟トマトみたいに赤かった。

トレードマークであるライトブラウンの巻き毛も、おろしてある今は汗で首に絡み付いていた。

起こさないように頭をそつと持ち上げ、髪を外に流してから、俺は成留ではない、もう1人の『彼』の名を呼んだ。

「…ナル…」

お前だったら、どうする？

成留が病気で倒れたとき、お前は今まで何をしていた？

「…やっぱり俺じゃ、ダメなのか…？」

成留の家族。伯父さんか、山崎さんじゃないと…。

その時だった。少し離れた応接間から声が聞こえてきたのは。

「柏木さん？」

「かさね！ 山崎さんと電話が繋がった」

「マジっすか!?!」

危うく頭を落としそうになり、次いで自分の今あげた声の大きさにギクツとする。

成留は相変わらずの昏睡状態で、逆に安心しながら頭をゆっくり下ろすと、そのまま客間を飛び出した。

応接間には柏木さんが詰めてくれている。柏木さんからケータイを受け取り、俺は電話を交代した。

「かさねか？ 濱田の容態はどうだ」

「山崎さん！ 今の今までどこ行ってたんすかッ」

「柏木から話は聞いた。伯父さんを、そっちに向かわせたい。場所は教えるから、悪いが車でこっちまで来てくれないか」

「山崎さんは？」

「……………」

ケータイからは、どこかの雑踏の音しか聞こえなくなった。



ちよつと部屋を出ます、とジェスチャーで柏木さんに合図してから、俺は客間まで廊下を歩く。

「山崎さん？」

「…かさね…悪い。俺はそっちに行けない」

「って、なにいつてるんスカー！ 部下が2度も倒れたんですよ！」

「分かつてる。けど…俺はまだ、濱田の存在を認めたくないんだ」

自分の異母妹だから。自分を捨てた父親の血を引く娘だから。

「医者は家族を呼べって言ったんだろ？ だったら濱田の伯父さんだけでいいじゃないか。俺は…濱田家の人間じゃない」

「山崎さ…」

「濱田もきつと、そう思ってるはずだろ？」

「……………」

俺は言葉を見つけられず、黙ってしまった。

何かが違う。でも、何が違うのか分からない。

何か言つべきことがあるはずなのに、それが形になってくれない。

『…なんとなく、分かっていたから。山崎さんが、私を避けてた

こと』

俺は心の中で、もう一度ナルに問い掛けた。

お前ならどうする？

お前なら、こんなとき山崎さんに、なんて言う？

『…まあいい、とりあえず頭の隅にでも置いておけ。忘れない方が賢明だぞ？ いずれ必要になるからな』

去年の秋から消してないメモリーから聞こえてくる、ナルの答え。

ケータイを構えたままで思わず鼻で笑ってしまった。

これが山崎さんの耳に届いてたら、きっと自分が笑われたと思って怒るだろう。

『その時が来れば分かるってことだ』

その時が来れば、だって？

分かんねえよ。

「…何も、分かってないんスね」

電波の向こうで山崎さんが絶句したのを感じた。

「なんで成留もそうだって思えるんだよ。…山崎さんが…あんたが、単純にそう思いたいだけだろ!？」

成留の、高熱に苦しんでる様子が目に見えるようだった。

「あんたが成留を避けてたから、成留もあんたを避けてたんだ! あんたに嫌われてると知っていて、嫌いな自分が傍にいると迷惑になると思ったから!」

「…かさね…」

「伯父さんだけがここに来ればいいって、どーゆーことだよ? 俺は成留の家族じゃないって、何なんだよ!？」

上司に向かって敬語で話してないことにさえ失念していた俺は、言うべき言葉だという自信もないままに叫んでいた。

ナル、…お前なら、こんなとき何て言っただりゃいい。

「あんたにとって成留は単なる部下で、あんたの嫌いな親父さんの娘かもしんねーけど、成留にとっちゃあんたは、世界でたった1人しかいない自分の兄貴なんだぞッ!」

手紙(3)

成留 side

布団を掛け直してくれた気がして、氷枕を冷たいものに交換してくれた気がした。

誰かの凍えるような冷たい手が、私の頬に触れた気がした。

いくつもの気配を感じて、瞼に力を入れて目を開けると、誰かが近くにある椅子に座っていた。

「…伯父…さん？」

伯父さんはゆっくり頷く。

「目が覚めたか？ 成留」

「…なんで…伯父さん、山崎さんとお話…」

「うん。幹彦くんもさつきまで、一緒にいたんだけどね。君が目覚めますなり、慌てて逃げていつちゃったよ」

ぼんやりと、向こう側に白い壁紙と茶色いドアが見える。

棚の上に花瓶が置いてあって、それは私の家にはない光景だった。

「？ ……ここは…？」

「話は回復してからだ。まずはゆっくり寝てなさい。お前の熱が下がるまで、幹彦くんも別室で控えてくれるっていうから」

幹彦くん、という部分だけ、私には空耳じゃないかと思えた。

「…山崎さんが？」

「安心して休みなさい。わたしも、ずっとここにいてあげるから」

「でも伯父さん…！」

「いいんだよっ」

滅多に声を荒げない伯父さんが、私の頭を軽く叩く。

「滅多に風邪をひかない君なんだ。こんなときくらい、遠慮も無理もする必要なんてない。だってそうだろう？」

頬を包み込んでくれる手が冷たくて、私はうとうと目を閉じた。

「家族なんだから」

完全に眠りに落ちる前に、目の奥だけがとても熱くなっていた。

手紙(4)

誰かに揺すり起こされて、俺はソファーから転げ落ちた。

「！……っ、てえええええ」

「いつまで寝こくってるつもり？ いいかげん起きなさい」

目の前には見事な大根足。コブを気にしながら視線をあげていくと。

「……佐伯さん？」

「今さつき成留ちゃんの熱が下がってね。伯父様が連れて帰ったところ。柏木とミキも、もうとっくに帰ってるわよ」

ああ、もう治ったんだ。

俺は頭部と臀部の痛みも忘れて緊張を解いた。

「そう……良かったっすね、大事な『成留ちゃん』の熱が下がって」

「あれえ？ それはかさねも一緒でしょ？」

「……………へ？」

佐伯さんは得たりと笑んだ。

「絶対成留ちゃんのお見舞いに来るよう怒鳴り付けたってね？ ミキに。『かさねに怒られたあ〜』って、帰り際までブツブツ言ってたっけ」

しまった！ 山崎さんに口止めするの忘れてた。

(…い、言いやがったなあああ！？ ヒドい。ヒドすぎる！ いくら俺があのととき敬語使わなかったからって！)

だがもう全てが遅すぎた。俺は力なくフローリングから立ち上がって尻のホコリをはたく。

というか、そもそも山崎さんと成留の血の繋がりは非公開なわけだし。

「あーそうスか。でも俺と成留は本っ当に何でもありませんので。それじゃ…」

「それでね」

佐伯さんは帰ろうとした俺の、襟首を掴んで思い切り引き戻した。

「痛たー！ まだ何かあるならフツーに呼び戻してくださいよ！ 危うく首の骨折るトコだったじゃないっスか！」

「ミキから預かってるんだけど。成留ちゃんに渡してほしいんだって」

そう言われて手渡されたのは、封の切られた縦長の茶封筒。

「世界でたった1人しかいない兄貴より、妹を理解してくれているかさねに頼みたいから、だって…変なの。一体どういう意味なのかしら…?」

たぶん、その謎は教えてもらわない限り永遠に解けないと思うよ。



## 手紙(5)

後日、お見舞いがたら濱田家を訪れた俺は、山崎さんの依頼どおり直接この手で成留に茶封筒を渡した。

春の連休ということで今日は成留の伯父さんもご在宅で、女性の寝室に入る許可と厚いおもてなしをうけての訪問だ。

「…うそ、これ、山崎さんが私にとって？」

「らしいよ。どうして？」

成留は中に入っていた便箋を、目を凝らして再度見た。

せっかくのゴールデンウィークだというのに、成留はまだ調子が悪いということとで病床に臥せっている。

「だってこれ、私宛じゃないですし。それに、ここに書いてある日付も、筆跡も…！これ、父が亡くなった年に、母が山崎さんに宛てて書いた手紙です。間違いありません」

「ええっ!？」

けどなんでそんなものを成留に？

成留が俺にも見せるような仕草をしたので、つられて成留の枕辺に

近づき、一緒にその手紙を読んでみた。

幹彦さんへ。

あなたがいつか、どこかで成留と逢ったときのために、この手紙を書いています。

幹彦さん。貴方はお父様が自分たち家族への愛情を捨てて、私の元へ行ったとお思いでしょうか。

もしそうなら、それは半分正しく、半分間違っています。

お父様は亡くなる直前まで、貴方とお母様を残して出ていったことを、とてもとても後悔していました。

貴方の頭を撫でることも、肩を抱き締めることもできず、家族への恨みの言葉を吐くことしかできなかったことを、最期まで悔やんで逝ってしまいました。

あのお父様は、ああすることしかできなかったのです。

まだ心身共に未完成な貴方に、優しい言葉を残して出ていったら、貴方の中にはきつと、お父様への未練が残ったことでしょうか。

けれども冷たく突き放せば、貴方はお父様に未練を残すことなく、自分を恨むことで、お母様とふたりで生きていけると思ったのです。

分かってあげてください。

お父様がどれだけ未練を残して、貴方とお母様を残していったのか。許してあげてください、とまでは言いません。

ですが、たとえ私をどれほど憎んでも、お父様と成留だけは、嫌わないであってください。

そして、成留をよろしく願います。

憎んでいる私とお父様の間に生まれた、貴方と13歳も離れている成留を妹として受け入れるのは、きつと簡単なことではないでしょう。

ですが成留にとって、貴方はこの世に2人といない、兄なのです。嫌わないであってください。

貴方にとって、成留は不義の子に見えるかもしれませんが。

許せない存在と思われるも、仕方ないかもしれません。

それでも成留は貴方と同じ、望まれてこの世に生をうけたのです。

ですから私は、貴方とお母様に申し訳ないと思いながら、成留を生むことを決めました。

ご家族の方に一生、憎まれることを知りながら。

そして、これだけは…。

小花模様の便箋に水滴が落ちて、歪んだ円の形に滲んでいく。

その出所を辿っていくと、薄い涙の膜を張った成留の目に到達した。

「…成留…」

…泣いて、る？

俺は慌てて最後の一文を読んだ。

『この世界に存在してはならないものなど、ないのでですから』

「……………つ」

成留は便箋を枕辺のサイドテーブルに置いて、掛け布団の上に上体を伏せる。

俺の存在なんか忘れたのかと思えるくらい、成留はボロボロ泣いていた。

ただし、声だけは殺して。それかあまりにも感情が高ぶったせいで、出しくなくても声が出ないのだろうか。

俺も感情が高ぶっていた。ちょっとでも気を緩めたら貰い泣きしてしまいそうだ。

(…。…でも、封が切ってあったってことは)

成留に渡す前、すでに山崎さんもこれを読んだということだ。

だとすればこの手紙は、山崎さんの返事ってわけで…。

そう推測する工業的知識しかない左脳の反対側、感覚重視な右脳側では、初めて見た成留の泣き顔に反応して、俺の心をちょっと、いやかなり動かしていた。

俺の細い脳梁を通して、2つの情報が猛スピードで行き来している。珍しいことに俺にしてみれば、素晴らしいほどの直感力がこのとき生み出されていた。

「…成留」

ライトブラウンの髪が揺れる頭を、俺は躊躇いながらようやく抱え込む。

俺が成留にかけてやれる言葉は、これしかないと思ったのだ。

「いいよ。今日くらい、思い切り泣いておけ」

もしナルがここにいたらきつと…成留が目の前で泣いたとき、絶対こうしてそう言うんだろうなと、初めて分かったような気がしたから。

## 手紙(6)

何かと多忙な連休も終わり、ブルーマンデーが訪れた。

成留の一件と遊び疲れで、文字通りブルーな気分です。4ラインのコンベアに行くと、そこにはすでに先客がいた。

「おはようございますー」

「成留！？ もう出てきて大丈夫なの？」

次の瞬間、俺はドキッとした。

「はいー。先日はどうもありがとうございました」

人前でボロボロ泣いた影響なのか、成留はいつもの『ちょっとだけ微笑み』じゃなく、ちゃんと心からの笑顔で笑ってくれたのだ。

(…な、ナルの時も思ったけど…やっぱ成留って…)

「あー。成留ちゃんやっぱ、笑ったらすっげーカワイイじゃん」

俺が思ったままの感想を、突然現れた龍一が真っ先に口に出した。

「お褒めいただいて、ありがとうございます。…といっても烏丸さん、それと泉ちゃんにも言っていましたよねー？」

「あ、やっぱりバレちゃった？　へへへ…」

口調がおカタイのは変わらないけど。

その後すぐ、龍一が保全課の仲間呼び出されたのを見送ってから、成留はまだ始業前の検査台を離れた。そして俺の横をスッと通り過ぎる。

「…サンキューな、かさね」

ほとんど聞こえないほどの声で、成留はそう冷たく囁いた。

「！　へ…？」

驚いて後ろを振り返ると、成留の目がまだこっちに向けられている。

しかしそれは一瞬のうちに変化して、また背を向けて歩き出した。

(…。…ナル…？)

だった。確かに。しかし礼を言うためだけに出てくるなんて、一体どういった風の吹き回しだろう。

もしかして。

(もしかしてあの時、意識あったのか？)

佐伯さんに代わって看病しているときに、客間前の廊下で山崎さんに電話したときに、…ナルとしての意識だけは、あったのだろうか。

滅多に聞けないナルの謝辞にちよつと感激すると、聞こえてきた不吉な音に驚いて意識は現実へと引き戻された。

「…あつ」

小さな悲鳴が聞こえた後、ドサツ、と誰かの体が倒れる音が聞こえた。

誰かが倒れたのだと分かったのは、この音を聞くのが初めてじゃないからだ。

けれど、倒れたのは成留じゃない。聞こえてきた先は隣の3ライン。

「和泉ちゃんどうしたの!？」

「どうかしたのか勇輝っ!？」

そう叫んで駆け付けてきた成留と龍一の声で、倒れたのは和泉さんだと察しがついた。

しかし若い娘がふたりとも、相次いで倒れてしまうなんて。

(…なんか1号棟って、ひよつとしなくても呪われてない?)

二度あることは三度ある、ってこと?



## 戸惑い(1)

「勇輝、しっかりしろ！」

真つ先に駆け付けた龍一が必死に呼び掛けるが、青ざめた顔に血の気は戻らない。唇も紫色に変色している。

龍一は和泉さんの下に手を入れて、軽々とお姫様抱っこした。工場内の喫煙スペースに備え付けられたベンチにまで運ぶ。

「勇輝……！」

「烏丸さん、和泉ちゃんのこれ、貧血みたいです。ここは私に任せて、山崎班長に連絡をお願いします」

龍一は成留に言われるまま、内線で山崎さん呼びに出ていく。

その間、成留は手際よく和泉さんに処置を施していった。

作業着のボタンを外しベルトを緩め、積み上げた本の上に足をのせて頭を低くする。

顔を横に向かせて寝かせてから、倒れたとき頭に傷を負わなかったか、怪我の有無を確認するのも忘れない。

「……へえ。成留って応急処置もできるんだ。さすが」

「当たり前だろー？ なんとって濱田、新卒者でトップの秀才だぜ」  
柏木さんの言葉に、成留は冷たいタオルで和泉さんの顔を拭きながら少しはにかんだ。

「そんなんじゃないです。和泉ちゃんが貧血持ちなんで、自然に覚えて。…柏木さん、和泉ちゃんが目覚めたときのために、何か温かい飲み物を持ってきてくれませんか」

「あ、ああ」

照れ笑いから突如語気強く言われて、4ライン長は飲み物の調達に行った。

ちょうどその時、和泉さんの睫毛が軽く揺れる。

「和泉ちゃん？」

成留の声が聞こえたのか、和泉さんの瞼がゆつくりと開く。

視線がまだ定まっていないのを見て、成留は和泉さんの顔を覗き込んだ。

「気がついた？」

和泉さんは成留に気が付くと、しばらく黙った後、か細い声で短く返事をした。

「うん…」

「ああ、まだ起きちゃダメ」

まだ頭に血がうまく巡ってないのだろう。

ちょうどその時、龍一に連れられて入ってきた山崎さんと、紙コップに入ったコーヒ―を手にした柏木さんがベンチに駆け付ける。

「和泉、大丈夫か？」

成留に支えられて上体を起こし、柏木さんから飲み物を受け取った和泉さんは、何かを懺悔するように頂垂れながら頷く。

「…はい…すみません」

「体が落ち着いたら、今日はもう仕事しないで帰った方がいいな。ちょうど智恵子…佐伯班長に、外出の予定が入ってるから。病院に送ってもらえ」

「…え…」

病院、というところで和泉さんは顔を上げ、なぜか龍一の方にチラッと目を向けた。

「いえ、大丈夫ですから」

「大丈夫なわけないだが。佐伯にも、そう話を通してある。今日はもうこのまま帰れ。…これは命令です」

山崎さんに厳命されてしまい、和泉さんは黙った後、大人しく頷く。

「…はい…」

「始業時間まで、まだ時間はある。濱田、悪いけどしばらく和泉に付き添ってやってくれ」

「分かりました」

ぞろぞろとメンバーが散っていく中、和泉さんと成留の他には俺と龍一だけが残った。

「…？ 大丈夫ですよ松本さん、烏丸さん。ここは私ひとりでなんとかなりますから」

「ああ、うん…」

成留は元氣付けるように、和泉さんの肩を軽くポンポンした。

「和泉ちゃん、今回は倒れて得したね。烏丸さんがお姫様抱っこで、ここまで運んでくれてたんだよ。怪我の功名ってやつだね」

「…え…」

和泉さんと龍一の視線が、偶然なのか重なったように見えた。

「後輩の女の子たちなんか、みんな羨ましがってたよ。烏丸先輩にお姫様抱っこなんて、和泉先輩いいなーって。烏丸さん、女の人に大人気ですからねー」

「あ。うん…そーだな」

俺は隣で突っ立っている龍一に違和感をおぼえた。

(? いつもの龍一なら、ここで軽口くらい叩くのにな...)

ラブラブなんだからお姫様抱っこくらいしてやるよー、とか。

「.....」

「.....?」

成留も成留で、ここで気落ちしたように俯いてしまった和泉さんに、本気で心配しているような素振りを見せた。

## 戸惑い(2)

勇輝 side

…烏丸さんがあたしを運んでくれた。

成留からその事を聞いて、あたしは嬉しさより先に、今あたしが直面している現実には打ちひしがれた。

ここまで運んでくれたという烏丸さんに対してさえ、罪悪感をおぼえた。

『病院に送ってもらいなさい』

…実はもう、あたしは病院には行っていた。

そこで簡単には受け入れがたい現実には直面したのだ。

(…どうしよう、どうしよう。…どうしよう)

…これは夢だ、と思った。嘘でもいいから夢であってほしいと。

けれどもお医者さんは病院に行く前すでに証明されていたことを、事実として私の目の前に突きつけるだけだった。

(…なんで、なんで…どうしてこんな…っ)

「和泉ちゃん？」

成留が顔を覗き込む。今にも泣き出しそうな表情で。

「大丈夫？ 佐伯さん、こっちまで車よこしてくるっていつから…このごろずっと、調子悪そうだったもんね」

成留の声は、同世代の女の子にしては低く落ち着いていて、私の心をいつも鎮めさせてくれる。

けれどあたしは、そんな成留にも、ただ頷くことしかできなかった。

一言でも声を発してしまったら、泣いてしまいそうだった。

(…ダメだ…)

実はあたしはその日からずっと、不安のあまりよく眠れないでいた。明日は会社に行かなきゃということがあたしを焦らせ、昨日の夜などほとんど眠れなかったのだ。

…会社に行けば…烏丸さんに、会わなければいけない。

そして今日、不眠と緊張が押し寄せる中、あたしは気を失った。

…この事を、どうやって烏丸さんに伝えればいいんだろう…。

工場の扉から佐伯さんが顔を覗かせて、顔色が悪いが大丈夫か、と訊いてくる。

あたしは成留と佐伯さんに支えられながら、佐伯さんの車に半ば強制的に乗せられた。

「ありがとう。後は、あたしに任せて」

成留に見送られて、あたしを乗せた車は工場の敷地内を走り抜ける。

佐伯さんはあたしを安心させるため、他愛ない話をふってきた。

それは、とても優しい声で。

（もう、隠し通すことなんて、できない）

このまま送ってもらって、病院に入らないで帰ることもできるけど、それじゃ成留にも佐伯さんにも申し訳ない。

「！ 勇輝ちゃん!？」

赤信号であたしの変化に気づいた、そのときの佐伯さんの驚いた顔…。

あたしは佐伯さんの隣のシートで泣き伏してしまった。



### 戸惑い(3)

成留が4ラインに戻ったのを見て、和泉さんはもう病院に向かったのだと察しがついた。

「和泉さん、どう?」

訊かなくても分かる。成留の表情には心配の色が濃かった。

「顔色は幾分よくなりましたけど…。まだ、調子は芳しくないみたいです。なんだか喋るのもやっとな感じでしたし」

「成留ちゃんが倒れる前から、具合悪そうだったもんな」

用がないなら作業場に帰りゃいいのに、なぜか龍一は和泉さんが倒れてから俺のところ居座っている。

成留は考え込むように目を細めてから、小鳥がするみたいに首をかしげた。

「…でも、なんか変ですねー。確かに和泉ちゃんは貧血持ちですけど、今日はそれほど暑くないのに…」

「? それって?」

「夏バテのときとか、体調が悪いときに発症しやすいんです。和泉

ちゃんの場合。それに去年の夏は猛暑だったのに大丈夫だったから、少し安心してたんですけど」

そつえば、と俺は思い当たった。

今日はゴールデンウィーク明けだというのにやけに涼しい。

朝の番組に出てるお天気お姉さんも、今日は4月上旬くらいの気温で、風もあるので上着を準備した方がいいと言っていた。

「…もしかして」

「え、なに何なんか心当たりあんの？」

振り向いてしまっただけから俺は固まった。

…あの龍一が、今まで見せたことのない顔で考え込んでる？

「……、龍一？」

「あ、いや。どっちにせよオレたちで考えても仕方ねえっしょ。これから先はお医者さんの仕事だし？」

そしてすぐいつものチャラ男口調に戻ったので、なんだか腑に落ちないまま『そーなんだけど』と頷くに留めた。

「でも和泉ちゃん、あれですよね」

あれって？ と俺と龍一は成留を見た。

「上司や先輩に『今日はもう、仕事しないで帰った方がいいよ』って言われるのって、すっごくありがたいことですよ。回復してまた頑張れる自分を『待ってってくれる人』がいるのって、期待されるみたいで、とても羨ましいですー」

俺と龍一は同時に顔を見合わせてしまった。

まさか2歳も年下の後輩の口から、こんな名文句を聞けるとは思わなかったのだ。

「んー。確かにそうかも」

「和泉ちゃん、頑張って会社に来てほしいですよ」

「って言うか成留ちゃんさー、キミだって先月倒れたとき、オレちよー心配したんだよ？ 勇輝も柏木先輩も佐伯班長も。特に目の前のコイツなんか」

コイツ、のところで龍一は俺を肘で小突いてきた。

「それに羨ましがらなくても。入社早々、検査員に抜擢されてる成留ちゃんこそ期待されまくりっしょ？ しかも危ない検査員の『松本さん』から守ってくれる、オレっていう信頼できる先輩も傍にいてさ」

「バーカ。成留にとっちゃお前が一番危険な存在だつての。なあ成留、もし龍一がなんかヘンなこと言ってきたら俺に言いな。実力行使される前に、俺がグーで殴ってやるから」

「んだと貴様…！ 成留ちゃん、コイツの言うことなんか信用しち

やダメだからねっ。それこそ本当にムリヤリ既成事実つくろーとして、虎視眈々と成留ちゃんのこと狙ってるような奴だから」

「なっ…にをオ！ テメエあることないことベラベラ言いやがって…っ」

いつ放送禁止用語が入るとも分からない俺たちの口喧嘩を聞きながら、成留はいかにも面白そうに、それでもどこか寂しげに嘖き出していた。

## 戸惑い(4)

翌日、和泉さんはとうとう会社に来なかった。

欠勤の理由は貧血が悪化したためだと、今日の朝礼で山崎さんは言っていたけど。

「…成留ちゃん、ちょっといい？」

いつもどおり忙しく今日も残業となった本日7時頃。日報の処理にあたっていた成留に龍一、ではなく佐伯さんが、なにやら深刻そうな面持ちで話しかけてきた。

「日報処理が終わってからでいいんだけど。今夜ちょっと時間、割ける？」

成留の方にも何か心当たりがあるらしい。首をかしげるような素振りを見せたが、結局は『何か失敗しちゃったかな？』とでも言いそうな、不安げな顔をしながら頷いた。

「いいですよー。今日は伯父も遅くなるという話でしたから」

ああ、成留の奴、今日は佐伯さんとデートなんだ。

なーんて呑気に思ってた矢先だった。

「…かさね」

「うおわあッ！ な、なんだ龍一かよ。あーマジでビックリしたあ  
」

プレス機の小さな注入口からオイルを注すのに集中していた俺は、  
背後からやってくる龍一の気配に気付かなかったのだ。

「ったく、幽霊みたいに気配殺して現れてんじゃねーよ」

それが忍者かスナイパーか。けどめずらしく疲れはてた顔で現れた  
奴の様子からは、幽霊という単語しか咄嗟に思い浮かばなかった。  
次点では井戸からにゅっと出てくるお菊さん。

当然、本人は気に入らなかつたらしく、いつも腰にぶら下げている  
スパナを俺目掛けて振り下ろした。マイナスオーラ、全開のままです。

「うわちよつと危なッ！ 龍一、俺ぶつ壊れた機械じゃねーんだか  
ら」

「人がマジに話ぶつたつてのに、貴様がユーレイとかふざけたこと  
言つたせいだろがっ！ …かさね。ちよつと今夜、オレに付き合え」

「へ？」

「独りもんなんだからべつにいいーだろ。晩飯、おごるからよ」

千人斬り烏龍に言われたかない。

だがいつになく真剣味を帯びた奴の表情に気圧されて、最終的には

断るのもなんだしと思ってOKした。

なにより晩飯おごってくれるというのなら、断らない方が正解って  
もんだ。

「おごるって言ったんだから、手加減はしないぜ？ ……なあ龍一、  
お前昨日から本当にヘンだぞ。マジでどうしちゃったんだよ」

その問いかけに奴は一切、答えなかった。

戸惑い(5)

智恵子 side

『あたし…もう、病院には行ってるんです。そこで…!』

昨日、勇輝ちゃんは病院の駐車場で話し終えた後、あたしの膝の上で泣き崩れた。

今日の昼休み、あたしはケータイにメールが入ってることに気付いた。

『昨日の件で、少しご相談したいことがあるのですが。今夜このカフェまで成留と一緒に来てくれませんか』

絵文字のひとつも使用していない文面での切々とした声に、あたしは上司として、それ以上にひとりの友人として、放っておけなかった。

それだけ、彼女が一身に抱える問題は大きすぎる。



彼女の要望どおり、成留ちゃんを連れて指定の店に入ると、すでに勇輝ちゃんは禁煙席の隅っこで私たちを待っていた。

…まるで、誰かの目を憚っているような…。

「和泉ちゃん？ 貧血はもう大丈夫なんだ」

『昨日の件』の真実を知らない成留ちゃんは、昨日よりも血色のよくなった勇輝ちゃんの顔色にホッとしたようだった。

でも、あたしには前よりも深刻になってるようにはしか見えない。

「…佐伯さん…成留…」

「どうしたの？ こんな所に呼び出して、…あれ？ 和泉ちゃん、まだ何も頼んでないんだ。食べ物も…」

灰皿の置かれていないテーブルの上には、備え付けの生クリームとスティックシュガー、ペーパータオルと、そしてメニュー以外は何も載っていなかった。

…食べ物など頼めるはずがない。

思わず眉をしかめたそのとき、店のウェイターが隣の席に料理を運んできた。

ぷーんと、香ばしい揚げ油の匂いがあたしたちの嗅覚を刺激する。

あたしたち？

「！っ」

口元を抑えて、勇輝ちゃんがいきなり椅子から立ち上がる。

「和泉ちゃん!?!」

「…ゴメン成留。ちょっと待ってて!」

口を手で抑えたまま、勇輝ちゃんはトイレに駆け込んでいった。

明らかに貧血とは違う、突発的な症状に成留ちゃんは戸惑っている。

「和泉ちゃん…!」

しばらくすると勇輝ちゃんが、顔を青くしてトイレから出てきた。

たったそれだけで察しのいい成留ちゃんは、勇輝ちゃんの身に何が起こったのか気付いたらしい。

「佐伯さん。和泉ちゃん、まさか…!」

「……………」

あたしからは答えずに勇輝ちゃんが席に座るのを待っていた。

勇輝ちゃんは席に戻って、じっとテーブルを見つめる。

「和泉ちゃん…?!」

「……………」

「和泉ちゃん？」

「……………。…っ、成留う…」

そして彼女は昨日と同じく、腕の中に顔を埋めて泣き出した。

成留ちゃんの顔が、疑念から確信のものへと変わった。

けれどそれ以上に下がり気味な目元は驚きと、憐憫の割合が大  
きかったみたいだ。

…昨日の貧血。そして、揚げ物の匂いに反応した結果の吐き気。

あたしの顔を、成留ちゃんが必死の形相で見る。その視線を受けて  
あたしは頷いた。

「和泉ちゃん、もしかして貴女…」

彼女は突っ伏す勇輝ちゃんに、優しく囁くようにして確認した。

19歳の女の子がひとりで背負い込むには、あまりにも幸せで残酷  
で、…どうしても受け入れがたい事実を。

「…できちゃった…の？」

『…佐伯さん、あたし、どうしたらいいんでしょう。お腹に、子供

が…赤ちゃんがいるだなんて…！」

成留ちゃんは どうしていいか分からず、押し黙ってしまつた。

同じ19歳の彼女には難しすぎる問題なのは分かりきっていたから、代わりにあたしが勇輝ちゃんを慰めた。

「勇輝ちゃん、泣かないで。ねっ？ 大丈夫。あたしたちは勇輝ちゃんを責めるつもりで来たわけじゃないんだから」

それedyouやく勇輝ちゃんは涙を拭きながら、顔を上げた。

「親にも、父親である相手にも言えないと思つたから、あたしたちに相談したかつたんでしょ？ 落ち着いてからでいいから、話してごらん。少しは楽になるかもしれないよっ」

頭の回転の速い成留ちゃんはあたしが慰めてる間に、今の勇輝ちゃんにも受け付けられそうなドリンクを持ってきてくれた。

ドリンク1杯を飲み干すまでに、彼女はこれまでの事をこと細かく話してくれた。いったいどうして自分が妊娠してることを知ったのか。

…お腹の子の父親が、いったい誰なのかも。

## 19歳の母(1)

龍一 side

あれから4年。

オレの日常に変わりはなかった。

せいぜい就職が決まって髪をちょっとだけ切り、交通手段が電車から車に変わったくらいだ。

フツーに会社に行き、フツーに家に帰って寝る。何も変わらない。

ただ、…隣で笑う奴がいなくて、雨の日は『千人斬り烏籠』で名を馳せているオレも、ひとりで過ごす決めていた。

誰に誘われても、この時ばかりは断っていた。

…忘れもしない、あの雨の日。

目の前で大切なものを奪われた一瞬の出来事だった。

「龍一、今度原女高と合コンやるんだけどさ……」

「ちよー行く！」

誘われる前に即答したオレ、烏丸龍一。当時17歳と5ヶ月。

もちろん思春期真っ只中。ただし大人になる道を模索中だったとはいえ、すでにある種のケガレは持っていた。

三度の飯より、女が好き。

酒と金と女のうち1個だけ選べと言われたら、間違いなく最後のを選択する。

だから合コンと聞いちゃ黙ってられない。

そんなオレに『千人斬り烏龍』の名を献上した友人・松本かさねによれば、オレが来た方が女が集まるという話だった。

けど同時に女は全部オレに持ってかれるため、男性陣からすればハイリスク・ハイリターンの勝負となる。

周りがいケメンだというからオレも顔の良さは自覚していたし、それに見合うだけのワザも身につけた。

でもさすがに千人も斬ってない。当時の記録はまだまだ2桁だ。

だからあの日、オレの連勝記録更新を見事に妨げてくれた『奴』の

存在は、未だオレの中で大きな存在となっている。

原女高側の出席者のひとり、いずみ。

オレが全部の意味でマジになった、初めての女…。

何もしないでも会場の女全部が集まる、というのが通常だったが、今回はひとりだけ、オレのところに来てないコがいるのに気が付いた。

ケータイとにらめっこしている赤渕メガネの女の子だ。

それでさっそく、その赤渕のコに話し掛けた。

彼女はいわゆる、コンパなんかでメールばっか打ってるような奴の部類だった。

それと同じで赤渕も、ここに来てからずっとケータイばっかいじってる。

「ねえね、キミもこっち来なよ。そんなケータイばっかいじってる  
と、余計目え悪くしちゃうよ？ あ、なんならメアド、交換しよっ  
か。赤外線とか、やったことあるー？」

赤渕は画面から目を離すことなく言い切った。

「ほっといてください」

赤淵は最初無視してたが、オレがしつこくアタックしてくるので、仕方なしに相手をしてくれるようになった。ただし、ケータイは持ったままで。

さすがにいつまでも『赤淵』と呼ぶわけにはいかないの、最初に名前だけでも訊くと『いずみ』とだけ返してくる。

「いずみちゃんかー、いい名前だね」

「誉めて貰わなくても結構です。あたしの名前の漢字もしらないのに」

「そんなことないよ。なんか、湧き出る？ ってカンジでいいじゃん」

「…。そっちの泉とは無関係なんですけど」

彼女は新規メール画面に『一角』と書いてオレに見せる。

「へえ〜。これで『いずみ』って読むんだ。珍しい名前だなー。なにになになに？ いずみちゃんって長女なの」

「…次女、です」

「次女！？ マジで！ おいおいおいオレ今すっげー共通点発見！ あ、オレ龍一ってんだけどさ、次男なのよ。第2子なのにイチって、なんじゃそりゃー！ みたいなの？」

「……………」



「こーゆーのを『運命の出逢い』ってんだろなー。ねーホントにメアド、交換しようよ。マジでキミと友達になりたくなっちゃったよ」  
そこで初めて、いずみはオレを見た。

見ただけでなく、笑った。そしてこうも言った。

「龍一さんの運命って、ずいぶん都合のいいものなんですなえ〜」

「そこうるさい」

合コンが始まって1時間、ようやくオレはいずみのメアドGETに成功した。もちろんオレのアドレスも相手に渡す。

これがオレたちが『友達』になった記念すべき会話だった。

身持ちの堅い彼女に合わせて、まずは友達からスタートすることになった。

もつとも、一緒に参加したかさねには『持ち帰ったんだろ?』と後で言われるハメになったが。

いずみは最初、チャラ男オーラ全開なオレを警戒していたらしい。

だが次第に打ち解けるようになり、そのうち『あたし龍くんのこと、ちょっと誤解してたかな』という嬉しいような悲しいような言葉も聞けるようになった。

何回か一緒に遊びに行く関係になっても、オレたちの関係は俗に言う、友達以上恋人未満というやつだった。いずみもそっちのが楽だったらしい。

けどオレは、早いところそのビミョーなエリアから脱出したかった。

これだけ手応えのある女は初めてだったから、たぶんそのエネルギーがオレを本気にさせたんだろう。

自分でもらしくないとは思いながら、オレは距離を縮めようと必死だった。

千里の道もなんとやら、だ。

(でもまだ千里丸々残ってる気がしないでもない…)

そんなこんなで何回目かのデート。いずみにしては珍しく10分ほど遅れて、待ち合わせ場所に姿を現した。

たぶん雨のせいだろう。

湿気のせいで髪がなかなか整わず女の身支度が遅くなるというのは、今までの経験から承知の上だ。

けど、…まさかこれが原因になるとは思わなかった。

傘を差して視界が悪いというのに、オレを待たせたのを気にしてあまり注意もせずに、いずみは詫びるように笑いながら横断歩道を渡る。

「ごめんね龍…」

そして、これがいずみの最後の言葉だった。

いずみの声に被さるようにして響き渡る、法定速度で走る車と車が衝突しあう音。

「！ 危ない！」

…すべてが遅かった。

オレの足が動く前に、1台の車がいずみに向かって突っ込んできた。

いずみは驚いて、その場から逃げるのも忘れて、立ち呆けて。…彼女の持っていた傘が、ドンという激しい音を残して空へ舞い上がった。

もはや雨避けの役には立ちそうにないほど変形して、それはいずみの、アスファルトに転がる血液と泥水で汚れた体に落ちていった…。

いずみの葬儀の後で聞いた報告によると、後続車のブレーキが故障して、それが玉突き事故という悲惨な結果を招いたという話だった。

ただし、それはブレーキ自体になんらかの問題があったのか、それとも所持者が車の管理を怠ったせいなのかは、もはや分からないという灰色な結果を残して終わった。

そして高3の春が来て、オレは学校の求人票から『HLC東京』の文字を見つけた。

オレの目的。いずみが死んだ事故の原因となった、ブレーキをはじめとする『自動車部品』をつくる会社のひとつだ。

世間に復讐しようなんてきもちも、これっぽっちもない。

オレはただ、あの悲惨な事故を繰り返したくないという思いだけで、その会社に就職を希望した。

もともと自動車関係は興味があつたし、労働条件も悪くなかつたので。

相変わらずこんなチャラ男な雰囲気のまま面接を受けたのだが、個人面接でその思いを語つたのが良かったのか、アツサリそこに内定が決まつた。

実際に製品をつくる職種には配属されなかつたが、まあ、同じ時期に試験を受けたかさねが検査員になつてよかつたと思う。

こいつならいずみと事故のことも知ってるし、オレのことも理解してるから。

千葉市にある千葉支社で2年を過ごし、本社に異動となつたのは去年4月のこと。

その朝礼で新人の女の子がオレの隣で挨拶したとき、オレは再び『  
ずいぶん都合のいい運命の出逢い』を感じていた。

『三田高等学校から来ました、和泉勇輝です』

(いずみ?)

あの女と同じ音の名字? とオレは咄嗟に思考が切り替わった。

…本っ当、どーかしてるよな、オレ。

例によって本社でも女性社員の好感度は高いオレだったが、勇輝は  
やはり最初、オレのことを警戒していたようだった。

その点で言えば勇輝と同期入社 of 濱田成留も一緒だけど、設備の保  
全活動が主な仕事であるオレとしては自然、検査員の成留ちゃんよ  
りかは実際に機械に触れている勇輝とのコンタクトが多くなってい  
た。

そして着々と距離は縮まり、幾多の困難を経て、それでもオレだけ  
は一方的に他の女もからかいながら…オレたちは半分本気、半分冗  
談という、あくまで形式だけの恋仲になっていた。

今更になって考えれば、これこそ勇輝が後で苦悩する最大の原因だ  
ったのかもしれない。

勇輝には本当に申し訳ないことをしてしまったとつくづく思う。

あれから4年。いずみへの想いは何も変わっていない。

オレの日常に変わりはなかった。

本気になった女の人生を台無しにする運命も。

## 19歳の母(2)

マジかよ、としか俺は言えなかった。『かさね、声でけえよ！ バカ！』と龍一に注意されることもない。

「…信じられねえ…だってお前、和泉さん妊娠させたかもしれないって…」

「オレだって信じたくねえよ。でも見ただろ、昨日の」

このごろずっと体の調子が悪そうで、昨日の朝に貧血で倒れた和泉さんの姿が浮かぶ。

そういえばあのとき、龍一のことを気にしてる様子があったっけ。

てゆうかお前たち、いつの間にデキてたの？ という基本的な疑問さえも忘れて、俺はヒソヒソ声で龍一に訊いてみる。

「それ、和泉さんに確認したのか？」

「いや。でもなんとなく分かる。勇輝のあの様子はただ事じゃない」

何しろ本人の認識が曖昧なままなので、俺としては半信半疑で龍一からの相談を受けていた。

後にそれが事実だと知ることになるのだが。

「…で」

「でっ」

「どーするつもりだよ、お前」

「……………」

龍一はポテトを食うという口実をつくって、俺の問いを黙殺した。

夕飯おごるといふから相談に乗ってやれば、ファストフード店のセツトメニューで済ませやがった。

それも山と海と太陽の高級店じゃなく、知名度ナンバー1の安い黒船チエーン店。

「イモ食ってなーで何とか言えよ！ このままじゃ和泉さん可哀想だろ」

今度はチキンナゲットを口の中に放り投げる。

相談があるとか言っときながら、黙秘権を貫くつもりか？

俺は追及するのを諦めた。龍一が意地でも無言を貫くのは、本気で考えている証拠だと知ってるからだ。

「…じゃあこれだけ。お前を躊躇わせてる原因は何？」

もぐもぐ。



「やっぱアレか？ 昔の『いずみさん』が忘れられないんだろ」  
もぐもぐもぐもぐ。

「。。。もう4年も前のことなんだし、いずみさんも許してくれるんじゃない？」

もぐもぐもぐもぐ。。。もう原型留めてないんじゃないの？ それ。

「ッ、そーでなくてもお前『千人斬り烏龍』だろ！」

もぐもぐゴクン。咀嚼も限界を超えて飲み下したようだ。

なにかが気にかかったらしく、龍一はALTのオーバーアクションみたいに、肩を大袈裟に上下させた。

「そーいう意味で忘れられないんじゃないよ」

「？。。。じゃあ？」

「いずみが死んで。。。今度は、勇輝が倒れた。オレが冗談じゃなく本気になれば、勇輝は不幸になるかもしれない」

「って、そんなバカなこと」

笑い飛ばそうとして失敗した。気休め効果、まるでなし。

「実際、勇輝が妊娠してたらそりゃ、責任は取る。。。絶対に。けど、マジでオレが勇輝と、その。。。ケツコンとかしたら、あいつは。。。」

どうなるか分からないじゃないか、という言葉を飲み下して、龍一は頬杖をついつ外を見る。

俺は俺で、そのマジ顔に本気で驚いていた。

(…こ、コイツが女のこと、ここまで本気になるなんて…)

『千人斬り烏龍』なんてふざけた渾名つけて悪かったよ、龍一。

こいつの気持ちも、分からはない。そうでなくても龍一も俺も今年でまだ22歳だ。

金銭的にも社会的にも、嫁と子供を養うだけの力は充分に備わっていない。

その上こんな過去まで引き摺っていては。

「でもよ龍一？ どうせこのままの状態がずっと続いて、結局は和泉さん、辛い思いするだけなんだぜ」

「ああ」

「…。同じ辛い思いをするならさ、最低限のことは相手に背負ってもらった方が、和泉さんとしても楽なんじゃねーの？」

「ああ」

「…。お前だって、そのくらいの覚悟は出来てるんだよな」

「ああ」

どれだけ説得しようとしても、適當すぎる生返事しか返ってこない。ちきしょー、お前みたいなイケメンにそんないい加減な返事されたら、逆にこつちがドンゾコにまで気落ちしちまうじゃねーか。

さすがに俺もとうとうキレてきた。気付けばチーズバーガーを頬張ったまま、龍一に向かって叫んでいた。

「…お前なあホントに本気で和泉さんのこと考えてんのかよッ！」

龍一も龍一で密かにキレていたようだ。高校時代からの条件反射で、俺と対等に言葉を選んではまくしたてる。

「ッ！！ 貴様なんか言われなくてもな、考えてるに決まってるだろッ！ 最悪でもお前以上には考えてる！ そーじゃなきゃお前に、こんなこと、持ちかけたりしない…！」

「……………」

浮かしかけた腰を再び椅子に下ろして、バイパスを通る車を目線でつーつと追いかける。

俺も二の句がつけなくなり、車のテールライトを見送っていた。

考えてみるまでもなく、内容が内容なだけに俺に相談を持ち掛けたのは妙な話だ。

妊娠が絡んでいるのなら同じ年の俺じゃなく、保全課の先輩なり上

司なりに持ち掛けるのが筋というものだ。

だのにわざわざ課の違う俺を、こうして誘って相談したというのなら。

(…確かに、滅多な人間に話せる問題じゃねーよなこりゃ…)

たぶん龍一も今日1日、考えに考えた末にようやく決心したのかも  
しれない。

それに、元カノのいずみさんを知ってるのは社内で俺だけのはずだから。

他に腹を割って相談できる相手もいなかったんじゃないのかな。

真剣に外を見ている眼差しは、まるで全てを拒絶するようだった。

こうなったら親友の俺でさえ、龍一の本音を引き出すことは難しい。

俺は久々にこめかみを揉み解した。

仕方ない、こーなったら小細工ナシでいこう。

「…あのな龍一、俺は冗談抜きで、お前が和泉さんを幸せにできる  
とは思ってないよ。もし本当に和泉さんと結婚したとしてもだ、ど  
ーせまた他の女に手え出すに決まってる。ああそりゃ断言できるね  
結ばれたら和泉さんが不幸になるかもってゆーお前の予想は、あ  
る意味もう弁護のしようがないほど正しいよ。宣言してもいい」

龍一はものすごくムカツとしてた。

「でもな、もし本当に和泉さんがお前の子供を妊娠してたとしたら、いま一番不安なのは間違いないと和泉さんなんだぞ。もしかしなくても、お前以上にな。向こうがお前の抱える問題ごと胎に抱えてるつてのに、お前は和泉さんの抱え込んだ問題を、全部とは言わないまでも一緒に解決しようとは思わないのか？ 龍一、本気で訊くんだけどな」

コンプレックスを容赦なく刺激する、文句のつけようのない美顔を真正面から見据えた。

せめて目力だけでも入っていますように。

「お前、和泉さんのこと、どう思ってるんだよ」

「…どうって、そりゃ…！」

「責任取るとか、そんなことはどうでもいい。単純に烏丸龍一個人として、和泉さん個人をどう思ってるかって話」

「…そりゃあ…」

さすがに答えづらい質問だったようだ。

龍一は一息ついた後、再び窓の外に目をやって黙ってしまふ。

が、そのうち手をつけていなかったチーズバーガーをかじったので、俺はやっぱり難関を突破できたことにホッとした。

長いこと一緒に付き合ってきたから分かる、龍一の癖。

何かを口に入れることで絶対に喋れない状況をつくる。

答えるまでもないという、奴の1番誠実な、言葉のない返答の仕方だ。

俺はふざけて龍一の金髪に手を伸ばし、これでもかというくらいにわしゃわしゃ崩してやった。

なにしろ俺より長身だから、腕どころか体一杯伸ばさないと頭まで手が届かない。

「たしか晩飯、おごってくれる約束だったよな。ここに書いてあるコールスローサラダ、追加してもいいだろ？」

マイナスオーラのとれた龍一はようやくいつものチャラ男オーラを全開にしはじめると、俺の手を払い除けながら超ライトな口調で否定した。

「頼むのは勝手だけど。そーゆー話なら、そのサラダはオレたちへの御祝儀代わりとして受け取っとくぜ。あ、もちろんコレかさね持ちな」

「えー！ そんな理屈が通んのかよ。くっそー俺も早く彼女つくって、そのテでお前から晩飯代ふんだくってやる！」

自分で言っただけ悲しくなってきた。そんな俺を龍一は色目で見つめてくる。ナゼだ。

「んーじゃあかさね、雌牛をスペイン語で言えたら、オレの全額負

担ってことでいいよ」

「んだと？ ふざけんなこのバカ！」

「…正解」

言つと龍一はひとり席を立って、金額ピッタリの代金を置いて店を出ていった。

チーズバーガー、食べかけのままで。

「…は？」

…スペイン語で雌牛のことを『バカ』というのだと、成留から聞いて俺が理解するのはその翌日のことだ。

もちろんこの件に関して、雌牛は全く無関係だろうけど。

## 19歳の母(3)

成留 side

「…それで、勇輝ちゃんはこれからどうしたいの?」

和泉ちゃんの切々とした訴えを聞いた後に、佐伯さんは容赦なくそう突きつけてきた。

和泉ちゃんじゃなくても言葉を失う。

「どっ、って…?」

「子供を産むにも産まないにも、相手の同意が必要な。勇輝ちゃんが産めないというのなら、烏丸に署名と捺印を貰って紙をお医者様に届けないといけないんだから」

うわ佐伯さん、中絶同意書を簡単に『紙』とか言ってるよ。

というか、さすが一児の母だけあってその筋には詳しくすぎる。

「相談があるっていうから、こうして相談には乗ったわ。けど、あたしたちができるのはここまで。あとは勇輝ちゃんと烏丸が、両方のご両親と話し合って決めるしかないの。事によっては勇輝ちゃん



が1番傷付く結果になりかねないんだから、慎重に考えなさい」

「ちよつと、佐伯さん…」

「…あたし」

唇を噛み締めて、必死に泣くのを堪えているように私には見えた。

「あたし、赤ちゃん産みたいです。お医者さんにもそう言いました。けど、烏丸さんや両親が反対したらと思うと、すくんじゃって…」

それに、と和泉ちゃんは私の方を見た。

「仕事も覚えたばかりで、面白くなってきたところですし。…いま会社を辞めるのも、正直イヤです。でも、この歳で子供を産んで育てて、会社に勤めるのも、難しいと思うんです。それで…」

「…勇輝ちゃん」

佐伯さんはいつになく真剣な面差しで和泉ちゃんを見た。

「まず会社の上司として、話をさせてもらうけど。安定期なら無理をしない程度になら、働いても大丈夫よ。妊婦さんには残業も休出もさせられない規則になってるから。それに社内規則だと産休と育休で半年くらい休めるようになってるわ。もちろん長いブランクがあるから、職種が変わることも充分にあり得るけど」

経験者だからこそ説得力がある。さすが班長にして一児の母。

「どちらにせよ、それは自分にしか決められない。産むというのな

ら、それなりの覚悟は必要よ。子育ては思った以上に辛い仕事なんだから」

「……………」

「烏丸やご両親とよく相談して、それから決めなさい。貴女のこれからの人生を、会社の都合で変えることはできないんだから。何度も同じこと言うようだけど、最終判断は自分でするのよ。それでこれは、あたし個人としての意見なんだけどね」

佐伯さんの真面目な顔が瞬時に和んだ。

「…ちゃんと話してくれて、ありがとう。できることならちゃんと貴女には赤ちゃん産んでほしかったから。産みたいです、って言うてくれたとき、正直ホツとしたわ」

和泉ちゃんはまじまじと佐伯さんを見た。微かに、喉が小さく上下したように見える。

「成留ちゃんも今後の参考のために、覚えておいてもらいたいんだけど。こういった大事なことはひとり抱え込まないで、ちゃんと誰かに言いなさいね。そうでなくても、密かに気付いてくれてる人だって、職場にはいるんだからね」

私は驚いて佐伯さんを見た。それって。

「佐伯さん、あの時もしかしてそのこと…」

にこやかに笑う佐伯さんを見て、和泉ちゃんはまた涙する。

「…佐伯さ…っ」

「やあだ、泣かせるつもり無かったのに。まったく、上司を甘く見ないでほしいものね。具合が悪そうだったのも実際に倒れたのも、単なる貧血じゃないことくらい、…お腹に子供がいるせいで倒れたんだって、仮にも女性であるあたしが分からないとも思う？…勇輝ちゃん、ご両親はきつと、許してくれる」

「…どうして、分かつ…？」

「自分の名前の意味を、聞いたことある？ 勇輝…勇気を持って輝く子になってほしいっていみでしょ。少なくとも、あたしならそういう意味を込めてつけるからね」

私はハツとして両者を見た。…勇、輝。

「そのとおりこうして勇気を出して、ちゃんと産みますって言ったんだから。期待を込めた名前どおりの行動をしたんだからね。きつと大丈夫」

それから、と佐伯さんは和泉ちゃんの頭を撫でながら続けた。

「もし烏丸が『産むな』って言ったら、真っ先にあたしのところまでチクんなさい」

佐伯さんの声のトーンが低くなり、和やかだった顔つきが計算高い勝負師のような顔になる。

思わず訊いてしまったほど。

「どつするつもりですか？」

「酒の呑み比べで泥酔させてから、弱み握って社内中に撒き散らす」  
ふ、と和泉ちゃんが泣きながら笑う。

「そ…んな顔してそんなセリフ言ったら、シャレになりません」

「当たり前よ。本気だもの。…さ、勇気出して。まずは烏丸にでも会いに行つてよく話してきなさい。あたしがいま言ったこと、忘れるんじゃないよ。あいつが嫌とか言ってきたら、散々な目にあわせてやるからね」

和泉ちゃんは笑いながら『はい』と言うと、立ち上がって深々と頭を下げた。

佐伯さんだけじゃなく、私にも。

「ありがとうございます、ございました。おかげで勇気がわいてきました」

「その調子その調子。…勇輝ちゃん、何も食べないで行くの？」

「ええ、ちよつと…まだ、悪阻が辛いんで」

私と佐伯さんは顔を合わせると、思わず笑ってしまった。

帰ろうとする和泉ちゃんを、私は慌てて呼び止める。

「あ、和泉ちゃん」

「なに？ 成留」

私は胸に滞る苦いものを飲み下して、できる限り明るい声をつくって和泉ちゃんに言っただげた。

誤魔化しても何でもない、れっきとした私の本心を。

「…おめでとう。頑張って元気な赤ちゃん、産んでねっ」

…たぶん一生、その言葉を貰えないだろう私自身に代わって。

## 19歳の母(4)

龍一から深刻すぎる人生相談を請けてから数日が経ち、俺はまわってきた『お知らせ』に驚くより先に笑顔がこぼれた。

「へ〜。龍一の奴、やるう！」

ペラ紙には『烏丸・和泉 婚約おめでとうパーティーのお知らせ』。

「おめでとございます。烏丸さん、和泉ちゃん」

コーヒープレイクに入った直後だから、成留も和泉さんもまだライン内にいる。

回覧はなぜか幹事ではなく、祝われる側の龍一が直に持ってきた。

「あれ？ でも『参加・不参加』の欄に誰も署名してないけど」

「あーそれな、保全課とA班の誰よりも先に、かさねと成留ちゃんに記名してほしかったからさ」

「は？ なんで」

俺は成留を見るが、彼女も首をかしげるだけだった。

そこで熱々の2人組が照れたように笑う。

ふたりが『できたっちゃ婚約』であることは、今のところ俺たちだけの秘密だ。

『できちゃった』でなく『できたっちゃ』なのは、和泉さんの出身地の方言とかけたから。

「いや、勇輝もオレも、今回の件で2人には世話になってるしい…まあなんつーの？ えっとアレだ。つきしたこおりびとってやつ

「つきしたこおりびと？」

頭のいい成留はこれだけでピンときたようだ。

「烏丸さん、それ『月下氷人』のことですか」

「四字熟語で格好つけてもダメよ、龍一。こついつときすぐボロ出しちゃうんだから」

「そこうるさい」

へえ、と成留が珍しくニヤついた。

「龍一、だつてえ」

「なんだよーお前等もう新婚さんみたいじゃん」

俺が腕を龍一の肩に回そうとすると、あっさりかわされて奴は和泉さんと肩を組んだ。

…まさか男にまでフラれるなんて。

「そ。だってオレたちラブラブだもん。ねー？」

ねー？ というところで和泉さんと声が重なる。

冷やかそうにも熱々なあまり全く冷えないみたいだ。

「あーくそッ本っ当に幸せそうだな！ あー俺も早く結婚してえ  
ー」

「その前に彼女だろ？」

1番イタいツボを突かれた。

「なあ龍一？ お前さ、女のツテとかもう使う必要ねーから、有り  
余ってんだろ？ 誰か俺に紹介してくれよ」

「オレに紹介してもらわなくても、いるじゃん。目の前に」

龍一が指差す先には、言われるまでもなく濱田成留。

だが龍一の期待を裏切るようで申し訳ないが、あまりに慣れすぎた  
パターンだったので、さすがに俺も冷静に出来るようになっていた。  
しれっとした表情で言い返す。

「お前こないだ『オレの大切な成留ちゃんに手え出すな』みたいな  
こと言ってたろが」



「へー。じゃあ何か？ お前は成留ちゃんじゃ不満があるわけ？」

「え…」

返答に窮して成留を見るが、彼女は困ったように笑うだけ。

「…え〜」

不満どころか…とは言えず、俺は先の言葉を失った。

たとえ肯定しても否定しても、成留には困る返事に違いないからだ。

イエスともノーとも言えずに固まってる、龍一は気色悪いニユーハーフ口調で和泉さんに言った。

「や〜ん、松本さんってひどい。奥さん聞いたあ？ このヒト成留ちゃんじゃ不満だなんて言ってるんですよ」

「ばっ！ ち、ちが…そういう意味じゃ」

「成留も言ってるやんなよー。『あたしこそイヤですッ！』って、ズバツと」

「ななな成留！ かつ、勘違いすんなよな。お、お、俺はそんなこと…」

でもま、と龍一は余裕な顔で、俺の頭から帽子を取り上げて髪の毛を乱しにかかった。

くどいようだが龍一は俺よりも背が高い。

「どつちにしろかさね、お前は間違いなく成留ちゃんにフラれんぞ。だってお前だけが男じゃねーもん。だろ？ 成留ちゃん」

「りゅ、龍一貴様あーッ！！」

危なっかしくもプレス機の横ですったもんだの喧嘩を始めた俺たちに、成留と和泉さんは揃って楽しそうに笑っていた。

…成留に不満なんてあるわけない。

むしろ…と俺は龍一たちを見て気付いたんだ。

自分の、本当の気持ちに。

『誰にでも優しいのは構わないけど、優しくする相手を間違えるな。』

それができないんだったら、関わるのはやめておけ』

…バカをいえ、ナル。  
できないワケないだろ。

## 成留の幻影、月影のナル（1）

結婚をするにあたっては、ケースバイケースだが、結婚式というものをしなければならぬときもある。

とはいえそこは、19歳と21歳の初々しいにも初々しすぎるカップル（しかもできちゃった婚）。ホテルの披露宴プランなど申し込めるはずもない。

すでに両方の親戚に挨拶して回ったという龍一と和泉さん…いや、もう勇輝さんと呼ぶべきかな。

ふたりは勇輝さんのお腹が目立つ前にと、結婚式の準備にとりかかっていた。

式、というよりは披露宴を、会費制でやるつもりらしい。

「それで、その手伝いを俺たちにやれって？」

披露宴の2週間前になって急に俺は、式を手伝ってくれと頼まれた。確かに本社の人間だけでも保全課とA班は最悪全員呼ぶんだろうし、龍一がいた千葉支社の人間だって呼ばれているだろう。

会費制ならば、それを管理する受付係その他が必要になっても不思議なことではない。けど。

「だからって、俺はともかく成留まで巻き込まなくても」

「いや、成留ちゃんの方から勇輝に直接言ってきたんだよ。私に何か手伝わせてくれって」

「成留が？」

お人好しな彼女らしい。だがここでひとつ疑問が残る。

「もしかして、俺を受付に指名したのも…？」

「お前のそれはオレたちの都合　つーか、お前の他に気軽に頼める奴とかいないしい？　それに成留ちゃんとのコンビプレーも抜群だしな」

そんな理由だけで俺を指名してきたんかい、と龍一に裏手ツッコミ。

「お願いします松本さん。成留も松本さんとなら心強いでしょうし」

しかしもうすぐ人妻になるとはいえ、若い女の子に頼まれれば悪い気はしない。

そういうわけで俺と成留は受付兼司会兼その他雑用係という、とんでもなく面倒な役を引き受けることになってしまった。

両者にとって気軽に頼めるといっ点で言えば、考えるまでもなく俺たちが一番適任なんだろうが。

「それでかさね。式の打ち合わせってことで、今夜どうだ」

「俺はいいけど、…成留は今夜あいてる？」

聞こえなかったのか、成留は検査台から顔をあげない。

「…成留？」

「え？ ああ、すみません。なんででしょうか」

今までの会話も全く耳に入っていなかったようだ。

それで俺は再度今夜の予定を訊いた。

「今夜なんだけどさ、龍一たちの式の打ち合わせやるんだって。成留も来れる？」

「ああ。そういうことなら、いつでも大丈夫ですよ」

そう愛嬌でニコツと笑ってから、また検査台に目を落とした。

龍一は成留には聞こえないような小さい声で、俺に直接訊いてくる。

「…なあかさね、最近成留ちゃん、妙に検査に集中してね？」

「とつか、真剣そのものよね。仕事中は周りのことが全く眼中にないって感じ」

それは俺も同感だった。このごろ、成留は上の空であることが多い。

正確にはその表現も間違いで、検査中に限らず常に何かを考えてる

ことが多いのだ。

俺が何気ない話を成留にふっても、後で気付いて『すみません何の話でしたっけ』と返してくる回数が日ごとに増えてってる気がする。

「でもまあ、検査員が検査に集中するってのはいいことだもんなー。成留ちゃんも2年目に入っつてずいぶん成長したじゃん。お前と違って」

「…どーせ俺は成留より検査ヘタですよ」

成留はこっちの会話など気にも留めず、一心に検査を進めていた。

…だが実を言うと俺には、その理由がすでに分かっていた。

「検査中の成留の目付き、本当に鋭くなったね。なんか怖いくらい」

不良箇所の有無を確認する目は、切れ長のつりあがった鋭い目付き。

…そう。目の前で検査してるのは成留ではなく、ナルなのだ。

どういう了見なのかは知らないが、このごろは仕事にも『ナル』が現れる。

以前まではそんなこと、一切なかったのに。

話し掛けても後で気付くのが多いのは、その時だけナルから成留へと変わるから。

それか本人が去年、俺に打ち明けたように『成留』のフリをしてる

のかも。

俺が見てる限りでは、明らかに『成留』である時間よりも『ナル』である時間の方が多くなってきている。

それも、日を追うごとに少しずつ。

…どういふことなんだ？ ナル。

## 成留の幻影、月影のナル（2）

ナル side

まったく、人間という生き物は本当にどうしようもない。すべてを『自分』を基準にしてでしか計れないのだから。

『ナルは成留の影。成留を“実態”としてこの世に成し、留めおくのがそなたの役目…』

…だから、成留の精神はここまで壊れてしまったんだ。

最初に気付いたのは、成留の意識の中にアイツが出てきた時だった。

『…ナル…』

高熱にうかされてる間に、成留は夢を見ていた。

幼い日に風邪をこじらせ、暗い部屋でひとり眠る夢。

最初はおれが消した記憶を、おれが勝手に見てるものだと思ってい



た。

だが、違った。

成留の持っている記憶とおれの消した記憶が、成留の中に混在していたのだ。

…なぜだ。完璧に消したはずなのに…。

記憶を辿る夢は母親が帰ってくるまで辿り着き、成留の意識はそこで覚醒しようとしていた。

だが、それもおれの予想を裏切った。

『成留』の精神は奥深くに引き込まれてゆき、逆におれが浮かび上がるようにして『成留の意識』となって覚醒した。

…なぜだ。

疑問符で一杯になるおれの精神は、訳も分からないまま『ナル』として覚醒していく。

それが何を意味しているのか…おれの疑問は、成留の見ていた夢が形を変えたことによって解決された。

『…ナル…』

母親の言葉を、別の誰かが、向こうで囁いている。

そしておれが『ナル』として覚醒する直前…母親の姿は変化して、

紛れもないアイツの姿に変わっていた。

『…ナル…』

(…かさ…ね…?)

完璧に覚醒したおれは、高熱にうかされたフリをして、愕然とするしかなかった。

成留は誰も『大好き』にはなれない。

自分から友達をつくることも、自分から恋情を抱くこともできない。

当然、それを口に出して他人に告げるなど言語道断だった。

そうしたら、そいつが迷惑することを、こいつは知っている。

『私がいるから、何かがうまくいかないんだ』

成留という異分子。奴等にとって修正のしようもない『不良品』が、自分を『大好きだ』と言ってきたら、イヤな顔をするに決まってる。

ちょっと頭をめぐらせれば、誰にでも予想がつくことだ。

そして、成留は誰も嫌うことができない。

『大好き』という感情がないのだから、その裏側にある『大嫌い』という感情も存在しないのは当たり前だ。

なら成留は他人に興味がないかといえば、そうじゃない。

誰も彼もを公平に好きになる方法が、たった1つだけある。

他ならぬ自分を嫌いになり、反対側の『好き』という感情を他人に与えればいいことだ。

他人を好きになる分にはいい。他人を嫌うことができないのだから。好意を示してくる奴には『大好き』ではなく『好き』というところに留め、自分を嫌う奴には『嫌いじゃない』という程度に留めておけば済む。

嫌いといえば角が立つが『嫌いじゃない』のなら、いかに『不良品』の抱く感情とはいえ『好かれている』よりは悪くない。

それが、成留の精神をここまで壊していった。

成留は他の誰よりも、自分が存在することを許していないからだ。

『…私がいるから、何かがうまくいかない…』

相手の期待に応えることができず、不用な存在となっている成留。

自分で自分の存在を許せない、その気持ちから自らの手で自分の精神を壊していく結果となった。

『…私じゃなければ、何もかもうまくいく…』

その成留が壊していった精神の一部分が『おれ』だ。

成留の精神から真つ先に引き剥がされたもの。成留が最初に自ら手放した感情。

…自分への愛情。

成留はずっと、自分で自分を好きになることができないでいた。

思えばそれは幼い成留の、精一杯の虚勢であり、自己防衛だったのかもしれない。

所詮人間というのは、自分が一番自分のことを好きな生き物だから。

その自分ですら好きになれないような人間を、誰かが好いてくれるはずがない。

だから誰もが自分を嫌う。…確かにこれなら誰を否定することなく、当然の事として理屈が通る。

それはおれからすれば、ひどく寂しいことのように思えた。

自分への愛情…『おれ』というストッパーの外れた成留の精神は、周りからの衝撃も受けて少しずつ少しずつ欠けていった。

おれがナルとして色々やってみて、それはだいぶ緩和されたが、それでも完全に食い止めることはできなかった。

…ダメなんだ、とおれは自分の非力を思い知ることになる。

おれが成留を愛するだけじゃ、ダメなんだ。崩壊は止められない。

成留が誰かの『大切な人』にならない限りは。

『よろしく』

成留の中で『外』を見ていたおれは、去年、そう話し掛けてきた奴に妙な気分をおぼえたものだ。

あの和泉という女でさえ、成留と仲良くなるまで時間がかかったのに。

こんな簡単に成留に話し掛けられる奴がいるとは思いもしなかった。

松本かさね。おれが初めて『ナル』としても相手した最初の人間。

『成留』として逢う前に『ナル』としてすでに逢っていたこともあるんだろ。

かさねはどういうわけか、成留と自分との間にある隙間を…成留は相手との心の距離を計るため、最初から少しだけ距離を置く癖がある…埋めにかかった。

その点では奴の友達の烏丸という奴も一緒だが、遊び半分のそいつとは違って、かさねはあくまでも本気だった。

そしていつからだったろう、誰もいなかった成留の心に、確かに、かさねが現れるようになってきたのは。

それが確信へと変わったのは、例の夢に出てきた時だ。

成留が奴にどんな感情を抱いているのかは別として、明らかにかねの存在は成留の中で大きなものになっていた。

あまつさえ手紙を届け、母親の手紙に涙した成留を丸ごと受け入れてやったのも、こいつじゃなきゃ出来なかつたらうなと察しがつく人間にしてみれば上出来な方だとも思う。

…こいつなら、とおれはふと頭に浮かんだ。

こいつなら、成留の精神が崩壊するのを、止められるかもしれないけれど、その時にはもう遅すぎた。

『…私じゃなければ…』

成留の精神の崩壊は、おれが思ってた以上に進んでいた。

優しく抱き締められただけのものが、すでに握ることさえ出来ないほど削られてたのだ。

もう温めることもできず、守ることもできず、おれが『外』に出てきてワンクッション置き、衝撃を和らげることではか、崩壊を緩和させることはできない。

…壊れてしまう。

壊れてしまえば最後、もう『成留』としてこの世に成すことも、留まることも出来なくなってしまう。

『ナルは成留の影。彼女を守る、それ以外の生はそなたにはない…』

破綻はもうすぐそこまで迫っていた。

### 成留の幻影、月影のナル(3)

「成留…ちよつと、そこまでいいか」

打ち合わせの後、例によって俺は成留を家まで送るといつ話になった。

帰り際に『送り狼になるなよ』と龍一に言われてすかさずケリを入れたが、もちろん成留の耳には入っていない。

「少し…話したいことが、あるんだけど」

成留はどうして？ と訊くでもなく、素直に頷いた。

相も変わらず俺はロードバイクを押して、成留と並んで夜道を歩いていた。

俺が成留を連れていった先は、ちょうど俺のアパートと成留の居候先である濱田家の間くらいにある神社だ。

俺が前にここを訪れたのは、たしか去年の8月後半だったっけ。

「…ここに成留と来るのも、久しぶりだなー」

そうやって俺は成留を見る…というより、挑発するようにじっと見つめた。



成留もそれに気付いてこっちを見上げる。

人の良さそうな、下がり気味の優しい目付きで。

「……………」

「……………」

俺はそれ以上何も言わなかった。成留も俺を見上げたまま無言を徹した。

こうなれば一種の根比べみたいなものだ。

「……………」

「……………」

ムードも何もなく見つめ合ったまましばらくして、成留はとことこ歩いて石段の下から3番目に腰掛けた。

「松本さんって、本っ当に鋭いんですねー。…さっきの言葉、わざと『成留』の名前を出したんだろ？」

言葉を区切ったその次には、声色も口調もガラリと変わって冷淡になっっていた。

彼女のお人好し加減を表すような優しい目も、全てを見下すような鋭く可愛くない目に変貌する。

「だってこうでもしないと、お前、ちゃんと俺の前に出てきてくん

ないじゃん。このごろは仕事中にだって出てくるのにぞ」

俺は勝手にナルの横に腰掛ける。

「…ちゃんと出てきてくれたってことは、話はもう分かってるよな。  
…何で最近、お前ばっか出てくるようになった？」

ナルは冷たい視線を俺に向けた。

「そりゃあ、成留が出て来なくなる事情があったから、だな」

「…お前が成留に何かしたのか!？」

眉間に皺を寄せた俺に、ナルはこれまでにないくらい冷笑する。

「原因はあんただよ、松本かさね」

「え？」

「あんたがおれの言うこと聞かないで、誰にでもいー顔してっから、  
成留が正々堂々外に出て来れなくなったんだ」

中華鍋でガーン！ と殴られたようなショック。

あの、妙にマジだった忠告が、実はナルの『本当は怖い最終警告』  
だったなんて。

空には満月が浮かんでいて、御神木の枝葉から漏れる月光が、石段  
に座る俺たちに降り注いでいた。

そこにナルの静かな声が響く。

「…あのさ。なんであんだ、そんな成留にこだわってんの？」

「は？」

「は？ じゃねーよ。同僚だから心配するってのは分かるけどさ、べつに成留が死ぬわけでもいなくなるわけでもねーんだぞ？ まあ、性格は確実におれ寄りになるだろうけどな。もう『成留』でなくなるわけだから」

「……………」

「なあかさね、なんでおれじゃダメなわけ？」

「…そ、それは…」

「そんなに『成留』じゃなくなるのが辛いかな？」

「……………」

何て言えばいいのかわからず、俺は次の言葉を見つけれなかった。

俺の成留に対する正直な気持ちを、ナルに打ち明けてしまってもいいものなのだろうか。

ナルも俺に負けず劣らず、鋭かった。

言葉に詰まってしまった俺の様子から、俺の葛藤の原因を察してしまっただらしい。

「…やだよ。おれはあんたの女になんかならない」

だつてさー、とナルは頭上の月を見上げた。

満月を見上げるキレイな顔をしたナルは、さながらくぐや姫みたいな雰囲気があった。

少年の人格を持った状態でこの表現はどうかと思うが。

「あんた、最初に『おれ』として出逢わなかったら、成留に然して興味も持たなかつたら？」

「う…」

確かに俺が成留に興味を持ったのは、ナルの一件があったからだ。

でも、ただそれだけのことじゃないか。

「たとえあんたが今、本当に成留を好きでも、そんなハンパな気持ちのままじゃそのうち飽きるに決まってる。捨てられてポイで成留が泣き見るのは、目に見えてる。だから…あんたに、成留は渡せない」

「…ナル…」

そのときだった。

何か危ない気配を感じて、俺とナルが同時に石段から飛び降りて逃げたのは。

「うわっ、っ！」

「……………っ！」

俺はよろけながら、ナルは素早く後ろを振り返る。

そこには東洋的な顔立ちで、髪と目だけが白色人種という無国籍なお兄ちゃんたちが立っていた。

一番前の顔中ピアス男の手には、神聖なる神社の境内には似つかわしくない鉄パイプ。

「まさかと思つてちよつくりや試してみりゃ、やっぱテメー等か」

先と根元で髪の色が違う男が少し前に出る。

「そんな逃げなさんなつてご兩人。オレたちはただ、こないだの借りを返しに来ただけじゃねーか」

「借りつて…？ あ！ あんたたちもしかして」

俺はビシッと食指を突きつけた。この4人には確かに見覚えがある。

「あのときの不良1・2・3・4！」

「おいコラなめてんのか貴様。せめて『不良』で止めとけや」

まだ成留が二重人格だつて知らなくて、成留として初めて出逢った日の夜。

偶然通りかかった俺が絡まれてる成留を助けに入ったが、突如ナルの人格に変わった成留に…言ってるややくしくなってきた…不良どもはあっけなく血祭りにあげられたのだ。

あいつらに間違いはない。

その時の借りを返そうってのか!?

「あん時は小娘と素人だと思って手加減してたが、見つけたからにはもう容赦しねえ」

「おいちょっと待テ、俺は何もやってな…」

「今度こそブツ殺したる！」

人の話を聞きもしない。

## 成留の幻影、月影のナル（4）

位置的にも環境的にも逃げ場のない俺たちは、取っ組み合いに強制参加させられることになってしまった。

俺たちといつても実際には、ほとんどナルが相手してんだけど。

例によって俺は警察を呼ぼうとケータイを探っていたが、不良3と4に板挟みにされてしまい、仕方なくケータイをポケットに入れてから両者の攻撃を間一髪で避けた。

「！ っと」

御神木の近くでナルが不良1・2と闘っている。

「っ、何やってんだかさね！ 早く逃げてケーサツでも誰でも呼べ！」

「はぁ？ バカ！ お前ひとりだけ置いて逃げられるわけねーだろ！」

俺がお巡りさんと呼ぶよりも、ナルの素早い足攻撃の方が手っ取り早かった。

高身長に比例する長い脚で蹴り飛ばされて、不良1か2の持っていたジャックナイフ（ナイフ！？）が消失した。

その隙を狙って不良2の横っ面にストレートパンチをお見舞いし、敵がひとり、その場に昏倒する。

避けては逃げてばっかの俺よりも、ナルの方が強敵だと思ったんだろうか。

不良3が加勢に入り、俺の相手は顔中ピアスだらけの不良4のみとなった。

ここはやっぱりケーサツ、呼ぶべきなのでしょうが。

(ケーサツ…あ、そういえば…！)

警察のことを思い出した途端、同時に昨日のテレビでやってた防犯特集も思い出した。

例えば背後からストーカーに抱きつかれたときは。

「！ ふぎあッ」

わざと隙を見せて相手に背後から襲わせ、羽交い締めしてきたと同時に足の小指を思いきり踏んづけてやった。

おそらく、いやきつとかなり痛かっただろう。

負ってない痛みを想像するのも嫌なので、共感する前に両足の間の急所も蹴飛ばしてやる。

ついでに武器も拝借しておいた。これで形成は2 vs 2。



「ナル！」

不良奇数番号2人のうち、ナルは不良1の横っ面めがけ回し蹴りを繰り返し見事ヒットさせていた。

しかしなぜに顔ばかり狙うんだ？ そんなことを考えてると。

「…ナメんなやこのアマあ！」

回し蹴りは体勢を立て直すのに時間がかかる。

ましてや背後から来る敵に向けて攻撃の体勢をとるにはちょっとでも余裕が必要だった。

ナルがさつき蹴り飛ばしたナイフを拾って、金髪と黒毛のメッシュ頭、不良3が成留に凶器を向けてきたのだ。

「！っ…」

ナルもその声に気付いたのだが、やはり体勢が整わずに刺されると予想したのだろう。

あの夜の俺と同じように、ナルも防御するまで頭が回らずその場を動けないでいた。

「今度あテメーが死ねやー！」

ナルは挑発的に相手を睨み付けたまま硬直していた。

「それはこつちの…セリフだっ！」

セリフの『セ』の音を発すると同時に、俺は不良4から奪い取った鉄パイプを不良3の肩に振り下ろした。

ガッ！ と鈍い音がしたときには、ナルの鋭い目が驚愕を表すように丸くなっていった。

「…ッ！ クソーなめんなやテメエ！」

キレた不良3は今度は俺目掛けナイフを突きだしにかかる。

対して俺の武器は鉄パイプ1本。誰が見ても俺のが不利だ。

だが、俺はその唯一の武器である鉄パイプを下に捨てる。

もちろん勝算あつての作戦だ。

「うらー！」

「危ないッ！」

不良3とナルの声が重なった。ピンチの時に心配の声は心強い嬉しい。

ナイフを突きだしてきたタイミングを見計らい、俺は不良3の腕を掴んで引き寄せる。

そいつの動きに合わせて捻りあげると、そのまま背負って投げ飛ばした。

あの時ナルが俺を助けたのと同じ『背負い投げ』で、今度は俺が不良を倒してやった。

シユパーツと行き場を失ったジャックナイフが、音をたてて石畳の上を回転して止まる。

「大丈夫か！ ナル、怪我はないか？」

「…かさね…あんた、喧嘩とか強かったっけ…」

「あれ、言ってなかったっけ。俺、柔道と剣道だけは段持ちなの。高校からずっとやってなかったし、ちよっと腕は落ちたかもしんないけど」

男に女の名前をつけると丈夫に育つ、という江戸時代の言い伝えはどうも本当らしい。

ありがとう親父、そして滝沢馬琴。

「…で、本当にケガとかないか？」

「あ、ああ。助かったよ。サンキューな」

俺が座り込むナルに手を差し伸べると、奴は素直に俺の手をとって立ち上がった。

「？ かさね…？」

そのまま離そうとする小さな手を、俺は逆に強く握り締める。

「ナル…さっきの、話の続きだけど…。…俺、絶対に成留のこと裏切らないから。絶対に飽きて捨てたりしないから」

もつと落ち着いた場所で言えよとも思うが、せつかくナルと心を通わせることのできた貴重なひとときなのだ。

なによりナルが俺に心を開くことは珍しい。この際だから全部言うてしまおう。

「今までが今までだってんなら、信じてもらわなくてもいいよ。でも、成留の方からフラない限りは、成留のことずっと大切にす。絶対に成留を泣かせるようなことはしない。…よくなるべく努力だけはしてみる…。…だから」

我ながら約束しきれない情けなすぎる言葉に、ナルは案の定、呆れた顔で俺を見ると、自分の手を俺の手のひらから抜いた。

そして、言う。

「…なら、やってみる」

「へ？」

「お前が成留を本当にひとりで守りきれるか、試してやる」

「…それ、って…」

「知らないようだから言っとくが」

ナルは俺のロードバイクから荷物をとった。

「おれの助けは期待するな。お前が成留を受け入れて、成留がお前を受け入れたら、おれはもう『ナル』として現れない」

「えっ？」

「おれが成留の中にいたのは、成留を守るためだ。お前が成留を守るといふなら、おれの存在はもう必要なくなるからな」

「……………」

衝撃的な告白に度肝を抜かれている間に、ナルは目を閉じて自分の胸に手をやっていた。

しばらく経ってから、おもむろに目を開ける。

「…そうだな1ヶ月…いや、何かあった場合を考えると2週間だな。それだけ時間をくれてやる。その間にできるだけのことはやってみる。2週間、おれは『外』に出ないようにする」

「…『外』って？」

「その間に成留がお前を受け入れたら、おれはもう『外』には出ない。だがもし2週間のどっかで『おれ』が出てきたときは…」

ナルはその続きを残して、満月の傾いている方向へ去っていった。

姿が見えなくなるまで、俺はナルの言葉を頭の中で再生していた。

『…それが、成留の精神（ココロ）の期限（リミット）だと思え』

満月は静かに俺たちを照らしている。

## 最後の賭け(1)

2週間はあっという間に過ぎていった。

「えー、では僭越ながら私めが乾杯の音頭をとらせていただきます。若い2人の明るい前途を祝しましてえ…ちきしょー烏丸のやつ、よくもこんな若くてカワイイ子を！」

会場にいる仕事関係者全員の笑いをかつさらうと、柏木さんの声に合わせてカンパイの声がその場にこだました。

受付を済まして司会進行役にまわった俺と成留は、シャンパングラスを軽く上げて中身をグツと飲み干した。

乾杯の酒は文字通り杯を乾す(飲み干す)のが礼儀つてもんだ。

もちろん、成留のは炭酸入りのミネラルウォーターだけどね。

式は気持ちのいいくらい晴れた青空のもとで行われた。

仲間内だけの会費制パーティーだから、店も小さいしそんなに改まった席じゃない。

飲み会と同じとはいかないまでも、中学校の卒業パーティーと同じくらいの気軽さがそこにはあった。

だから司会進行役の俺たちも、乾杯さえ終われば後はご自由にご歓談&お食事くらい、できるんですけど。

「かさねもそろそろ、成留ちゃん仕留めないとなく」

立食スタイルだから新郎新婦も自由に動き回れる。

白いクレープのワンピース姿の勇輝さんと歓談中の成留をグラスで示しながら、ブラックスーツにデニムという、カジュアルスタイルの龍一が俺の肩を抱いてきた。

「だからそんなんじゃないって」

「嘘つけ！ オレが何年お前とダチやってきたと思ってるんだよ。その低血圧モロ出しな顔にしっかき書いてあるぞ」

「……………」

バレている。完全にバレている。

「ところでお前と成留ちゃんの今の関係は？」

「先輩後輩」

「嘘だろ！？ 本当にそれだけかよ。だったらお前ら、去年の8月から1ミリも進んでないってことになるぞ。かさね、正直に話してくれちゃっていいんだよ？ おにーちゃんがドーンと聞いてあげるからさ」

「正直に言ってる。悪かったな1ミリも進んでなくて。っていうか



俺の方が年上だし」

「たった2ヶ月じゃねーかよ！ なあかさね、マジで言うんだけど、成留ちゃん実力行使してでも頑張つてモノにしちゃえよ。なんだつたらオレが既成事実つくれる必勝法、特別お前にだけ伝授してやるからよ」

「な…っ！ お前、ナニそんなオープンな事…」

「だいたいな、腐った鯛が逃げた後で後悔しても遅いんだぞ？」

「まな板の上の鯉だろ！ 腐った鯛逃げないから！ それに腐ったサカナ逃がしても惜しくねーし」

「何が惜しくないんですかー？」

歓談中だった成留が勇輝さんと一緒に、俺と龍一の楽しそうな様子を見てたのか興味津々で近付いてくる。

「ん？ ああそれがさ、コイツが成留ちゃんのことを好…」

「わー待て待て待て龍一！ それは俺がチヨクで話すから！ 頼むからこの場ではまだ言わないでくれッ」

龍一はふうと疲れたみたいなの溜め息を吐くと、俺の頭をコツンと軽く叩いた。

ちゃんと成留ちゃん落とせよ、の合図だ。

## 最後の賭け(2)

『お前が成留を本当にひとりで守りきれるか、試してやる』

…そうナルが言い残してから、2週間が経った。

出てこない、と言ったとおり、あれだけ頻繁に現れてたナルが、この2週間一度も出てこなかった。

成留はあくまで『成留』のまま、仕事と式の準備を同時にこなすという、実に多忙な2週間で俺と一緒に過ごしていた。

もちろん、俺たちの仲にこれといった進展はない。

…成留の心のリミットは、2週間。

今日までにどうかしなければ『成留』は消える。

分かっているのに何も言えず、何も出来なかったのは、その代償をナルの口から聞かされていたからだ。

『おれはもう“ナル”として現れない。おれが成留の中にいたのは、成留を守るためだ。お前が成留を守るといふなら、おれの存在はもう必要なくなるからな』

成留が『成留』のままではいられたら、代わりに『ナル』が消える。

そして、成留が二重人格であることを知ってる奴は、俺の他にはいない。

当然ナルの存在も、周囲には認知されていないはずだ。

ナルは成留の別人格だから『ナル』としての戸籍も出生届も、何もない。

たとえナルの時に撮った写真があるとしても、そこに映る姿は『ナル』のものではない。

後でナルが確かに『いた』という証を見つけようとしても、それはもう叶わない。

ナルの存在は最初から無かったものとされてしまう。

なのに、あいつは。

『おれはもう“外”には出ない』

あいつは、成留のためだけに生き、成留のためだけに消えようとして、いるのか…？

俺がひとりで葛藤していると、視界の端からにゅっと成留が覗き込んできた。

不覚にもドキッとしてしまう。

「松本さん…どうしたんですか？ 顔色悪いですよ」

新婦さんにも心配そうな顔をさせてしまい、俺は慌てて首を振った。

「え？ ああ、昨日緊張してて、あんま寝てなくってさ」

「なんだよーお前。自分の結婚式ならまだしも、親友の結婚式前夜に緊張で眠れなかったってか？」

一方で新郎は上機嫌に笑いながら、俺の脇腹を肘で小突いてくる。

(…眠れるわけねーだろ…)

俺は勇輝さんと無邪気に笑い合う成留を見て毒づいた。

昨日一晩中、…どっちの結果に転ぶにせよ、今日でどっちかとはお別れなのだから、俺は万年床の中である作戦を練っていたのだ。

(ナルは、もう出てこないと言っていた。…だから)

俺は汗ばむ手のひらをぎゅっと握り締め、龍一のもとに戻る勇輝さんを見送っていた成留を呼んだ。

呼ぶと同時に彼女の腕を掴んだ。

「成留、…ちょっと、話があるんだけど」

作戦を実行するために。

### 最後の賭け(3)

俺は成留を店の中庭まで連れ出し、そこに誰もいないことを確認してから足を止めた。

「どっ、どうしたんですか？ 急に…」

成留は手首を掴まれたまま動揺してる。無理もない。

俺は中庭の隅にある藤棚まで成留を引っ張り込むと、ずっと掴みっぱなしだった手首を離してちゃんと向き直る。

「…成留」

「は、ハイ…」

「なんてゆーか…俺、いま友達に、ちょっと試されててさあ」

固有名詞だけを伏せてまずは成留に告げる。

「俺、いま好きな人がいてさ。その友達も、俺がそうだってこと知ってて…。そいつが言うにはな、俺がちゃんとその人のこと…その、大好きになれないと、その人が俺の前からいなくなるってことらしいんだ」

成留は神妙に頷いた。でもたぶん意味は分かってくれてない。

「でも、俺がその人に告つたら、今度はそいつが俺の前から姿を消すって、言ってきたんだよ。だから…それで成留のこと、その…アレだとは思ってたんだけど、なかなか言えなくて」

「アレ、っていつのは？」

その問いかけには答えなかった。

色恋沙汰にだけは鈍いのか、成留は俺の言いたいことに全く気づいてくれてない。

なんだか俺が恋愛相談持ちかけたような気分になってくる。

「…昨日一晩中、考えてたんだ。2人にとって俺はそんな大切な存在じゃないかもしれないけど、俺はどっちかだけを選べない。どっちがいなくなっても、きつと俺は後悔する」

話が核心に入ってきたのを見て、成留はさっきよりずっと身を入れて聞いてくれるようになった。

おい、ナル。お前もちゃんと聞いているか？

「俺、欲張りだから、どっちも失いたくないんだ。でも、このままだと片方しか選べない」

「……………」

「だから…俺、そいつと賭けをしようと思っ」

賭け、というところで成留は首を捻った。

「その友達は俺が信用できないから、その好きな人を渡せないと言った。だから信用できたら俺に全部任せて、自分は身を引こうって言ったんだ」

「……………」

「だったら俺、そいつが信用も縁も捨てないように、全力を尽くす。全力を尽くして、それでもダメだったら潔く敗けを認めて両方も諦める。でも万一、いや百万が一そいつが俺を信用して縁も切らないと言ってきたら、俺の勝ちだ。…その時は」

なる、と俺は両方の名前を同時に声に出した。

じっと見つめ返してくる眼差しは、成留とナル両方のそれが一緒になって溶け込んでいた。

穏やかで優しく冷たくて鋭い視線が、俺の次の言葉を待っている。俺はその目を真っ直ぐに見据えて、緊張を悟られないように心がけながら強く言った。

成留にも、…ナルにも。

「その好きな人に…成留に、ちゃんと気持ちを打ち明けるよ」

「…松本さん…！」

計ったように吹いてきた強い風が、俺たちの間を抜けていく。

成留の着ている藤色のワンピースが裾を揺らし……ライトブラウンの  
下ろした巻き髪が、風の往く方向に流れていった。



## 最後の賭け(4)

なにかと多忙だった式もお開きとなり、受付兼司会兼その他雑用係として関係者全員を見送った後、帰り際に新郎新婦にいとも月並みな『お幸せに』を言ってから、俺は成留を呼び止めた。

「…さっきの返事…聞かせて、くれるかな」

成留が動揺するのがハッキリ分かった。目が泳いでる。

「ああでも、とにかくここじゃアレだから…こっち」

梅雨冷えというやつだろうか、成留の手は氷のように冷たかった。

冷えきった震える手が、俺の節くれだった指や皮の厚い手のひらから、温かさを奪っていくのを感じた。

手を繋いだまま、俺たちはどのくらい歩いたんだろう。

きつと少しきちんとした格好をしていることもあって、通行人には俺たちがデートしてるように見えたかもしれない。

俺の歩調は次第に速くなり、道も見慣れない風景を背景にして前へ前へと伸びてゆく。

俺は何も言わなかった。成留も一言も発しない。

大通りから外れた道は複雑に入り組み、まばらだった人影も竹林の裏を通過したのを最後にとうとう見られなくなった。

俺は成留から手を離すことなく、両脇に鬱蒼とした雑木林を有した舗装されていない砂利道へと引き込んだ。

奥へ進むにつれて、木陰に遮られた夕陽もろくに届かなくなる。

そこで俺はようやく足を止め、…成留の手を解いた。

「…なんで、何も言わねーんだよ」

振り向いた俺は一体どんな顔をしていたんだろう。

たぶん不満な感情モロ出しだったんだろうなと苦笑しつつ、成留の肩を強く掴んだ。

「お前は、いつもそうだ。簡単にこんな所に連れてこられて、お前」  
成留はじつと静かに俺を見ていたが、ふと目を伏せるともう一度、俺を見上げた。

「…。…分かったよ、かさね。よく頑張った。おれの負けだ」

170cm弱の長身、細い体、ライトブラウンの緩い巻き髪。

ぶつきらぼうで冷たくて、静かに突き放すような声色と口調。

切れ長の鋭くつり上がった双眸は、何もかもを拒絶するように。

「…っ、ナル」

「分かったって言ったろ？ 心配すんな。『成留』はまだ消えてない。この分ならあんたに任せときゃ、あと10年くらいは保つだらう」

「…お前は、どうするつもりだよ」

「……………」

ナルは静かに嘆息してから、俺に肩を掴まれたまま言った。

「そうだな…違うな。確かにおれは『賭け』に負けた。でもそれは半分だけだ。成留が他人を『大好き』になることを覚えたら、おれは『ナル』として存在できなくなる。これだけはどうしようもない」

「…他人を、大好きに？ …じゃあ成留は…」

思いがけず聞くことのできた成留の返事に喜ぶより先に、最初の、負けたのは半分だけという言葉が引っ掛かった。

「でも…俺、お前のことも諦めたくないんだよ」

「虻蜂取らずって言うだろ。ゼータク言っていないでどっちかにしろ。二兎を追う者一兎も得ずって諺、知ってるか？」

かさね、と俺よりも少し背が低いナルは、つま先立って俺の頬を軽く叩いた。

さつきまで俺が握ってた手は、また少し冷たくなっている。

「ハマダナルはもともと、この世には存在しないんだよ」

「！ 違う、確かにいた」

「いない」

短く言って、ナルは俺の手を肩から引き剥がそうとする。

でも俺は、諦めない。

「…あのさ？ そんなに強く掴んでると、痕が残って仕方ねーんだけど」

「お前が傍にいるって言うてくれるまで、離さない」

「馬鹿が本当にバカみてーなこと言っな。成留がコレ気付いたらどーするつもりだ」

「都合が悪かったら、お前が記憶を書き替えるんだろ？」

俺もなかなか強情だったが、ナルも簡単には折れなかった。

ナルは俺から逃れようと孤軍奮闘するが、腕力の差で俺が肩を掴む手に力を入れさえすれば、状況は全く変わらない。

とうとうナルが抗うのをやめて額に手を宛がったとき、俺は完全に『賭け』に勝つべく、残しておいた切り札を使った。

ナルに一番、言ってやりたかったことだ。

## 最後の賭け(5)

「…お前は、お前として生きられないのか」

ナルは人をバカにするように睨んできた。

「はあ？」

「成留を守るためとか、そんなんじゃなくてさ。お前がお前の生きたいように、ハマダナルの人生を、成留のちよっとした時間を借りて生きられないのかって話」

「…無理だよ」

「どうして」

「ハマダナルは、本当は存在しないはずの人格だ。そんな奴が自分のために、どうやって生きればいい。おれなんか女と恋愛も結婚もできないんだぞ。友達つくったって、おれを憶えてくれる奴なんかいない」

「じゃあ、俺は？」

強く肩を握った手でナルの肩を揺さぶる。

小刻みな衝撃を与えても、ナルの鋭い双眸はその冷たい温度を変え

ない。

「俺は憶えてる。お前は俺のことなんか、どうだっただいいだらうけど、俺の中には確かにお前はいるよ。お前が俺を嫌っててもいい。成留にも言ったけど、俺にとってお前は大切なダチだから」

俺に鮭おにぎりを渡してくれたナル。不良をあっさり倒したナル。

俺に忠告してくれたナル。心の蟠りを静かに吐き出したナル。

サンキュー、と礼を言ったナル。かさね、と俺を呼んでいたナル。

「成留も大事だけど、お前も大事な存在なんだ。どっちが大切か選べ、だなんて。そんな順番、決められやしない」

ここで初めてナルが絶句した。

信じられないとでも言うような顔で、鋭い眼光を放ったまま俺の目を見つめてる。

「俺は欲張りだから、どれもこれも1番にしか選べないんだよ」

動かしてないのに、女の子に特有の線の細い肩が小刻みに震えてる。

「。。。でもお前は、成留のことが一番大切だったのな」

ピクン、とナルの肩が痙攣した。

「自分が一番可愛いと思うのは結局は自分だ、とかいうけど、お前はそれ以上に、成留のことが大切だったんだ？」

「…だって…」

「自分のことなんて、どうでもよくなるくらい」

「…だって！　そうでもしないと成留が！！」

ナルの声でそう叫び、眉間を思いきり寄せて俺を見てから俯いた。

肩の震えが縦揺れとなり、俯いた拍子に落ちてきた前髪で目元が見えなくなる。

木漏れ夕陽を反射した涙が俺たちの足元に落ちた。

泣いている、と気付くまでにはちよつと時間がかかった。

なにしろナルが泣くところを見るのは初めてだったので。

俺は肩を掴む手を緩めた。逃げ出す様子は、まるでない。

「…泣けよ、ナル。成留だって、俺の前でボロボロ泣いてるんだ」

知ってる、とこいつは泣き笑いしながら憎まれ口を叩いた。

「でも、いいのか？　そしたらあなたの一張羅、台無しになるぞ」

「あ、そう。この服一枚でお前が俺の胸に飛び込んでくれるなら、安いもんだな。なんだったらバラードの一曲くらい歌ってやるぞ」

「…ぶざけんのもいい加減に…っ」



ナルの返事も待たずに、俺は両腕でナルの肩を抱えていた。

身長差約6センチのナルを引き寄せると、涙は肩にじんわりと染みていく。

「……言つたる。傍にいろつて言つてくれるまで、離さないつて」

「……………」

「時間をくれ。そう簡単に決められることじゃないから。俺に余裕ができるまで、せめてそれまでは待つていてほしい。俺は……成留も大切にすけど、お前のことも友達として大切にしたいんだ」

ナルは体を強張らせたまま、俺の肩に顎を載せてただ黙っていた。

周囲には車も走つてないし人も通らないから、お互いの呼吸の音や心臓の鼓動でさえよく聞こえる。

ナルは俺の背中に腕をまわして、後ろみごろを握り締めた。

ナルの静かでぶっきらぼうな声も、この体勢と状況だとすぐ傍にある俺の耳には届きやすい。

「……本気、なんだろうな」

「え？」

「本当に、成留を泣かせるようなことはしないんだな？」

「善処します」

なら、とナルは俺の胸を押し顔が見えるポイントまで距離をとる。

「おれは成留の体の中で、あんたがどこまで出来るか、見張ってる」

「ナル」

「おれの助けは、期待するなよ？ 成留がそのままでいられるかどうかは、全部あんたにかかっている。次におれがあんたの前に出てきたときは、…今度こそ本当に最後だからな」

言い終わるとナルは自分から、再び俺にその身を寄せてきた。

条件反射で体を受け止めた時には、成留の鼓動と呼吸はゆっくり規則的なリズムを刻んでいた。

「…サンキューな…かさね…」

消えそうな声で囁いた後…ナルの体が、俺の腕の中で徐々に脱力していくのを感じた。

目元と口元に、確かな微笑みだけを残して。

宵闇色の景色の中で、俺たちの影はひとつに重なっていた。

今にも途絶えそうにチカチカ滅する街灯のすぐ下で、俺は無防備に身体を預けてくる成留の肩を抱き締めながら、そっと彼女の名を

呼んだ。

「…成留」

「…はい」

聞こえてきた声は成留のもので、疑念の色は微塵も見られなかった。ここまでの経緯は記憶として持っているのか…それとも、ナルが都合のいいように書き替えたのか。

「俺、…お前のこと、好きだと思う」

「…。…私も、そう思います…」

…俺は成留を家まで送っていった。

脇に寄せたロードバイクを押しながら、成留をできるだけ右側に寄せて、俺たちは外側線より内側をくつつくようにして歩いていった。

夏を呼ぶにはまだ早い風が、成留のライトブラウンの髪を揺らす。

寒そうに身震いした彼女に、俺は羽織っていたジャケットを肩にかけてやった。

成留は人の良さそうな下がり気味の優しい目付きで俺を見ながら、間延びした声で礼を言つと照れ臭そうに微笑んだ。

その屈託ない笑顔につられて俺も一緒に笑う。

横切る車のヘッドライトが、ふたつの影法師を映し出す。

ナル。お前、憶えてるか？

お前いつつ俺より先に『サヨナラ』を言ってたよな。

デカイ声じゃ言えねーけどさ、俺、ちょっと淋しかった。

だから絶対に俺からは、先に『サヨナラ』を言わないことにするよ。

あの、ひとり取り残されたような虚無感を、成留に教えたくはないから。

## 新しい春にて

新年会が終わってもう1時間経ったというのに、俺たちは会場となったホテルの前で話していた。

理由は産休中の勇輝さんが、龍一の迎えに車でやってきたからだ。

車に乗っても大丈夫なの？ とは思ったが、龍一の話とお腹の大きさを見た限り、ふたりの子供は順調に育っているようだ。

久々の再会に、特に成留なんか何年も会ってなかったかのようにしゃいでいる。

勇輝さんの産休中に柏木さんが結婚したことか、龍一と勇輝さんの子供はどっちだったのかとか、そんな他愛もない会話で1時間も潰せた。

そこに山崎班長の奥さんと佐伯班長の旦那さんが迎えに来て、閑談はまたしても長引いてしまった。

どちらのご夫婦もお子さん連れできたからだ。

「うわー烏丸さん、山崎さんと佐伯さんのお嬢さん…愛ちゃんと舞ちゃんに、すごい取り合いっこされてますね」

「5歳の女の子にまでモテるとは…さすがに俺も知らなかったぜ」

山崎さんの娘・愛ちゃんと佐伯さんの娘・舞ちゃんは龍一の腕をそれぞれ掴んで離さず、メチャクチャ頑張って奪い合ってた。

人間綱引き状態となった龍一はなんともビミョーな顔をしてたが、彼の奥さんは子供のいるお腹を抱えて笑い転げている。

「烏丸さんと勇輝ちゃんの赤ちゃん、男の子なんですって。どっちに似るか、楽しみですな〜。顔だけは烏丸さん似だといいですね」

顔だけは、という部分で俺は思わず笑ってしまった。

確かに龍一の『千人斬り』DNAを受け継いだ男の子は、ちょっと考えものだろう。

願わくは外見も中身も勇輝さんに似ていることを願うばかりだ。

「どのみち美男子は、男にとっても女にとっても敵だからなあ」

「…せめて、ふたりの赤ちゃんの顔見てから、行きたかったな」

成留の何気ない言葉に、俺はちよつとギクツとした。

成留は検査員の才能を買われ、神戸支社への異動が決まっていた。

神戸支社でしばらく経験を積んでから、また本社に戻ることになっている。

神戸支社に転勤すると出世する、という噂があるから、もしかしたら佐伯さん以上に出世街道を突き進むのかもしれない。

先輩検査員としては何ともビミョーな気持ちだ。

勇輝さんの出産予定日は来月14日。

今月中に神戸に行く成留がふたりの子供を見ることは、まずないだろう。

「盆と正月には伯父さんのところに帰ってくるんだろ？ そのとき烏丸家の新居に遊びに行こーぜ。俺と一緒に」

「…かさねさん？」

「なんだよー俺とじゃイヤ？」

成留は笑顔を取り戻し、俺は膨れっ面をする。

あれから俺たちは熱々とまではいかないまでも、自称・恋人同士という立場にまではなった。

ただし社内の人間にはまだ秘密だ。大きな声じゃ言えないが、まあ、恋人になるための通過儀礼は一通りクリアしている。

どこまでと訊かれたら胸張って答えられないけど。

「イヤじゃないですけどー…かさねさんで行ったら、私たちの関係バレちゃうんじゃないですか？」

「いいじゃん。正式に発表しちゃえば。べつに非道徳的な泥沼恋愛してるわけじゃないし、ずっと隠してるわけにもいかないだろ？」

その…これから先のことも考えると、さ

ナルとの約束を守るために。最後に遣わしていった言葉を裏切らないために。

奴との約束くらいは果たさないと、またあいつにバカにされるかもしれないから。

「… かさねさん」

「ん？」

「かさねさん、もしかして『もう1人の私』と会ったこと、あるんですか？」

その質問に俺は文字通り飛び上がった。だって！

『成留は自分が二重人格だってこと、知らないからな』

…のはずじゃなかったのか！？ 話が違う。

「…知ってたの？」

「…ということ、会ってるんですね。…なんとなく、そうじゃないかなー、とは思ってたんです。記憶がチグハグしてる部分もありますし、なんだか自分の認識と周りの認識が違ふところもありましたから」

考えてみれば分かることだった。



ナルも一応は『人』なのだから、100%ということがあるはずない。

消したはずの記憶は蘇り、記憶を間違えて書き替えた可能性だってあるわけだ。

「それに」

言ったら笑われるかもしれないですけど、と前置きしてから。

「慰めてくれる『誰か』が傍にいるような、そんな気もしていませんし」

「へっ？」

「何て言いますか…精霊みたいな何かが自分の中にいて、何かあると慰めてくれていた。そんな感じもしてたんです…あはっ。我ながらなんだそれって感じですよー」

「……………」

俺はただ黙り込むしかなかった。なんだそれと笑い飛ばすこともできなかった。

それはそれで紛れもなく正解だったからだ。

（ナル…自分が大変なことしかしたって、分かってんのか？）

あちゃー、と目を覆っている姿が目に見えるようだった。

「かさねさん、『もう1人の私』ってどんな方なんですか？ 私とそっくりでしたか？」

すっごく興味津々で訊いてくる。

俺はナルの目を頭の中に思い浮かべてから言った。

「…正反对」

「正反对？」

「うん。ぶっきらぼうで、優しくなくて、素直じゃなくて可愛くない男の子」

奴の言う『外』にナルが出てこないのをいいことに、ネット書き込みよろしく悪口を散々に並べて言ってる。

だが成留にとっしてしてみれば『身に覚えのない己の失態』を散々に言われたのと同じだ。赤面してもじもじ俯いてしまう。

「…それは…ご、ご迷惑おかけしました…」

「え？ あ、いやいや。別に成留が悪いわけじゃねーし。それにナルは俺の、その、…大切なダチだから。そのくらいは」

もう会えないんだろうけど、という言葉は口には出さず飲み込んだ。これは、知らない方がいいだろう。

人間綱引きはいつの間にもやら終わっていて、5歳児の好奇心は勇輝さんの大きなお腹にチェンジされていた。もちろん、どちらも龍

一の手を握ったままだったけど。

『お姉ちゃん、お腹大きいね』と愛ちゃんと舞ちゃんが言うと、勇輝さんは『お腹にね、赤ちゃんが入ってるのよ』とママさんぽく言っていた。

対する龍一パパは5歳児のパワーに負けてヘトヘトになっている。

その様子を見ていた年長者陣は、もうひとりの新婚さん・柏木先輩に『幸せ肥りしちゃうよな』とか『最初の仕込みが肝心だからな』とか『まず財布を握れ。嫁さんにはガツンと言っとかないと』とか人生の先輩としてのアドバイスを山崎・佐伯両班長から教えられていた。

山崎さんともかくとして、佐伯さんのアドバイスは夫と妻という性差上、柏木さんに効果はあるものなのでしょうが。

「…かさねさん」

そつと、成留が俺の名前を呼んだ。

かさね…下の名前で呼ばれるのは慣れていたはずなのに、ずっと『松本さん』だったから、成留に名前で呼ばれるとちよっとくすぐりたい。

「私は、ずっと置いてけぼりにされてましたから…立ち止まるまで、追いかけてくれる人がいることに気付きませんでした」

その顔はいつかナルが俺に『成留は渡せない』と言ってきた、あのときの顔にそっくりだった。

それで俺はハツとする。

ずっと置いてけぼりにされ続けて、ずっと誰かに逃げられていた成留。

必死になって追いかけても手は届かなくて、それでも喪うのが怖いからずっと前を見て走っていた。

少し立ち止まって振り返れば、追いかけてくれる人がいて、首を巡らせると周りにたくさんの方がいた…成留はたぶん、やっとそのことに気付いたんだ。

「逃げていたのは、本当は私の方だったんですね」

周囲からの隔絶は、本当にちょっとしたことがきっかけで起こるし、逆にちよつとしたきっかけで無くなることもある。

人間の場合はたとえ『規格外』ではあっても、それが不良品であるとは限らないから。

「…だのに。傍にいてくれて、ありがとうございます」

白く凝る息に溶け込むような囁きだった。

成留は周囲に悟られないよう俺の手をとって、きゅっと指先だけに力を入れて軽く握った。

「…ありがとう…」

本当に、消えてしまいそうな声で。

「…成留」

俺は手を握り返した。凍えた手と手が互いに体温を分かち合って、徐々に徐々に温かくなっていく。

「神戸支社から本社に戻ったら、…一緒の家に、帰らないか」

成留は意味を把握しきれずに、少しの間ぼかんとしていた。

だが俺が言葉の裏に隠した意味に気付くと、頬が色付き始めたリングみたいに赤くなっていく。

「場合によっては、ハッキリしたことは約束できないけど…その」  
一世一代の大勝負の場ではぐらかすなんて、我ながら情けなすぎる  
とは思っ。

けど成留は優しい目付きをさらに和ませて、ほっぺを赤く染めながら頷いた。

「かさねさんさえよければ。…私のような者でもよろしければ、ぜひ」

ハッキリした口調に、俺は本気で空耳じゃないかと疑った。

だから『やっぱりごめんなさい』と言われるのも覚悟で訊き返す。

「…いいのか？」

「はい」

今度こそ、しっかりと頷いた言葉を聞き取った。

「本当に！？ よっしゃ！」

そう笑ってしまったのがマズかった。

表情筋が緩んだのをしっかりと見ていた柏木さんが、上司2人の間を抜けて俺のもとにニヤけた顔でやってくる。

「なんだ何だ？ なーにそんな喜んでんだよ」

聞き付けた山崎さんと佐伯さん、それに龍一と勇輝さんも俺たちの近くに寄ってくる。

俺たちが握っていた手を慌てて離れたのを見逃さなかった龍一が、真っ先に嬉々とした声をあげてきた。

両方の腕に愛ちゃんと舞ちゃん、ぶらさげたまま。

「あー！ さてはお前、成留ちゃんに告白してOKの返事もらえたんだな？ そーだろ」

そーデスがそれは半年前の話だし、非公開のマル秘情報です。

俺たちはふたり揃って言い訳の言葉を搜していた。

だが悲しきかな俺の巡りの悪い頭は、秀才・濱田成留の明晰な頭脳

より回転が遅い。

俺よりも先に理由をつくりだした成留は、いつもの笑顔でサラリと言ったのけた。

「そんなんじゃないですよー。それに松本さん、酷いんです。神戸支社に行く前になにかしてほしいことはあるか、って訊くので答えたら、私のこと笑うんですよ？」

「なっ!?! 成留、お前なに言ってる!?!」

「うわー。かさね、ひっど! そんなだから成留ちゃんにフラれんだよ」

「だ、だからそれは違ってる!?!」

「それで、成留はなんて答えたの?」

勇輝さんの問いにはちよつとだけ間を開けてから、成留は『答え』を捏造した。

それに周りの皆は顔を見合わせて笑う。もちろんその中には俺も入ってる。

「本当にそんなんでいいのか? でもいいよ。みんなも、なっ?」

本当に、ちよつとした要求だった。けど誰かひとりでも反対したら、絶対に叶うことのない願い。

『みんなと、どこか遊びに行きたいです』

ナル。

可愛くて、けど目付きだけは可愛くなくて、それでいてどこかカゲのある男の子。

俺が最初に見た奴の印象は、だいたいそんな感じ。

それは今でも変わっていない。

…ただ、奴と、奴が今まで必死に守ってきた女性は、今では俺の大切な存在になっている。

その点だけを除いて。

了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8603g/>

---

1 + 1 2

2011年3月29日09時07分発行